
ふたおとの足跡

藤堂阿弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ふたおとの足跡

【Nコード】

N45280

【作者名】

藤堂阿弥

【あらすじ】

陰陽師の家系の少女の異世界トリップです。大きな事件が少ない日常（笑）の話です。ほのぼの、というより腹黒魔人が横行しています。逆ハーというほど主人公はもてませんが、男性出現率が高いです。どこかご都合主義的な、どこかで見た風景と展開な話です。二章より、恋愛要素が絡んできますが、黒さもパワーアップしています。

1 話（前書き）

表現は温いですが、R15を付けさせていただきました。
生ぬるい話ですが、お付き合いくださると嬉しいです。

1話

トンネルを抜けると、そこは雪国だった。

校門を越えると、そこは異世界だった。

「へ？」

さっきまで、学校にいたはずだ。いつも途中まで一緒に帰る友人達は、部活だったり、委員会だったりで久しぶりに一人で帰る事になった、そんな日。

ココハドコ、ワタシハダレ？

…いやいやいや。

軽く首を振って、九耀 二藍は大きく深呼吸する。

まずは大きく深呼吸。吸って吐いて、吸って吐いて。そこまでして、こんな状態なのに自身を落ち着かせ、状況を把握しようとする「日常」に苦笑する。

ゆっくりと周囲を見回して溜息を一つ。

辺りはひたすら、木、木、木。いわゆる「森の中」という状態であった。

（クマさんに会いたくはないなあ）

などと呑気なことを考えてしまうのは、もっと危ない状況に陥ったこともあるからだ。命の危険が近くに無い分気も緩む、というものだ。∴その気の緩みが命取り、だとかよく祖父に注意されるので、一応周囲の気配を探ってみる。

しかし、と辺りを見回して思う。つい先程、5分位前には確かに自分は学校に居たはずだ。それが一歩出た途端この光景である。

（家がらみか、本家がらみか…私個人って事はないと思うけど）色々と考えては見るものの、どうも思い当たる節がありすぎてまとまらない。

と、というか嫌な考えが頭の片隅にあるけれど、いくらなんでも、それは無いと即座に否定しようとするが自分自身普通では考えられない世界に身をおく立場なので全面否定が難しい。

それよりも、なによりもまずは確認すべきことから始めるべきだ。（とりあえず、人の気配は無し）

制服の内ポケットから和紙を取り出すと、自分の額に翳して呟く。

「略式。紫炎」

ひらり、と紙が宙を舞い一人の青年が現れた。外見年齢は25、6背まである髪を後ろで緩く一つに縛り、物静かな印象の、物腰の柔らかそうなイケメンである。

彼の姿を見て二藍は思わず安堵の息を吐いた。何に？自問自答するが、答えは決まっている…一人では無い、と言うことと「術」が使える、ということに對してだ。

「手を抜くなと何度…なんだ？ここは？」

出てきた途端、説教をしそうになった相手は、その場の異常さに気付き、警戒するように辺りを見回した。

「紫炎でも解りませんか」

「『解りませんか？』故意に動いたわけではなさそうだな」

ふう、と息を吐く姿はやたら人間くさい。しかし、彼女の周囲の「式神」と呼ばれる存在は、差異はあれど似たような性格をしていた。

式は主に似るもの。

祖父の言葉が頭を過ぎり、やれやれと首を振る。

言わせてもらえるのなら、この紫炎の元々の主はその祖父なのだが。

「それで、ここは何処です？」

「…少なくとも、お前の世界では無いことは確かだ」

うわ、と思わず声が出た。頭の中で一番否定していた「現実」を突きつけられ、頭を抱える。

「とりあえず、様子を見てくる。お前はここを動くな…そうだな柘榴を呼んでおけ」

首を縦に振ると、二藍は鞆の中から先程と似たような和紙を取り出した。

「略式。柘榴」

「…何用だ？…なんだ、ここは？」

同じ台詞を吐いた二人を見比べて二藍は苦笑する。

彼もまた、紫炎とは異なったタイプのイケメンだ。野性的な面差し、短めの髪型は赤い。

「よいか、ここを動くな。柘榴、後は任せた」

そう言くと、紫炎の姿が消える。後に残されたのは呆気に取りられて周囲を見回している式神の青年とその主たる少女。

「柘榴」

二藍の声に、はつとしたように顔を挙げ、傍へと寄る。

「状況の説明は？」

「無理です。校門を出た途端ここにいました」

「術か？」

柘榴の問いに首を振る。転移の術は存在する、しかし、それはきちんとした手順を踏んだ上で行なう術であり一人や二人の術者で出来ることではない。式神という「人外」の存在であれば別であるが、そんな気配があれば自動的に紫炎たちが現れるように術が施されている。

事実、彼らは二藍が召喚するまで現れることもなければ移動した事実さえも気づかずになっていたのだ。

術のための結界も、陣も全く感じる事が出来なかった。自分だけなら兎も角、紫炎や柘榴が気づかない事はありえない。

「第一、それだけの力の持ち主なら、紫炎や柘榴を封じることのほ

うが容易いと思うんです」

ふむ、と声がして柊榴が周囲の気配を探る。彼女の式神は皆そうだ。彼女が命じる前に行動を起こす。それは二藍自身が、他者に「命じる」事を嫌うことに由来する。

大きく息を吐き、彼女は鞆の中から札を出そうとして、柊榴に止められた。

「俺が居るんだ、結界は必要ない。体力は温存しておけ、何が起こるかわからんからな」ああ、帰ってきたか」

柊榴が向けた視線の先に、紫炎が現れる。

「結構大きな森の中だ。周囲：およそ10キロ、というところか。その先に集落がある：少なくとも外観はお前達と同じ『人間』だが、生活様式、というか文化は違うようだな。お前の知識で拾うなら、ヨーロッパ中世、が一番近い。ちなみに、お前のようなアジア系の外見の持ち主もいなかった」

「：なんてお約束な」

二藍とて女子高生だ。ファンタジー小説や漫画は嫌いではない。特に某異世界召還もののコミックスは愛読書であつたりもする。

「：普通なら、迎えが来たりするものですよね：イザークみたいな」
「お前、漫画の読みすぎ」

呆れたように柊榴が溜息をつく。

「しかし、ここに呼び込んだ外的要素があることは確かだろう？」
紫炎の言葉に、二藍は軽く首を傾げた。痕跡が何も感じられない術を外的要素と言っているのか。
それを伝えると紫炎も難しい顔をする。

「とりあえず、術は使える。俺達もいる。：少なくとも同一次元内

「つまりこの世界の中ならある程度、移動は可能だ。流石にお前を連れての移動はできないが、どうする？」

「どうするも何も、少なくとも文明圏内で様子を知る以外どうしようもないだろう。」

「集落へ向います。それしか方法はなさそうですし」

『その必要は無い。迎えに来た』

突然負って沸いた声に、紫炎と柘榴がはっとしたように身構える。

フードを深々と被った姿を見せた相手は、声だけならば未だ年若い青年のようだった。

2話

紫炎も柘榴も無能ではない。むしろその逆だ。それは主である二藍が一番良く知っていることだった。

その二人に気配すら感じさせずに現れた相手に、彼女は軽く眉を寄せる。

「貴方が私達をここに呼び寄せた方ですか？」

『この場合、答えは否、です。貴方達を呼び寄せたのは私ではない』

不思議な感覚だった、話している言葉は全く知らない言語なのに意味は通じる。二ヶ国語放送を同時に聞くとこんな感じになるのかもしれない。

「我らを呼んだ理由を聞かせてはもらえぬか？」

不機嫌さを隠そうともせず紫炎が相手へと視線を向ける。フードを外した人物は：やっぱりお約束のような美青年だった。

『誠に申し訳ないが、一緒に来てもらう以外、説明できない状態です』

ある意味一種の脅迫だ、と二藍は溜息を一つ零した。傍らの二人を見上げると軽く肩を竦める動作が返って来る。

いわく、好きにしろ、だ。

二人が気づかないうちに現れることが出来るというのは、相当の実力者なのであろう。ならば、ここで逃げても同じこと。

「伺わせていただきます」

満足そうに青年は頷くと二藍たちに近づいてきた。庇うように二人が彼女を自分たちの影に隠したが、それに気を悪くした様子も見せず、不思議な韻律の言葉を紡ぎ、宙に複雑な文様を描く。

次の瞬間、彼らは大きな部屋に移動していた。

『よく、参られた』

声のしたほうに顔を向けると、壮年を少し過ぎた男が椅子に座り、その後ろを10人ほどの男女が立っていた。

『ご苦労だった、キース』

声を掛けられた青年は、軽く頭を下げると男の横に立つ。

『まずは、お詫びする。我が学院の生徒が、迷惑をかけた』

男の言葉の後に続くように、後ろの男女が泣きそうな顔で頭を下げる。

首を傾げる二藍に男は、後ろの男女を指す。

『貴方たちが、ここ……セラフィークに来たのは、彼らの魔法が原因、だ』

偶然に偶然が重なった事故。そう彼らは説明した。

端的に言ってしまうえばそれまでだが、巻き込まれた身としてはそれだけで済まされることではない。

発端は魔法学院に通う学生達の議論だった。それがいつの間にか論点をそれ、どちらがより強い魔力を有しているかという争いになってしまったのは若さゆえ、なのだろう。

そして、本来なら綿密に場所を特定し、周囲に知らしめてから行う

移動の魔術を発動させてしまったのだ。

こういった事態を防ぐために、通常なら結界をどこしてある学院であつたが、結界の修復と補強の為に通常より弱い状態になつていたのだ。だが、異常な波動に気が付いた教師がすぐにその発動を止めた。

長い詠唱を必要とする上級魔法は、それなりの波動も発生する。

しかし、通常であれば同一次元のみ働く魔法が、どこをどう間違えたのか違う次元と対応して、発動されてから止められる一瞬…その僅かな時間に二藍がその魔法に引がかつてしまったのだ。

…魔法が閉じた後、何か異常を察知したキースが探つて彼女達が次元を移動したことが発覚したのだ。

術自体が未熟であつた為、同じ魔法の発動は敵わず、前例が無いため帰す方法も、位置関係すらもわからないのではどうしようもない。

そう話を締めくくると男は後ろに居た男女に退出を促し、横に居た青年に一言二言囁くと『失礼する』と彼らに声を掛け部屋から出て行った。

『申し訳ない、どうぞ我が家にご案内いたします』

青年に視線を移すと、彼は小さく苦笑を見せる。

『この世界での生活が落ち着かれるまで、皆様には私の屋敷でお過ごしいただくことになりました』

「俺達も『人』のうちに数えられているとはな」

「我が家」と指すにはいささか　かなり大きな青年の屋敷で、彼らはそれぞれ隣り合った部屋に案内された後、二藍の部屋に集まった。

呆れ半分、苦渋半分の紫炎の言葉に、他の二人もそれぞれ複雑な表情をする。

「式神という存在や概念がなければ無理からぬ事だと…お二方とも、実体もおありになりますし」

少女の言葉に、それもそうだと同意すると、何を思ったのか紫炎は自分の掌を見つめる。

「しかも、ここの場合は俺達を安定させる作用があるようだ。力を使うにもほとんど負荷を感じることもない」

普段であれば、その負荷は自分たちと使役者である二藍に掛かってくる。

「その方がいいだろう。何かあつてから呼び出されたのでは遅い」
「とはいえ、常に身近にいられないというのも考え物だな」

柘榴の言葉に、紫炎は考えるように黙り込んだ。現状が把握できない以上、迂闊に二藍に術を使わせることは避けたい。

「しかし、気付いたか？あの男名乗りもしなかったぞ。我々の名も聞きもしなかったが」

謝罪も最初の一言だけ。本来なら自分たちで詫びなければいけない張本人たちは後ろで居心地の悪そうな顔をして立っていただけだ。

「注意するに越したことはない、と言うことだな…誰か来る」

軽いノックの音に二藍が返事をする、キースが侍女を伴ってやつ

てきた。侍女が引いてきたワゴンの上には食事が乗せられている。

『急なことで、お持て成しもできませんが、食べてください』

言われて、二藍は急に空腹を覚える。…とはいえ、素直に礼を言つて食べ物に飛びつくような躰も受けていない。

『毒は入っていませんよ』

くすりと笑つてキースが言う。毒見をしようかという相手に、流石にそれは失礼だと頭を振つて、侍女が取り分けてくれた小皿を受け取り口に運ぶ。

「あ、おいしい」

素朴で正直な賛辞に侍女が嬉しそうに微笑む。本来なら食事をする必要が無い紫炎と柘榴だが、実体化しているためエネルギーの補給のためにと食事を口に運んだ。

「ごちそうさま。美味しかったです。残しちゃつてごめんなさい」

『ゴチソウサマ、とは?』

結局一緒になつて食事をしたキースが不思議そうに首を傾げる。意味が通じないことは、そのまま「音」としてしか伝わらないことがこれで判明した。

「私の住んでいた国の挨拶っていうか、風習です。ご馳走になりました、ありがとうございます。つて」

ほう、とキースは感心したように呟くと同じように『ゴチソウサマ』と口にする。

先ほどの広間での印象とは違い、明るい表情をしていた。表情の変わらない冷たい印象から一変して、好奇心の強い好青年、といった感じだ。

「いくつか、お聞きしてもいいですか？」

お茶を淹れると侍女はワゴンを引いて去っていった。ハーブティのようなそのお茶は、少しクセはあるが飲み辛い、と言うほどでもない。

『答えられる範囲でよければ』

最初からしつかり線引きをするあたり、この青年の普段置かれているであろう立場がなんとなく読めてくる。

「まず、言葉です。音としては私達が使っている言葉と全く違うのに、何故意味が通じるのか、ですね」

『場を作つてあるからです』

「場、ですか？」

そうですね、と頷くとキースは口元に手をやり、暫く考えていたがおもむろに口を開く。

『魔法、という方法、または概念はあなた方の国にありますか？』

「魔法、ですか。先ほどの方もおっしゃっていましたが、言葉として意味は通じます。しかし、私が住んでいた国では御伽噺の世界の話です。実際に使える人に出会ったことはありません」

あくまで、「魔法」としての話ではあるな、と紫炎は思い、柘榴は複雑な顔をした。しかし、視線を二藍に合わせているキースは、そんな二人に気が付かなかった。

『それでも構いません。意味として通じるということは、共通の思想に近い意味がある、ということですよ。解りにくい言い方をして申し訳ありません。…つまり、この屋敷全体に言葉が通じる魔法を施してある、そう思ってもらえれば十分ですよ』

魔法使いに異次元…ほんと、ファンタジーの世界だわ、と二藍は心の中で呟く。

『ああ、いけない』

はつとしたようにキースは言うと、立ち上がり優雅な動作で頭を下げる。これがこの礼の取り方なのだろう。

『正直、どこまで音をとっていたただけるか解りませんが。改めて挨拶いたします。私の名はキーリアル・ロイド・ファリスと申します。セラフィークの宮廷魔道師を勤めさせていただいております。どうぞ、キースとお呼びください』

「あ、二藍です。フタアイ・クヨウ。彼らは私の兄も同然の人たちです」

「紫炎、と申す」

「柘榴だ」

フタアイ、シエン、ザクロ…数回口の中で呟いてキースは笑顔を見せた。

「皆様色のお名前なのです。そんな響きがございます」

「おや？」と二藍は首を傾げた。言葉が先ほどとは違いそのまま響いてくる。まるで自分の耳に入る前に日本語に訳されているかのようにだった。

彼女の表情に気が付いて、キースは笑顔を深くする。

「名乗りあったからです。名前は固体を意味し、確定する。お互いに名乗ったことで私の魔法がよりあなた方に繋がったということです」

ほんの一瞬紫炎の瞳に影が差す。ほんの一瞬のことでキースが気付いた様子はなかったが、付き合いの長い二藍と柘榴が気付くには十分だった。

「我々の今後はどうなるのだ？」

先ほどの影を全く感じさせず、紫炎が問うと、キースは困ったように首を振る。

「一応陛下には、私と先ほどお会いになった、モナド総長…魔法学院の院長で私の魔法の師でもある方ですが、二人からお伝えしてあります。何分前例の無いことですので、すぐにはご返答できかねま

すが、私の名誉にかけて悪いようにはいたしません。今しばらく、この屋敷でお待ちいただくようお願いいたします」

苦渋に満ちた表情で言うキースに、気にしないでくださいと少女は笑顔を見せた。ほっとした顔をした彼の元に王宮から至急の呼び出しとの連絡が入り、彼は何度も詫びながら、部屋を後にする。

「さて…」

ゆつくりと部屋の中を見回して、紫炎は気配を広げる。

「そこまで悪党ではなさそうだな。なんの波動も感じられん」

「質が違うのに大丈夫か？」

柘榴の言葉に、男は笑う。キースの魔法の波動なら、先ほどの自動翻訳で十分分析した、と。

「とはいえ、相手は宮廷魔道師：海千山千のしたたか者と考えて問題はないだろう」

「名で固定する、か。怖い話だ」

ふ、と柘榴が笑いを浮かべる。

「暫くは静観だな…どうでるか。迂闊に術を使わぬようにな」

頷き返す二藍に笑顔を見せて、式神たちはそれぞれ自分の部屋に帰っていった。

ちゃんと扉を開け、自らの足で歩く。

自宅では決して見ることの無いその姿に、二藍は小さく笑った。

3話

眠れない。

目を閉じてベットに横になっても一向に睡魔は自分の下に降りては来なかった。

短時間の間に色々あって、体は疲れているはずなのに、少しでも休んでおかなくてはいけないのに、眠ることができずに居る。

イケナイ。

頭の中で警鐘が鳴る。

カンガエテハイケナイ。

しかし、一度動き始めた思考の波は留まることを知らない。

…どうしているだろうか。

祖父は父は母は弟たちは。

突然気配を消したのだ、心配していないはずはない。だが、何の前触れもなく突然消えた自分たちに家族がどう判断し、対応するか…。

もう二度と会えないかもしれない。

家業ゆえ、どこかで覚悟していた「ソレ」が現実となるなんて考えてもいなかった自分に半ば驚く。いや、考えてはいても現実として

認識していなかったのだ。

とたんに自分に襲い来る寂寥感。そして罪悪感。

紫炎、柘榴。

解っているのだ。自分さえいなければ、自分が開放さえすれば彼らは元の世界に帰ることが出来るかもしれない…少なくとも自分が居る限り彼等は動くに動けない。

自分が彼らを繋ぎとめて…いや、縛っているのだ。

うつ伏せになって声を殺す。泣く権利など、泣いていい理由など自分には…。

「莫迦…が」

そつと頭に置かれた二つの手は、ゆっくりと二藍の髪をすべるように流れていく…何度も、何度も。

「我らがお前の元に下ったのは我らの意思。道節に頼まれたわけではないと、何度言えば理解する？」

笑いを含ませた声に、少し怒りを含んだ声がかぶさる。

「何を考えているか凡そ想像はできるけどな。お前忘れていないか？俺達の契約。それに何より、俺は…俺達は、お前の傍がいいんだからさ…何処よりも何よりもお前の傍が一番なんだからよ」

そつと顔を上げると、呆れを含んだ笑い顔と、半分照れたような、怒ったような顔があった。

片方の手が、二藍の頬をそつとなで涙を拭いていく。

「…ありがとうございます」

小さく震える声で言うと、片方の手は再び頬をなで、もう片方は頭を軽く叩く。

彼らがいなかったら、一人飛ばされたこの世界で、心が壊れていたかもしれない。

「ありがとうございます」

もう一度、今度は先程よりしつかりした声で言うと、二人の気配が柔らくなる。

「もう寝ろ」

少し照れたような口調で柘榴が乱暴に頭をなでる。

「眠りに付くまで傍にいるから、安心するがいい」

軽く敷布を叩いて紫炎も言う。

ベットの両脇に浅く腰を降ろし、青年達は笑顔を見せる。二人を見比べて「おやすみなさい」と呟き、目を閉じた。

少女が規則的な呼吸を始めると、式神たちは、そつとその場を離れる。

「それで、『渡り』はできそうか？」

ベットから離れたといっても、二藍の部屋から出る事無く、彼らは少し離れた場所で壁に背を預けながら話す。

柘榴の問いかけに、紫炎は軽く首を振った。

「渡りはできよう…しかし、『ここ』の位置が把握できない以上迂闊に動けん。下手をすれば、どちらにも戻れなくなる可能性があるからな。渡りの得意な颯我辺りならできようが…」

颯我とは、二藍の祖父である道節の式神である。風を属性とする彼の式神は異空間を自由に移動する能力がどの式神たちよりも優れていた。

「せめて二藍の無事だけでも伝えてやりたいが…こいつの傍を離れるという選択であるなら、俺はせぬ」

「当たり前だ。二藍の傍を離れるなんて問題外だ」

「それに…」

言いよどむ紫炎に柘榴が不審そうな視線を向ける。それに軽く首を振って式神の青年は、眠っている二藍の方へ視線を移した。

「いや、まだ確信が持てないからな。ちゃんと解ったらお前に言う。勿論、必要とあれば二藍にも話す」

彼らが、部屋から出てその気配が完全に消えると、眠っていたと思われる少女が目を開ける。

暗闇の中、暫くじつと何も無い空間を見つめ、やがてゆっくりと息を吐いて小さく呟く。

その呟きは誰に聞かれること無く、闇に中に解けていった。

4話

翌日、朝食を食べている時に戻ってきたキースは、やはりその時も共に食事をし、その後この屋敷内ならば自由にしてもいい、と彼らに伝えた。

「入っていけない場所は基本的にありませんからね。ですが『敷地』の外には出ないでください。まあ、正直結界という手も考えましたが、その必要はないかな、と思いまして」

「随分と我らを信用しているのだな」

くすり、と笑う紫炎に少し困ったようにキースは溜息を吐いた。

「本気でおっしゃってはいませんね」

「この屋敷の敷地内のみでしか言葉が通じねえんだ、何処にも行けやしねえだろう？信用も何もないじゃないか」

柘榴が半ば吐き捨てるように言う。

「あゝ、それよりも、ですね」

険悪になりそうな雰囲気、二藍は二人の間に割って入ると、キースに視線を向けた。

「敷地内、って事はお庭もいいんですか？」

「もちろんですよ」

にこり、とこの屋敷の主は笑顔で応える。

「よろしければ案内させましょうか？」

是非、と頷く少女に笑みを深くして彼は呼び鈴を鳴らした。

二藍が侍女に連れられて部屋を出ると、紫炎と柘榴はテラスへと移動する。その後をキースが続いた。

「それで？」

庭を侍女と談笑しながら歩く少女を視界に入れたまま、紫炎は口を開いた。

「我らに話があったのではないのか？」

軽く目を見開いた青年ではあったが、首を2、3度振ると、彼らに顔を向けた。

「昨夜、二藍は『魔法』は無い、とおっしゃった。では、貴方方から感じるこの波動が何なのか教えて頂けませんか？」

自分へと向き直る紫炎の視線を受け止め、キースは言葉を続ける。

「私を感じたのは次元の揺らぎではありません。…あれは、モナドへの建前に過ぎない。私を感じたのは純然な『力』です。我らの使う『魔力』とは似て非なる力、それを感じあの場に行きました」

「…尊称が抜けているようだか？」

皮肉気な笑いを浮かべる紫炎にキースも同じような表情を浮かべた。
「一応私の師、と言っではいますが、あの男に教わった事などありませんよ。魔法学院の総長などという役職についていながら、たいした力の無い無能者です」

「…お前も結構言うねえ。そっちが本性か」

柘榴の言葉に返ってきたのは、静かな笑顔だった。

「…うわ、黒」

呆れたような柘榴の呟きにキースの笑いが深くなる。

「我らが使うは『人間』あらざる力…元々の世界では異端とされるものだ」

キースの眉が微かに寄せられる。それを見て紫炎は考えるように俯くが、すぐに顔を上げる。

「生まれながらに持つものも居る。長い修行の果てに得るものも居る。しかし、この世界のように学問として定着して居るわけではない。むしろ、忌まれ、排斥される『力』だ。過去に多くのものが持つて居なくても疑われただけで迫害され命さえも落とした。普段は決して表に出さぬ力だ」

「この世界では、当たり前前にある力です。しかし、きちんとした魔力を得、使いこなすためには相応の修行が必要となります、それゆえ『魔法使い』は敬意をえられるのです。ならば、ここは貴方方にとつて少しは暮らしやすい場所になるかもしれませんね」

「だが、『質』が違うのだろうか？すぐに判ってしまうんじゃないのか？」

「申し上げたはずです。大した力の無い者に『質』の違いなどわかりはしませんよ」

柘榴の台詞に、黒い笑みを浮かべたままキースは応じた。

「どうせ、報告はせぬのだろう」

「勿論です」

キースは頷くと庭の少女を目を細めて見た。

「あなた方が持つ我らと異なる力は、ある意味脅威となる。そうすれば国も黙ってはいません。…しかし、あなた方は脅威にはなりえない…違いますか？」

「その根拠は？」

「彼女です」

その時、まるでタイミングを見計らったように自分たちに気づいた二藍が大きく手を振る。それに青年が手を振り返し式神たちも軽く

手を上げて応える。

「彼女の安全が保障される限り、貴方方は我らの『敵』となりえない。ならば、あの莫迦に余計な手柄などくれてやる気は無い……それだけです」

青年の二藍を見る目は優しい。

「結構私もね、彼女が気に入っているのですよ。幼いゆえかも知れませんが、右も左もわからぬこの世界に飛ばされて気丈に振舞っていらつしやる……その真つ直ぐさを大人の勝手に壊したくはありませんからね」

東洋人は幼く見られるとよく言われるらしいが、この世界でもそれは通じるらしかった。彼女は彼が考えているほど幼くも、真つ直ぐでもないのだが、好意的な誤解をわざわざ正す必要もない。

顔を見合わせて笑う彼らの様子をキースは自分の考えが当たっていると考えたようだった。

「この結界は我らの意志の疎通を図ると同時に、外部からの干渉も防ぐ役割を持っています。同時に内部の干渉も。ですから、貴方方のお力がどうであれこの中では力を使えない……違いますか？」

両手を挙げて紫炎が同意を示す。昨夜彼が言いたかったことはこれか、と柘榴は納得した。極力『人間』らしく振舞っていたのは他者の目を欺く為かと思っていたので、自分もそれに倣っただけだったのだが、迂闊に使わずにいて良かったと内心思う。

「まあ、結界が無くとも貴方方のことを気づくものは私以外いませんからね、外すことも構いませんが、いかがされますか？」

大した自信だと紫炎と柘榴は苦笑したが、それだけの自信があるのだろう。

「今はいい……必要となれば頼みはするが、外部からも守ってくれる

のだろう?」

勿論ですと頷く青年に、紫炎は笑ってみせる。

「我らは二藍が無事ならばそれでいい。お前の思惑がなんであれ、な」

男達が密約を交わす中、二藍も侍女から色々な話を聞いていた。マーシャという名の彼女は親の代からこの家に使えているということ、で色々なことを知っていた。

「じゃあ、キースさんは伯爵様なんですか」

「はい、先代の伯爵さま…キースさまの伯父さまに当たられる方が独身のまま亡くなりましたので、ご養子に入られたんです。キースさまご自身のご生家は侯爵家にでいらっしゃるんですよ。そこらは兄上さまが既にお継ぎになっていらっしゃいます」

少女の部屋に飾るべく花を摘みながらマーシャは物珍しげに庭の花々を覗き込む少女に好意的な視線を送る。

昨夜当主が「大切な客人」として連れてきた一行は、来ている服装こそ見たことの無い姿ではあったが、物腰は穏やかで、召使達にも丁寧な対応をする人物達であった。

先代の伯爵の頃より少なくなったとはいえ、それなりに多くの賓客をもてなしてきたが、彼らほど手の掛からない客人は初めてだった。

こちらが何かすると、きちんと礼の言葉が返ってくる、片付けや支度をするときも邪魔にならぬよう部屋の隅で大人しくしている、相

手が誰であろうとも丁寧に対応する。

同じ身分の者同士でもなかなかしない行動を、相当な高位（と、労働に慣れていない手や、足などから推測した）の生まれの彼女が自然に行って見せるのだ。使用人を人間として見ない貴族の多くを（もちろん、キースは例外だが）見てきた彼女が、短時間で二藍に好意をよせるには十分すぎる理由だった。

だから、普段より口が軽くなっているのにも本人は全くの無自覚であつた。

「本来ならば、旦那様は『筆頭』の役職がついてもおかしくない実力の持ち主でいらつしゃいますが、周囲の推薦を固辞していらつしゃるんです。理由をお聞きすると『面倒だから』とおつしゃって……」
今の王家は大きく二つの派閥に分かれていてとマーシャは話した。
片方は皇太子を筆頭にした一派、コレが主流ではあるが、もうひとつ、王弟を中心とした一派があるらしい。

「今の陛下は側室のお生まれでいらつしゃいますので、どうしても前陛下の正妃の御子でいらつしゃるウエリントン公が正当な王だという者達がいるのです」

しかも、その筆頭がキースの生家である侯爵家の当主だと言つのだ。

「旦那様ご自身、皇太子殿下がご幼少の時、同い年という事もあつて遊び相手として王宮に上がっていらつしゃったので、どちらにもお味方できず困っていらつしゃるのです」

「…なんだそうですよ」

「きな臭い話だ」

深々と息を吐いて紫炎は呆れたような笑いを浮かべた。

「どこにでも転がっていきそうなお家騒動ではあるけどな。まあ、我らには関わりの無い話したが…ああ、そうだ二藍」

先程のキースとのやり取りを聞かせると、彼女も困ったような笑顔を浮かべる。

「『質』の違いですか…嘘ではないですけどね。じゃあ、私は使わないほうがいいですね」

「どちらにしても、基本『符』が無ければ使えまい？」

二藍の使う術は『符術』媒介となる符紙がなければ基本普通の少女と変わらない。

とりあえず、符は常に身近に…鞆の中に入っているので心配はないが、この国の服では持ち歩くのは難しそうだ。すん、とした形のワンピースにポケットは無い。

「自分で作るしかないかなあ。隠しポケットとか…衿の合わせみたいのとか…」

四次元ポケットが欲しい

小さく呟いた、某アニメのキャラクターの名前に青年達は呆れたように息を吐いた。

4 話（後書き）

お気に入りのご登録ありがとうございます。

話に区切りを付ける為に章ごとに分けることにいたしました。
これからよろしくお願い致します。

5 話

「いつ術が使えないことに気が付いたんだ？」

もつともな柘榴の問いに紫炎は苦笑を返した。

「一度『符』に戻ろうとしてできなかった…弾かれた、というわけではない『力』そのものが発動しなかったからな」

「…ったく」

そういう事は早く言え、と心の中で呟いて、柘榴は二藍の方へ視線を移した。

この世界に来て三日目、周囲の大人達（主に屋敷の召使たちであるが）の生暖かい視線の意味を紫炎に聞かされて、少し落ち込んでいた彼女だったが、相手の誤解を利用して、今はマーシャにこの世界の基本的な常識を教えてもらっている。

主であるキースから、どういう説明を受けているのか、はたまた、この世界では二藍の誤解されている年齢層では基本的なことを何も知らないのが当たり前なのか、彼女は色々と少女に問われるまま、話して聞かせていた。

彼らがいるセラフィークは、いくつかの国々がある大陸のほぼ中央、海に面した気候の温暖な国である。

産業の主は交易と漁業、農業、林業で、大陸の中では歴史が古いわりには、国土の大きさは建国当時と同じというこの辺りでも稀有な存在らしかった。

後方に険しい山脈と、国境を意味する東西の大きな河のおかげで、

小競り合いはあるものの、近隣諸国とは友好的な関係が、ここ百年ほどは続いているとの事で、マーシャ曰く3代ほど賢帝が続いているおかげだとの事だった。

…国内の騒動は、この場合目を瞑るとして。

とりあえず、今現在において平和で穏やかな国と言えるらしかった。

「…そんなはず、あるわけが無いでしょう」

夕食後（なんだかんだと、食事を共にするキースを見て、マーシャがこっそり教えてくれたことが、彼がこれほど早く帰って来て食事をする事など、年に2〜3回あるかないからしい）少女に果汁を、自分たちは酒を飲みながら、昼間の話を聞いた彼は軽く肩を竦め苦い笑いを浮かべた。

「確かに表向きは平和ですよ。…この国が他国の侵攻を受けないのは、これといった主産業がないだけです。経済的に貧しくは無いですけどね。自給自足が成り立つ、というのは国土の広さではなく人口の低さを表しているにすぎないということです」

アルコールの勢いも手伝ってか、いつもより饒舌なキースの言葉を、紫炎と柘榴は酒を傾けながら静かに、二藍は興味深そうに聞いている。

「建国当時と国土の広さが変わらない、人口も大きな変化が無い…大きな戦争にも巻き込まれていない…実に結構な事だと思いますよ。」

ですが、内部はドロドロだ：特に今は」

複雑な事情を身の内に抱える青年は、彼らが自分の事情に無関係だからこそ彼らを優遇し、腹のうちを見せる。

それは、彼らが自分の庇護の下にあるという優越感も伴つての事であつた。多分、普段の彼ならばアルコールの力でも、こんな風に心情を暴露しないだろう。

それ以前に、そんな相手を前にしてアルコールを摂取するとも思えない。

「馬鹿な連中です：あのお方は王位など望んではいらつしやらないのに」

小さく、呟くようにぽつりと漏らされた言葉に少女は、おや？と瞳目する。

「：少し酔つたようです。先に休ませてもらいますね」

無邪気な笑顔を見せて二藍が「おやすみなさい」と言うと、青年はその頭をなでて笑顔を返す。

「：呆れたヤツ」

キースの気配が完全に消えたのを確認して、呆れたように呟く柘榴に少女は唇を尖らせた。

「いや、だって期待には応えないと」

「何が期待だ…誤解を良い様に利用しているだけじゃないか」

今更ではあるが、二藍の生家は陰陽師とか、退魔師とか呼ばれる副業を持っていた。

表立って公表できる職業ではないソレは、幼い頃から二藍の行動を大きく制限していた。遊び相手は『護役』として祖父がつけた式神たち。

しかし、それ以前に彼女の育った環境が彼女自身の「子供時代」を奪っていた。

「皇太子派、と見せかけて王弟派ですか…気苦労多そうですね」

「お前が言っとな」

柘榴に不満そうな一瞥を与え、少女は大きく息を吐く。それに視線を向けてきた紫炎に小さく苦笑を向けた。

「私達の面倒を一生見ても、十分余裕がある財産をお持ちのようですが、いくら何でもそうそうご好意に甘えている訳にはいきませんか」

「いいんじゃないか？そもそもあつちの下手際なんだし」

「働かざるもの食うべからず、ですよ柘榴」

彼女の祖父の口癖に、流石の柘榴も考え込む。確かにこのままで良い訳は無い。

「向こうに戻るなら兎も角、こっちに一生いるのなら考えねばならないな」

口を噤み、暫く三者三様の思考に入り込む。やがて、大きく息を吐

いて二藍が顔を上げた。

「とりあえず、この世界で生きていくには何が必要か…どうすればいいのか知らなくては話になりませんね」

自分たちが生きていた世界のように戸籍だのなんだの必要ならば、何らかの働きかけもなくてはならないだろう。

視線だけ扉に移して、紫炎が口を開く。

「暫くの間はやっかいになるしかないな。ここでの常識とやらも身につけなくてはいけないからな」

「どんな状況にあっても、まず生きること、理解すること…諦めないこと。本当にお二方が居てくださって良かった」

二人の式神たちの間に入って、その腕を取る。普段滅多に甘えることはしない少女の珍しい姿に、表には出さない不安さや恐怖を感じ取って、彼らは二藍をそっと抱きしめた。

「ところで」

その体勢のまま、紫炎が呟く。

「気が付いていたか？」

微かな動作で二人は頷いた。部屋の外にあった気配。彼らが寄り添った時点で去っていったが、微かに香ったアルコールの香りが、それが誰かを知らしめていた。

どうやら、途中で用事があって引き返してきたようだったが、入るに入れなくなり再び戻っていった…キースの行動が目に見えるようで、彼らは顔を見合わせ息を吐く。

「意図したわけではないんですが」

二人からそつと身を離し、少女は小さく笑う。

「同情、誘えましたかね？」

舌を出し、てへ、と笑う彼女に式神二人が大きく溜息を吐いたのは言っまでも無い。

6 話

それは、一見腕輪に見える物だった。

外見的には、バングルに似ているが継ぎ目が全く無い。しかも、金属ではなく磨きぬかれた自然石に見える。

「これは？」

ここ数日食事に現れなかった青年は、少しやつれた顔に会心の笑顔を浮かべて彼らに『ソレ』を見せたのだった。

「貴方たちに、この屋敷の外を…この国を見ていただきたいと思い作りました。これを身に付けていらつしやれば屋敷の中と同じように言葉が通じます」

「自動翻訳機みたいなものですか？」

「ジドウホンヤクキ？…別の国の言葉が自国の言葉に変わる道具ですか？然り。それと同時にお二方の『力』もわが国の魔力に擬態できるようにしてありますので、お使いになっても問題ありません」

「えらく便利なものを作ったな。目の下の隈はそのせいかな？」

紫炎の言葉に青年は苦笑のみで応える。心配そうに自分を覗き込んだ二藍には穏やかに微笑んで見せた。

「魔法の研究中にはよくある話です。どうかお気になさらずに。それに別目的もちょうとありますから」

訝しげに自分に視線を向ける柘榴に、キースは人の悪い笑みを浮かべる。

「貴方方の『力』を感じ取れるほどの魔力の持ち主は極めて稀、です。自分を過大評価するつもりはありませんが近隣諸国で、貴方方の力が異質だと感じられるのは私くらいだと思います。ですから、

見てみたいのです。貴方がたの『力』を」

「マッドサイエンティスト」

ぼそり、と二藍は呟いたが、正確な意味は伝わらなかったらしい。につこり笑顔で「探求者？そうかもしれません」などと返って来ては笑って誤魔化すしかない。

「一度填めると外れない、なんて事はないよな？」

「そこまで堕ちてはいませんよ。第一寝るときや入浴時に邪魔になるでしょう？」

柘榴の言葉にキースは肩をすくめた。ふん、と鼻を鳴らすと青年はそのうちの一つを取る。深い赤、彼の名の色。

填めた途端、それは彼の腕の太さにぴたりと合った。外そうすると、緩く広がってあっさりと抜ける。

「ある程度意志に反応するようになっていきます。ただ、力の質がよくわからなかったので、三つとも同じ仕様になってしまいました。問題は無いと思いますが、何か異常を感じたら外してください」

紫炎も二藍もそれぞれの色をとる。淡い紫色と深い紫。

「凄いです。…私の名前は日本独特の色なのに、よくお分かりになりましたね」

「漠然としたイメージでしたが…紫炎殿が明るい紫の色合いでしたので、少し深い色にしてみました。お気に召していただけで幸いです」

少女の名前は紅花と藍の色素から作る色に由来する、その配合で色々なパターンの紫になるが、基本的な色としては、今青年から渡された紫に近い。

しかし、彼女の名の内に秘められた願い。愛（喜び）も哀（悲しみ）も全てを呑み込んで生きていつて欲しいという彼女の祖父の願いまでは気付くことはないし、彼らも青年に話す気はない。

「試してみしよう。私が傍にいれば何とでも誤魔化せますから」

青年が指を鳴らす。

何かに気がついたように紫炎と柘榴が顔を上げ、それにつられた様に二藍も顔を上げる。

「え、とキースさん、一つお聞きしてもいいですか？」

どうぞ、と青年が視線で促せば、少女は周囲を見回しながら幾分声を小さくした。

「最初の頃、おっしゃってましたよね。転移の魔法は入念な下調べと、魔力、それに長い詠唱を必要とする、って」

「はい」

実際に見た彼の魔法を思い出す。

「この国の魔法って、詠唱がいるんですよね？あと『陣』も」

「はい」

につこりと笑顔を見せる青年に、疲れたように柊榴は少女の肩に手を乗せた。

「…それだけの魔力の持ち主だってことを証明してみせたんだろう？自分で張った結界位、無詠唱でも消すことなど訳は無い、ってな」
「はい」

にこにこと嬉しそうな青年に紫炎ですら溜息を零す。
自分の想像以上の魔力と腹黒さを併せ持つ青年に、二藍は引きつった笑顔を向けるしか術は無かった。

「ふむ」

自分の手の中の球を見て紫炎は微かに微笑んだ。

「雷、ですか」

自然現象はこの世界も共通のものだったようだ。彼の手の中で微かに音を立てている放電現象に、キースは目を見張る。

「術の形態に差異はあると思うが…流れとしてはどうだ？」

「大丈夫のようです。自然の力と同様の『術』ならば、我等が使う魔法と殆ど差異はありません。目くらましの術など必要なかったですね」

しゃべりながらも青年の視線は紫炎の掌の放電に釘付けになっている。

もういいか？との紫炎の言葉に首を縦に振るとキースは暫く黙り込んだままでしたが、すぐに口の端を少し上げると、小さくなにか呟いて掌を上にもける。

「ほう」

「へえ」

「…凄い、です」

青年の掌に浮かぶのは、先程紫炎が見せた放電現象だった。

「たいしたものだ。もう自分の魔法に応用したか」

「原理がわかれば難しいものではありません。こうすることもできます」

庭に向けてそれを放てば、いくつかの稲妻となって木の葉を飛ばす。弾かれた葉は、熱で一瞬のうちに燃えてしまった。

「ぴ　ちゅう」

「え？」

少女の言葉に青年が振り返ると、彼女は恥ずかしそうに笑顔を向けて何でもないと言った。

呆れたような青年達に、頬を膨らませて見せるとキースが小さく笑い声を上げた。

しかし、これだけの派手な魔法を使ったにも関わらず、屋敷の者たちが誰も来ない辺り、この青年の普段の行動が窺い知れる。

「ああ、それと」

青年は一冊の本を二藍に渡した。装丁の美しいそれは『絵本』。

「あ、ありがとうございます…え？」

驚きに目を見開いた少女と、同じように覗き込んだ式神たちも息を飲む。

「上手く調節できなかったのですが、問題は無いと思います。少なくとも私の知る範囲での言葉でしたら『読める』はずですよ」
自分たちのいた世界には無い言語：一番近い形でルーン文字とか象形文字のような形のこの世界の文字が読める事実には彼らは呆気に取られる。それと同時に背中が薄ら寒くもなった。

自分たちの想像をはるかに超える實力を持つこの青年に。

6 話（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

二藍の呟いた言葉は、隠すまでも無い国民的なアイドルの黄色いネズミです。

7話

「ところで、だ」

こほん、と軽く咳払いをすると紫炎はキースに向き直った。

「我等を『呼んだ』のは誰だ？」

「モナドですよ」

即答する青年に彼等は驚いた顔を見せた。まさかこうあっさりと答えが返ってくるとは思わなかったので、一瞬紫炎すら動きを止める。

「ですが、学生が起こした事故ではないと、よく気がつきましたね」
「…我々に説明をしていた時、どうみても不満そうな顔をしていたからな」

「彼等もまだまだですね。魔道師は相手に感情を悟られてはいけないのですが…仕方ありませんね」

何か物言いたげに顔を見合わせる彼らに、キースは薄く笑う。

「貴方達に『私』を取り繕う必要はないでしょう？」

信じられているのか、軽んじられているのか微妙なところではあるが、あえてそこをスルーすることにして、紫炎はキースへと視線を移すと、二藍が彼の腕に手をかける。

「理由をお聞きしてもいいですか？」

三人の中で一番年が若い彼女が一番の被害者かもしれない。そう考えてキースは二藍へと体の向きを変える。

「モナドが召還しようとしたのは、私を超える力を持つものです」

「なんだか範囲がものすごく広く聞こえるが？」

「本人もよく解っていなかったと思いますよ。それにばれたら懲罰
ものですからね、異世界からの『召還術』は」

緩く首を振ると、青年は彼らを促して屋敷の中へと入っていく。促
されて入ったのはキースの私室だった。

呼び鈴を鳴らし召使にお茶の支度をさせると、彼はソファに身を沈
めゆっくり息を吐いた。

「あくまで推測の域を越えませんが…多分、事実が一番近いでしょ
う。彼は私が疎ましかったんですよ。嫉妬と呼んだほうがいいかも
しれません」

苦笑、というより嘲笑に近い笑いを浮かべて青年は話す。

「前にも言いましたが、私は自分を過大評価するつもりはありません。
ん。事実として自分の魔力がどのようなものかを知っています。し
かし、いくら器が大きくても中身が無くては意味はありません」

どれほど魔力があっても、それを使う手立てがなければ無用の長物
である。

「そして、年が若い、というだけで軽んじるものもある」

相手が自分より若いから…魔力が強い事が、上位に居ることが面白
くない。

「しかし、現実自分の前に現れたのは年若い、異世界の住人…彼に
言わせれば何の力も無い、普通の人間」

そして、男は全てを青年に押し付けた。彼が何も言わず黙って受け
入れた理由を確かめもせず早々に「厄介払い」をしたのだ。

「愚かです…愚か極まりない。それが学院を預かる『長』などと笑
うしかない…しかし、その地位がある意味閑職だということを知っ
ている…だからこそ暴挙に出たのです」

「……な事の…ために」

小さな、搾り出すような声にはつとして青年達はそちらを向く。

少女はワンピースを握り締め俯いたまま体を震わせていた。静かに立ち上がって紫炎は彼女を抱き上げ膝の上に乗せる。柘榴もその傍にぴったりと寄り添った。

「そんな事の…そんな愚かな…」

するり、と二藍の腕からブレスレットが抜ける。その動きの意味を理解してキースの瞳が翳った。

『母さまっ！父さま…蘇芳、浅葱…おじいさまっ』

紫炎の服を掴み、その胸に顔をうずめる。その体を抱き上げ、彼らは立ち上がった。

「しばらく部屋に籠る…誰も近づけさせないでくれ」

そう言うと、少女を抱いたまま器用にブレスレットを腕から抜く、柘榴も自分のブレスレットを抜いて、他の二つとともにテーブルの上に置くと、彼らが出やすいように先にたって扉を開ける。

後に残された青年はなすすべも無く扉を見つめ続けていた。

理解しているつもりで、自分はどこまで判っていたのだろうか。

いや、初めから理解などしていなかったのだ。

彼女の笑顔があまりにも自然で。

彼女の行動があまりにも自然で。

彼らが一人きりで無いことに安堵して。

自分でも意識しないうちに目を逸らしていた。

翌日朝食の席でキースは目を見開いた。

変わらぬ笑顔で二藍は青年に挨拶する。

その腕にはいつの間にかブレスレットが填まっていた。

二人の青年も何も言わずそれぞれのブレスレットをつけている。

一瞬何か言いかけたキースは、口を嚙み目を伏せたが、すぐに顔を上げる。そこには昨日までと変わらぬ笑顔をした青年が居た。

一晩の間に彼らが結論付け、覚悟を決めたのであれば自分もことんそれに付き合おう。

自分が持つ全ての権力も、何もかも彼らが望むのであればいかようにも行使しよう。

それがせめてもの贖罪であり…友情の証であれば、と。

たとえ独りよがりでも、自己満足といわれようとも。

青年が密かに心に決めた瞬間でもあった。

「そういえば、キースさんって宮廷魔道師っておっしゃっていませんかでした？」

食事も終わり、ふと気がついたように二藍が尋ねた。頷き返す青年に、彼女は首を傾げる。

「お仕事…いいんですか？」

考えてみると彼らがこちらに来た日とその翌日を除いて、キースは屋敷から一步も外に出ていなかった。

「『筆頭』ではありませんからね。有事の時以外さほど忙しくないんですよ。魔道師なんて、基本学者ですから日常は研究に没頭していることが多いですし、それに、ほら私は有能ですし」

ふざけた口調の青年に彼らは笑う。

「…まあ、一応ね『監視』も言いつけられていますし？」

「呆れた『監視』だ」

くくつと柘榴が喉で笑う。他の二人も苦笑いを浮かべている。

「こんなもん作っておいて、『監視』もなにもないだろうに」

「一応、監視装置ってことで申請はしてありますよ。私の術が掛けてありますから、表向きはそれらしく見えると思いますしね」

くすくすと青年は楽しそうに笑う。彼に仕える者達が思わず目を見張り、そして目を細める。それは、青年がこの屋敷に来て初めてみせる心からの笑顔だった。

8話

向けられた好意には相応に、悪意には三倍返しで。

ある意味家訓ともいえる、これが九耀家のポリシーである。

「実は私も『術者』なんです」

庭へ行きませんか？と誘い出され、突然された二藍の告白に、キー又は哑然とした表情をむけた。

「黙っていて、申し訳ありませんでした」

深々と頭を下げる彼女を前にして、青年は表情を変えずに居た。

それを見て、二藍は心の中で溜息を吐く。無理も無い、本来なら紫炎たちが話した時点で言うべきことだったのだ。

黙っていたのは保身と面倒ごとを避けるため。相手にとっては騙されたと思っても仕方が無いことである。

「…見せていただいても？」

ようやく、搾り出すように言葉を発した青年に二藍は困った顔を見せた。

「私の術は紫炎たちとは少し違うんです」

言外に外に漏れることを危惧した物言いに、キースはようやく表情を崩した。

彼はこの時点で大きく誤解したのだ。表情の変化を目の当たりにした二藍は気づいたがえて指摘はしない。

静かに青年は言葉を紡ぐ。腕輪があっても意味がわからないその言

葉が、この世界での魔法の詠唱なのだと気づいて、終わるのをじつと待つ。

「大丈夫ですよ。使ってみてください」

顔を上げた青年に頷くと、少女は鞆の中から一枚の札を取り出すとひらり、と落す。

「急急如律令。炎舞」

ゴウ、と音を立て、彼らの周りに火の手が上がる。それはすぐに柘榴によって消し止められた。

幻覚ではない証拠に、芝の上には焦げた半円の痕がある。

「すみません。せつかくの芝生に可愛いそうなことをしちゃいました」

頭を下げた二藍に笑顔を向けると、キースは軽く指を鳴らす。見る見るうちに芝生から新しい芽が出て元に戻っていく。

TVで見る、植物の成長を高速回転で再生する様子を見るようだった。

「うわあ、凄いです」

「そんな事はありませんよ。その紙は何ですか？」

もう一枚取り出して青年に渡す。

裏表と調べてから、「ああ」と小さく微笑んだ。

「この文字自体が力の発動を促すですね。この国の『魔方陣』と良く似ています」

そう言つて青年は宙に指先で何か描いていく。その軌跡は青白く残り不可思議な文様になっていった。

描いた模様に腕を入れるとその先が無くなる。思わず息を飲んだ二藍たちに悪戯っぽく笑って見せると、彼は何事も無かったかのように腕を抜いた。

その手に握られているのは、紙とペン。

今度は二藍たちが呆気にとられる番だった。

確かに目の前の青年がとてつもない魔力の持ち主だということは認識していた。しかし、こつも易々と高度な魔法を目の前で使われると複雑な気分になってくる。

それなりの努力と学んだ結果だとしても、多くの者達がやっとなおもいで完成させる魔法を片手間のように扱われては。

（他者の妬心を煽るのは十分です）

モナドが禁忌とされる術を用いた気持ちも判らないわけではない……だからといって許したわけではないが。

「これで同じようなものが作れますか？」

ペンと紙を差し出して青年が言えば少女は首を傾げた。

「試したことはないですけど……やってみます」

レポート用紙やルーズリーフで札を作ったことはない。勿論、墨以外の物を用いて書いたことも無い。

大きさを整え、二藍はペンを走らせる。流石に筆のようにはいかないが、それでも想像よりも柔らかい書き味だった。

「略式……爆」

弾いた途端、小さな音を立てて札がはじけた。

「やはり、潔斎していない札では威力が小さいな」

紫炎がその様子を見ながら目を細める。

「だが、目くらまし程度には十分だ……緊急時以外は略すなよ二藍」

「はい」

不満そうに返事をする少女の顔を笑いながら柘榴が突付く。その様子を笑顔でみていたキースだったが、二藍と視線が合うと、その笑顔を一層深くした。

「大丈夫ですよ…発動の波動自体に問題はありません。こういった紙に書かれた魔方阵は市販されていますしね」

「そうなんですか？」

目を丸くする少女に青年は頷く。

「旅行者などを対象にですね。旅には危険が伴いますから、それに装備を整えていかなければなりませんから」

全てのものが魔法を使えるわけでも、剣を使えるわけでもない。金銭的に余裕のあるものなら護衛を雇うこともできるが、そうでない者もいる。

「まあ、一般の方々はその殆どが一生自分が生まれた街か、その近隣で過ごされますけどね」

文化の違いか慣習の違いか、安全性の問題か。自分たちが住んでいた場所と違って、観光という概念がここには無いようであった。

「それほど危険なのか？『外』は」

紫炎の言葉にキースは首を縦に振る。

「ここは王都ですから、近隣の町や村に…それこそ半日で行き着く程度であれば問題はありません。とはいえ、野獣もいますから何の装備もなしに気軽に行くなんて事はしませんけどね」

ああ、ファンタジーの世界だと二藍はしみじみ思った。きっと外には獣のほかに賊もいるのだろう。ひょっとしたらモンスターもいるかもしれない。

それを口にするとキースは軽く首を傾げた。

「モンスター…『化け物』ですか？野獣の中には魔法の属性を持つものもありますから、そう考えれば答えは『是』ですね」
もはや、何も言うまいと心に決めた二藍であった。

「試してみますか？」

ふいにかけられた言葉に顔を上げると、先程よりは簡略化された模様を紙の上に描かれたものを渡される。

「この紙を指の先に挟んで前に出して…そうです、そして『ブラン』と」

「ブラン」

二藍が口にすると、彼女から2mほど先に火の手があがった。指を鳴らし、消し止めるとキースは満足そうに微笑んだ。

書かれた魔方陣は既に無く、少女の手の中にある紙は白紙だ。

「強い魔力を有していらっやいますね。思ったよりも威力が強い…お守り代わりに2、3枚お渡ししておきます」

さらさらと流れるように同じ模様を描くと、青年は少女に手渡した。「貴方が持つていらっやったモノは大事にしまっておいてください。その方が安心ですから」

「…見知らぬ術は知れたときに危険、ということか」

紫炎の言葉に、青年は口に笑みを乗せることで応えた。

「他にもいくつかお教えしましょう。身を守るときに必要でしょうから」

「それは言外に街の中でも危険が有ると言っていないか？」

キースが柘榴に顔を向ける。困ったような、少し呆れたような表情であつた。

「黒髪も、黒い瞳も無いわけではありませんが、この辺りで両方を有しているのは非常に珍しいです。それに加えて彼女の異国の顔立ちは、好事家にとって価値のあるものと思われます」

「どこにでも変態親父はいるってことか」

「…言葉が過ぎます。柘榴」

一応とがめる言葉を言つてはいるものの、二藍の嫌そうな表情を隠しきれずに居た。

「見る者がちゃんと見れば、その腕輪をしている限り滅多なことで手を出そうとはしないでしょうけれどね」

笑いを浮かべたキースの後ろに何か見えたような気がするが、あえて見ない振りをする。

「後で書斎にお出ください。魔方陣を書いたものを何枚か用意しておきます」

立ち上がって屋敷の中に消えた青年を見送つて、二藍は後ろの二人を振り返る。

「あれは、多分私の靈力が大きい訳じゃないと思います」

「そうだな、キース手ずから書いた布陣だからこそその威力だろう」

しかし、あれほどの力の持ち主でさえ自分たちを元の世界に返すことは出来ないという。

いや、出来ないわけではないだろう。ただ知らぬ場所に荷物は送れない。そういう事だ。

「偶然に偶然が重なって…というのは嘘ではなさそうですね」
次元を移動できる紫炎たちも解らない場所から戻することは出来ないし、逆に二藍の家族にしても、わからない場所に居られては探しようが無い。

「九耀家のやりかた…: しかと思い知らせてやりましょう」
「御意に」

そういうと、男達は少女に膝き頭を下げた。

幕間 1

キースの勘違いは三つ。

一つは二藍は、モナドが行なった事で嘆いたのではない。怒ったのだ。しかも相当深く。

基本的に術者の家系に生まれたことと、幼い頃から大人達の中で育ってきたせいか、二藍は負の感情をあまり表に現すことは無い。しかし、彼女の弟達は、両親よりも祖父よりも、この温厚な姉を怒らせることを決してしない。

怒った彼女が誰よりも執念深く、真っ黒になるか、彼らはその身をもって知っているのだ。

悪意には三倍返し。この家訓は二藍のためにあるといっても過言ではない。

そして、勘違いの二つ目は、二藍が自分の力を黙っていたのは迷惑をかけてはいけないという良心からだという考えに行き着いたことである。

その場で否定しても良かったのだが、好意的に解釈してくれれば問題は無いと、あえて二藍は何も言わずに流して置くことにした。

最後の一つは二藍の年齢である。

紫炎や柘榴は、式神という性質が彼らの『本体』の影響か、多民族な顔立ちで見られることが多い。

アジア系、といわれればそう見えるし、アングロサクソンというには多少無理はあるもののヨーロッパ圏内だからといって特に異質に感じられる訳ではない。イケメンという言い方をするなら、どこに居ても肯定的な意見が返ってくるだろう。

しかし、二藍は何処から見ても典型的な日本人だ。クラスでも美人というより可愛いタイプとして男子に隠れた人気があった。柔らかで丁寧な物言いと、染めたこともパーマをかけたことも無い真っ直ぐな黒髪は背の中ほどまであり、彼女を昔から知る幼馴染達以外には、由緒正しいお嬢様と思われていた、というのはここでは関係はないが参考の為に記しておく事にする。

（ちなみに、由緒正しいお嬢様、というのは家柄だけでみれば決して間違つては居ない）

アジア民族特有の凹凸の少ない顔立ちは、欧米諸国の顔立ちに比べ幼く見られるという定説があり、少なくとも外見的にアングロサクソン系のこの国において、彼女が実年齢より幼く見られるのは仕方が無いことである。

キースが数少ない、自分の周囲の人々を元に、おおよその年齢を割り出して決め付けたとしても、それは彼の咎ではない…多分。

この三つの勘違いが、この後キースの過保護と道化的な役割の原因ともなるのだが、とりあえず今は関係ないので放っておくことにする。

閑話休題。

彼らがこの世界に来て、そろそろ二週間ほど過ぎようとしていた。この、二週間、というのはあくまで二藍たちの感覚での日数計算で、この世界は曜日とかの概念は無い。

一日の長さは、二藍の持っていた時計で換算するとおよそ30時間。時間の単位は「ユラ」これが、ほぼ一時間に相当する。とはいえ、宮仕えの者や、大きな屋敷などで奉公している者たちを別にして、多くの人々は日があるうちは働き、沈めば休むといった生活をしていた。

市場や商家も決まった休みは無いものの、組合によって場所や規模別に休みが定められていると二藍がマーシャたちから聞いた話だ。

一年はおよそ360日。季節はその国によって違いはあるが、このセラフィークにおいては日本と同じ四季で区切られていた。日割り計算そのままに90日で一つの季節とし、気候もそのまま春夏秋冬である。

ちなみに今は「ルーラ」春真っ盛りである。

夏は「キーラ」、秋が「クーラ」冬は「シーラ」と呼ばれている。

基本的な服装は至ってシンプルなものである。男性は直線的なシャツとズボン。飾り程度のボタンはあるものの、その殆どが上からか

ぶるストン、とした形になっている。長さは膝丈くらいで、腰の辺りをサッシュやベルトで閉める形が一般的だった。裾の辺りには後ろや横にスリットが入っていて動きやすいようになっている。

但し、神官や魔法使いを生業にしているものは、踝辺りまでの長さの上着で、その上にローブを羽織ることが多く、これからの季節は大変だとキースが苦笑いで説明をしてくれた。

女性は成人女性ならば踝までのスカートが主流だが、成人前の子供達は膝下辺りのスカートを履くものが多い。

二藍にもコレが与えられ、彼女の年齢がどのように見られているかおおよその見当がつく。

やはり、装飾の少ないブラウスのようなモノの上に、ニチエックのようなノースリーブのワンピースという形は、中世ヨーロッパに似てる。普段着ているものは男女問わず装飾は少ないが、祭りや貴族たちの社交界ではそれなりに刺繍や宝石類といった装飾品で着飾るらしかった。

だが、あくまでこれは基本的な形で、色々応用したデザインは数多く出回り、その年の流行などというものもあるあたり、女性の服飾においての考えは、どの世界に言っても大差は無いということであろう。

基本的な生活環境や文明において、やはり中世ヨーロッパあたりに近いという最初の印象は当たっていて、それがいかにもファンタジー色を強めている、とは二藍の台詞だ。

しかし、中世ヨーロッパに近い、というだけで文明的な面で見れば、もう少し進んでいるといえよう。

多少魔法に頼っているところはあるが、下水道の完備など衛生面においては、他の文化の進み方から比べれば非常に高度だと思われる。

この世界での神という概念は自然崇拜に近いものがある。

神殿には、あくまで祈りの場所であり、感謝の場所であって『望む場所』ではない、とキースは説明する。

願いは他者に叶えてもらうものではなく自分で叶えるものでしょう？と二藍たちの、どこかいい加減な神様事情を聞いて彼が言った言葉である。そして、国によって信じる神々が異なることも不思議なようだった。

国によって言葉は違えど『神』は『神』。願うべき対象ではなく、感謝をささげる対象。

素敵な神様ですね、と心からの二藍の言葉に、不思議そうな顔をした青年が印象的だった。

世界が変われば、視点が変われば「当たり前」が変わってくる。

しかし、この世界は二藍たちが普段忘れている「当たり前」が普通の事として数多く存在する、そんな世界でもあった。

幕間 1（後書き）

とりあえず、第一章終了です。

お気に入り登録ありがとっございます。励みになります。

第二章から恋愛要素が少しは入るはず…です。

1話

ハア、ハア、ハア。

息を切らしながら、少女は狭い路地裏を駆けていた。

（どうしてこんな事になったんだろう）

振り返りたい。後ろを振り返って確認したい。そんな欲求と戦いながら、闇雲に路地を走る。

少し前までは市場を冷やかしながら歩いていたのに……。気がついたら大通りを離れ、路地裏に迷い込み、あまつさえ怪しげな男達に取り囲まれ、こうして逃げ回るはめになるうとは。

ひたすら走ることに夢中で、周囲に人影が居ないことにすら気付く事も出来ずに居た。

「……ここまでだ」

ふいに腕をつかまれ、勢い余って転びそうになるところを腰を襟足をつかまれ寸前で止まる。しかし、首の前が締まって一瞬息が止まる。急激な付加を与えられた腕が痛い。

「大事な商品だ。怪我をされたらたまらないからな」

咳き込む少女に、男はゆがんだ笑いを浮かべた。

「見れば見るほど珍しい色をしている。こりや高く売れるだろうよ」
思わず睨みつけると、男は笑いを一層下卑たものにした。

「気が強いな、嬢ちゃん。そういう女を調教したいっていうお方は結構多いんだぜ？」

楽しそうに笑う男に気づかれないように、少女　二藍は隠しポケ

ツトからそつと布陣の描かれた紙を取り出した。

「ブラン」

ゴウっという音を立てて火の手が舞う。男が怯んだ隙に逃げようとした少女は思わず足を止めた。

逆光で解りにくい、腰に剣を指した男が彼女の前に立ちはだかる。仲間かと思い、ポケットに手を入れた彼女の頭をすれ違いざまに軽く撫でると、男はその横を通り過ぎ、人買いの男へと近づいていった。

瞬く間、とはこういう事をいうのかと彼女は後で思い返す。

そんな一瞬の速さで、男は剣を抜き、相手の首筋にその先を向けた。すぐにばたばたとした音と共に、街の警吏がやってきて人買いを引っ立てていく。

呆気にとられて見ていると、男が膝をついて二藍の視線にあわせるように身をかがめてきた。思わず後退さる彼女に困ったような笑顔を向ける。

「怪我はないか？」

静かに響く低い声に二藍は首を縦に振る。静かに深呼吸を繰り返し、心を落ち着かせ顔を上げる。

礼を言おうと口を開きかけた少女は一瞬固まった。

（この国の美形って、なんでこうレベルが高いの？）

視線の先に居たのは思った以上に若い男だった。黒髪に青い瞳の持ち主は、彼女と視線が合うとゆっくりと笑顔を見せる。それにつられたように彼女も微かだが笑いを浮かべた。ふと男の視線が腕輪にと注がれた。

「もしや、そなた…」

「二藍！」

男が呟くと同時に、その場に転移の陣が現れ、キースと紫炎がその中から出てきた。

「紫炎、キースさん」

ほっとした少女の声に、彼らも息を吐く。そして、その傍に立つ男に気付き、キースの瞳が大きく見開かれた。

「やはり、そなたの魔法具であつたか、キース」

「閣下…」

信じられないような物を見るその表情に男は苦笑を見せると紫炎に向つて二藍の背中をそつと押す。

その手が離れる瞬間、手を取られ、さらりとした感触と別の感触が彼女の手の甲へ落とされた。

え？と彼女の頭に中が真っ白になると、後ろに居たキースの慌てる気配は同時で、すぐに身を起こした男は二藍に笑顔を向けると、軽く手を挙げ去っていった。

通りの向こうには警吏とは明らかに違う人物達が、軽く頭を下げ青年を向え、その後に続く。

「茹蛸」

ぼそりと耳元で落とされる声にはつとして、二藍は今起こったできごとに一層顔を赤くする。

「こんなことする人本当にいるんだ」

少女の指先に微かに触れたのは青年の唇。

「…いえ、普段はおやりになりませんよ、あの方は」

ようやく我に返ったキースは少女に心配そうな視線を向けた。

「怪我はありませんか？布陣の発動がなかったら見つけれないところでした。閣下が張られた結界の中にいらしたんですね。ご無事でなによりでした」

青年の視線に気がついて、少女は頭を下げる。

「ごめんなさい、心配かけました」

いいえ、と首を振ると青年は何か言いたげな紫炎に気付き周囲を見渡すと、再び宙に魔方陣を描く。

「とりあえず屋敷に戻りましょう。すぐに閣下の結界も効力を失います。人が戻ってくる前に我々も行きましょう」

次の瞬間、彼らの姿も魔方陣もそこにはなく、やがてゆっくりと人の気配が路地に戻ってきた。

「お前、自分がいかに方向音痴か自覚しているか？」

ごっつん、と頭の上に落とされた拳骨に半分なみだ目になりながら、

二藍は小さく唸った。

「あとで、マーシャにもロデオにも謝っておけよ。二人とも真っ青になって…特にマーシャなんか半狂乱になってお前を探していたん

だからな」

ロデオというのは、キースの家に仕える少年であった。マーシャの従弟である彼は、街に出たことが無い二藍を誘い市場に連れ出したのだが、そこではぐれてしまった。

話を聞いたマーシャがキースに知らせ、あちこち探し回り先程の騒ぎとなったのだ。

「ごめんなさい」

くしゃり、と彼女の髪をかき上げ柘榴はやれやれと肩をすくめる。

「しかし、お前の魔力を遮断するとは相当の力の持ち主らしいな」

「結界能力に関して閣下の右に出るものはいませんよ」

ソファに身を沈ませてキースは苦虫を噛み潰した表情をする。

「ここしばらく、宮殿に行っていないませんでしたからね。情報が耳に入ってこなかったものですから。まさか警邏の真似事みたいなことをしていらっしゃるとは思いませんでした」

警邏は街の安全を司どる、警察のような組織だ。

「ひよつとして、キースさん。あの方が？」

二藍の言葉に、青年は表情を一層ゆがめた。

「そうです、あの方が王弟殿下…エンデルク・ルーデル・ウエリントン公ですよ」

2話

良質な生地は、肌触りも良い。

それを実感として感じながら二藍はマーシャに言われたとおり、その場で一回転してみせた。

ふわりと広がるスカートと、その下に幾重にも重ねられた薄地のペチコート。スリット部分の間から品良く見え隠れしているそれは、驚くほど軽く薄い。

それでいて纏わり付くことなく、歩くたびに風をはらんで、普段長い裾のスカートを履き慣れない二藍ですら、難なく動き回ることが出来る。

色や形は落ち着いたシンプルなものであるが、見るものが見れば最高級の布地を惜しげもなく使っていることが解る服装だった。

それは、二藍ばかりでは無く、紫炎や柘榴が合わせている服も同様であつた。

「二藍さまのお年頃には色合いが多少地味ですけど、皇太子殿下との謁見であればコレくらいは普通です」

あまりにも上質な衣装に氣後れしていた彼女に、マーシャはきつぱりと言つてのける。

「こんな時でもなければ、使い道が無い財産です。いつそのこともつと買つていただいて市場を潤すべきだと思えますわ」

侍女の遠慮ない言葉に、当主であるキースも苦笑いを浮かべるしかなかった。

「この程度のご衣裳をお三方に数十枚ずつ買い与えたところで、フアリス家の財政はびくともしません。ご心配される事などありません」

んよ」

と、言われてもキースの家の財政事情を良く知らない彼らに何か言えるわけが無い。

柘榴が市場に出て見聞きしてきた事を参考に、こちらの生活基準を考えると、彼らが今あわせている服で一般的な4人家族が一年は生活できる金額に近いものがあるらしい、ということだ。

事の起こりは、久しぶりに登城したキースが受けた「願い」という名目の「命令」。

「しかし、半月以上放っておいて、今更顔が見たいっていうのも笑えるけどな」

「どこかで、閣下が二藍や紫炎と顔をあわせた事をお知りになったのでしょうか。全く変なところで耳聡いお方ですから」

対抗意識のみで勝手に呼び出しをかけるのであれば、御免こうむりたい相手である。

「そんな愚かな方であれば楽なのですけれどね」

現在の王は、正妃のみで側室は持っていない。自分自身の生まれもあるだろうが、王族にしては珍しい恋愛結婚なのだとキースは説明する。

そして、皇太子は姉と妹に挟まれた唯一の男子。

「妃殿下は、あのモナドの姪にあたるのですよ」

だから、あの男は表立って罰せられずにいる。この醜聞を表ざたにすれば王弟派が動き出すことは目に見えている。今まで王室から反応が無かった理由の一端がそれだった。

表向きは、遠い国からやってきたキースの友人とその妹を非公式に招くという事になっている。

「多少甘やかされたところはありますが、皇太子殿下は公平で礼節をわきまえたお人柄です。ですが、どうしても周囲に踊らされてしまふ所があります。利用するものが悪いのでしょうけれど、利用される側にも問題はあります」

「キース、お前今素面だよな？」

アルコールが入ると普段の数倍の毒舌振りを発揮することを、彼らはこの半月あまりで経験済みだった。

「酔ってなどいませんし、このような昼間から酒を口にもしていません。本当の事を言っただけです」

言葉だけ聞いていれば辛辣この上ないが、その口調のなかにある物を感じ取って、彼らは複雑な思いを胸に抱く。

以前考えていた、皇太子派に見えて実は王弟派、という考えは間違っていたのかもしれない。

「そういえば、王弟殿下っておっしゃるから、もっと年齢が高い方だと思っていたんですが、お若いんですね。お幾つでいらっしゃるんですか？」

「殿下や私より3つ上ですから、今年24になられます。先の陛下の後添いの正妃さまでいらっしやったので、ご兄弟のお年が離れているのですよ」

二藍の気遣いに微笑んで答えたキースは「お若いんですね」との呟きに、笑いを深くする。

だが、実は年を聞いて驚いたのはエンデルクに対してではなくキースにであった。

「21かよ…それで宮廷魔道師だつて？」
登城した（出勤というイメージのほうが近かったが）キースを見送って彼らはそれぞれに複雑な顔をする。

「二藍、お前マーシャから色々聞いているんだろう？」
「聞いてはいましたが、流石にキースさんの年齢にまで頭が回りませんでした」

と、いうより最初からどこか問題視していなかった、というか考えたくなくて無意識に後回しにしていたと言った方が正しい。

「モナドの奴が学長をしている『高等魔法院』っていうのは大学みたいなモノだつて話だよな？」
柘榴の問いに二藍は頷く。

「ここの教育システムは日本に似ています…あそこまで徹底はされていませんが、国の援助で初等教育は行き届いている事は確かです。レベル的に読み書きと簡単な計算に不自由しない程度ですから、小学校の3、4年生くらいだと思いますけど」

その先はそれぞれの身分や進路によって違つてくると教えてくれたのはロデオだった。マーシャの従弟とはいえ、農家出身の彼は、本来ならば初等教育で終わり、家業の手伝いをするはずであった。しかし、本人の希望とその熱心さにマーシャの父親がキースに頼み込み、中等教育を受けている最中なのだ。

「中等教育は入学する年齢は多少ばらつきはあるものの、概ね10歳から12歳。中等教育はスキップ制度に似たシステムがあるらしいんですが、それでも優秀なもので卒業に4年ほどかかるそうです」基本は8年。10年居ると自動的に卒業となるらしいが、初等教育と違って実費なのでよほど裕福な家の者で無い限り、8年で出るものが多い。

「中等教育の内容は、中学高校に専門学校を足した感じです。ロデオは騎士に憧れているらしくって、そちらの専門教育を受けているみたいです。礼儀作法とか、剣技とか」騎士団の門扉は広い、とロデオが目を輝かせて話しているのを聞いて、成程と二藍は冷めた気持ちになった。勿論本人の目の前でそんな顔は見せなかったが。

「魔法系統もここで分かれるみたいです。中等教育で基本的なことを学んで、更に上を目指す人たちが進むのが『高等魔法院』です」高等と名の着く学問は魔法のみだと、これもロデオが教えてくれた話だ。

「単純計算でも、ここに入学するには最低15歳、か」

「マーシャの話では、王宮に勤めだして3年だと言うことですから、18の年からですね」

キースの実力だけを見れば、決しておかしな話ではない。しかし、筆頭にもなるうる実力と立場を上手くかわしているところが、彼なりの処世術というところか。

「唯単に面倒なだけなのだろうが」

紫炎の眩きに誰も反論はできなかった。

3話

非公式ではあるものの、皇太子との謁見は何故か国王夫妻と宰相までその場に現れ、キースの周囲の温度を2、3度下げることとなったが、それに気づいたのは二藍たちのみであった。

周囲を慮ってか、国に対するいくつかの当たり障りの無い質問と、宰相と筆頭魔道師による「魔法具」の点検。二人が国王に視線を送ると、満足そうに頷いてキースにねぎらいの言葉が寄越された。それに深々と頭を下げた青年は、二藍たちだけに見えるように目配せを送ってきた。

（ちよろいものです）

そんな声が聞こえてきそうで、苦笑してしまう。もちろん顔に出すような真似はしない。

とりあえず、これで謁見は終了らしい。「ご苦労様、話せて楽しかったよ」と、何処か棒読みに近い皇太子殿下の言葉に、二藍たちはキースに教えられた付け焼刃な挨拶をする。

「ねえ、彼らを今宵の夜会に招待してはいいかがしら?」

王妃様の爆弾発言に、部屋の中が一瞬固まった。

「アリエル?」

国王の声にも不審さが混じっていることが解るくらい、その言葉は唐突だったらしい。

「だって、これほど見目麗しい青年達ですもの。貴族の令嬢達が喜ぶわ。彼女が成人に達していないのは残念だけど、昼間の催しの機

会にでも出ていただくことにして、今宵は彼らに夜会に来ていただきたいの。…駄目？」

小首をかしげ夫である国王を見上げる姿は、二藍よりも年上の子供がいるとは到底思えないほど愛らしい。

（王妃様最強）

二藍の感想は強ち間違いではないようだった。王を始めとして、皇太子も宰相も筆頭魔道師も、キースさえもどこか諦めの眼差しを彼らに向けている。

「発言をお許しただけですか？」

静かに口を開いた紫炎に、驚きの視線がむけられるが、王の頷きに宰相が応じる。

「許しましょう…シエン殿といわれたな？どうされた？」

「ありがとうございます」

につこり笑って頭を下げた紫炎に、二藍も柘榴も背筋に冷たいものを走らせた。長い付き合いの彼らにだけ解る紫炎の怒り。元々の主である、祖父でさえ、こんな風に怒った時の紫炎には逆らうことは無かった。

「キース殿と交流があるとはいえ、我らはごらん頂いてお分かりくださると思いますが、庶民にございます。貴族のご令嬢方に失礼が会つては、我らを保護して下さっているキース殿にもご迷惑が及びます。どうか皆様に失礼が無い程度に礼節を身につけてからご招待いただきたく存じ上げます」

「あら、それだけの礼儀を身につけていらっしゃるんですもの、大丈夫よ」

にこにこ邪気の無い笑顔で王妃は言葉をかける。ふ、と紫炎の瞳

が細められた。

湾曲に断りを入れたことを気づいていて尚事を進めようとする王妃に、青年の怒りは沸点を越えかけていたがそれを呑み込んで言葉を続けた。

「しかし、妹を一人にしておくわけには参りません」

「大丈夫よ。このまま王宮に泊まっていただけばいいのだから。理由はどうかあれ正式な客人相手に宮殿内で不埒なことをしようとする愚か者はいないでしょう。心配なら護衛もつけておくわ」

ああ、これは贖罪だ。

二藍は王妃の考えが読めたような気がした。どんな形であれ、王族が客として受け入れたということは、公式にその存在を認めた、ということになる。

非公式の場で、いかにも思いつきのように自分の我侭を通すように見せかけて、彼らの立場を公式の者とする。

（お飾りの王族では無いって事ですな）

「兄さま」

二藍の手が紫炎の袖を引つ張った。

「私なら大丈夫ですから」

にこり、と笑えば紫炎も柘榴もキースですら驚いた表情をする。

二藍の笑顔に紫炎の怒りが静かに解けていくのが解った。

「兄さまたちがお戻りになるまで大人しく待っていますから…先にお屋敷に戻っていてもいいですし」

暗に紫炎たちに夜会に出ると命じているも同然の言葉に、相手は眉を寄せる。キースも意外そうな顔で二藍を見つめていた。

「それは駄目ですわ！」

突然否定の言葉を発した王妃に彼らの視線が再び集まる。

「貴女が先にお帰りになつては、お二方もご心配で夜会にお出でくだらないかも知れませんか。お年を誤魔化して夜会にお出でになつてもかまいませんことよ」

人質決定ですか。そう考えながら、二藍はキースに視線を送る。心得たようにキースが深々と頭を下げた。

「妃殿下、彼女に発言の許可を」

「もちろんですわ。ここは非公式の場。固く考えなくてもよろしくてよ。…フタアイ」

少女は一層深く腰を折ると、居住まいを正して顔を上げた。

「お言葉ありがとうございます。せっかくのお誘いではございますが、いまだ未成年の身、夜会の出席はご辞退させていただいてよろしいですか？お部屋をお借りできるのでしたら大人しくそこで兄の帰りを待っていますから」

健気な妹を演じる少女に二人の式神は軽く眉を寄せた。彼女が何を企んでいるのか、解らずに当惑している表情だ。

「もちろんですわ。可愛いお部屋を用意しますからね。楽しみに待っていてくださいな」

さ、準備準備 と張り切って部屋を去っていった王妃を苦笑しながら王が追っていく。去り際に彼らに一言「すまぬな」と残していく辺り、彼も王妃の考えを読んだのだろう。

王の後を宰相と筆頭魔道師が追って出て行った。

皇太子は困った顔で「申し訳ありません」と彼らに頭を下げる。確

かに礼節をわきまえた好青年であつた。

「結構ミ―ハーで、いつもならもう少し落ち着いているのですが、お二方に会つて舞い上がつていますようです。ご面倒ですが、もう少しお付き合ひください。時間までおくつろぎになれるよう部屋を用意いたしますから、暫くそこでご休憩になつてください。：キース悪いが来てくれるか？急なことではあるが打ち合わせをしたい」

そこで言葉を切ると、近くに控えた騎士に顔を向けた。

「ザリック、この方々を客間へ。：そうだな、青の部屋がいい。頼んだぞ」

部屋を去るときに二藍に向つて「ごめんね」と声を掛けることも忘れない辺り、あの二人の息子だと思わせる。

とはいえ、やっぱり相当年を若く見られているな、と苦笑した。「未成年」という言葉は嘘ではない。少なくとも自分が生まれ育つた世界では、17という年は未成年には違いないのだから。

「説明は？」

「恩を売つておくのも悪くはないかと」

青の部屋は二間続きの客室だった。式典やなにかで家族ぐるみで来る客人用の部屋だと案内してくれたザリックが説明してくれた。流石王宮、と溜息を吐くしかない内装であつたが。

茶の支度をしてくると、ザリックと呼ばれた騎士が下がると、彼ら

は主である少女を見下ろした。

「王妃の考えは、まあ解った。だが、そんな公の場所に出れば簡単にお前の元に来ることはできないのだぞ？」

「それは大丈夫だと思いますよ。王妃さまのお言葉じゃないけど、非公式を公式認定させるのですから、危険は極力排除されると考えてもいいんじゃないですか？」

「けどよ、王妃の招待を受けるって事は、皇太子派って思われる可能性もあるんだろう？王弟派には良い材料になるんじゃないのか？」

柘榴の懸念はもつともだった。彼女たちが王妃の発言で王宮に泊まることが知れたら、王弟派には彼らの評判を落す良い材料になる。逆の考えをすれば、皇太子派にも彼女を材料に王弟派を陥れる材料にする事ができるのだ。

何の身分もない少女の命など、政権争いをしている者には何の価値もない。

「それは少し考えました。でもですね」

前かがみになる青年達に彼女は笑顔を向ける。

「少なくとも、この国で正当な実力と立場を知っている人が、キースさんを敵に回すでしょうか？」

「あー」

呆れたように柘榴が声を発すれば、紫炎も溜息を吐く。

実家が王弟派の筆頭で、本人は皇太子の幼馴染。しかも、先程の皇太子の様子を見る限り、キース自身に相当の信頼を置いているようだった。

「キースの好意を逆手にとるのか。悪党が」

不満そうな顔をする二藍を軽く小突くと、紫炎と柘榴は顔を見合わせて方をすくめた。

「仕方ない、茶番を演じてきてやるよ」

「綺麗なお嬢さんがいらっしゃるかもしれませんからね。今夜お帰りにならなくてもいいですよ」

お茶の支度をして戻ってきたザリックと侍女がみたのは、片方の兄に羽交い絞めにされ、もう片方に髪型をぐちゃぐちゃにされた二藍の姿であった。

4 話

王宮の三階に位置するその部屋は、絶好のビューポイントだった。

元々高台にある王城は、眼下に城下の町並みがあり、周辺の自然を余す事無く見ることができる。

それは、ある意味遠くの敵も察知できるという戦時下の優位も指す。

こうやって高い場所から見ると良く解る。王都は大きく3つに仕切られていた。

遙か彼方の外壁の外はうつそうとした森。多分あれが自分たちが現れた場所だろう。すぐ内側は牧草地帯だと侍女が教えてくれた。

（日本のお城でいけば、内堀みたいなものでしょうか？）

二藍がそう考えた壁は、外壁と平行に街の周囲を囲んでいる。

と、いうよりは壁に沿って町並みが作られていったのだろう。場所が異なっても街の発展に大きな差異は無い。

港町なら、港沿いに。

城下ならば、王宮を中心に。

日本でも、何も無い田園の真ん中に病院や役所が立てば、あつというまにその周囲は発展する。

「まず、城ありき、ですか」

「そうだな」

ふいに聞こえた声にはっとしてそちらを振り返った彼女は、この時間、ここにいるはずが無い相手に目を見開く。

「王…弟殿下？」

少女の表情に笑顔を向けるとエンデルクはテラスの手すりから軽々と彼女が居るテラスへと飛び移った。

推定身長190cm強。身長に見合う体つきは筋肉質だ。太くは無いが、決して細身とはいえない。

先日出合った時とは違い甲冑は身につけていないものの、腰に下げた剣は決して軽くはなさそうだった。

（っていうか、それ以前に三階ですよ、ここ）

そう思ったものの、良く考えれば相手は魔法使いだったと思い直す。

「今宵の警護を承った、エンデルク・ルーデル・ウエリントンだ」

優雅に腰を折る様は流石王族といったところだろう。しかし、今夜の夜会は王妃主催と聞いている。ここに居るのは問題なのではないかと思い、疑問を口にすると男は手すりにもたれかかり肩をすくめる。

「エルリックとは違い、私に義務は無い」

エルリックとは皇太子の名前だ。

（義務…ですか）

そういえば、貴族のお嬢様たちが招待されているようなことを、王妃が言っていたのを思い出して、心の中で溜息を一つ吐く。

何となく、今日の夜会の目的が見えてきた。心の中で、紫炎と柘榴にエールを送る。

改めて居住まいを正し、目の前の青年に深々と頭を下げた。

「先日は危ないところをお助けいただきありがとうございます。お礼も申し上げず失礼しました。ファリス家でお世話になっております、フタアイ・クヨウと申します」

「話はきいている。名で呼んでもかまわぬか？」

「どうぞ、殿下」

「では、私の事も名で呼んで欲しい」

「いやいやいや、いくらなんでも王弟殿下を名指しだなんて、恐れ多い。などと彼女が考えていると、男の手がそつと背中に回される。

さりげなくエスコートする様も堂に入っている。ふと男は部屋の中に誰も居ないことに気がつき、眉を寄せた。

「侍女はどうした？」

「下がっていただきました。夜会の支度で忙しそうだったので」

口を閉ざし考え込んでいるエンデルクに少女は笑顔を見せる。

「私がお願いで下がっていただいたんです」

視線を二藍に合わせ、暫く彼女を見つめていたが、その瞳をすつと細めた。

「ひとつ尋ねてもいいだろうか？…そなた、年はいくつだ？未成年とはきいてはいるが」

「未成年ですよ。少なくとも私の生まれた国では。この国の成人がいくつか存じませんでしたので。ただ、実年齢を直接聞いてくる方がいらつしやらなかっただけです」

「上手いやりかただ」

はじけるように男が笑った。何事かと外で待機していた騎士達は、少女の部屋に居る相手に気付き居住まいを正す。それに手を上げて応えながら、男は彼らに元の場所に戻るよう指示した。

「年は17…クーラになれば18になります。日本…生まれた国では20が成人なので」

「成る程。この国では男女問わず16で成人とみなされる」
なんとなく、想像はついていた。しかし、先日街に出た時にも思ったが、外見的に自分より年上に見える少女達が未成年の証である膝丈のスカートを履いているのを見てしまっただけは、何も言えなくなる、というものだ。

立ち話もなんだからと、男にソファを勧め、お茶を入れる。

火属性の魔法を掛けられたポットは、長時間お湯を保温できるアイテムだ。こんな風に日常に魔法が使われていては、科学方面に文明が発達しにくいのも頷ける。

火を熾すにしても、火打石 マッチ ライターという、発明における進化の変わりに、こちらではより使い易いようにと、魔法の道具が進化する。

まあ、科学の発達も善し悪しよね。などと達観した考えを持ちながら、二藍は自分の分のカップを手にして、男の前に腰を降ろした。

元々友人間でも聞き手に回ることの多い彼女なので、沈黙は苦にならない。目の前の男も決して饒舌なタイプだとは思えなかった。

ふと、疑問に思っていたことが頭の中を過ぎる。訊くべきか、やめようか悩んでいると、それまで腕を組みソファに身を預け瞳を閉じていた相手は、その青い瞳を少女に向けた。

気配だけで相手の機微を悟ったと言うことなのだろうか。先日の剣技や先程の動きといい侮れない相手だと二藍は思う。

「問題があることなら、お答えいただかなくてもいいんですが」
視線だけで意志を伝えようとする相手に、どこかで居たな。と、幼

馴染の一人を思い出し苦笑しながら彼女は、言葉が続ける。

「キースさんは、エンデルクさまの事を『閣下』と呼んでいらつしやいましたか、何故ですか？」

ああ、とエンデルクは口の端を軽く上た。

「王国には3つの騎士団がある。それを束ねる将の役職を拝命しているからだ」

將軍閣下、の『閣下』なのだろう。先程自分に対しても名前で呼ぶよう言った相手だ、『殿下』と呼ばれることが嫌なのかもしれない。そう結論付け、二藍は頷いた。

しかし、暇だ。

黙っていることは苦痛ではないが、何もせずにじっとしていることは得意ではない。

「お願いがあるんですが」

相変わらず視線で促す相手に少女は思い切って口を開いた。

「本を読みたいんです」

「本？」

首を縦に振る二藍に、エンデルクはふむ、と頷く。

口数が多くない、というか周囲にはもう少し言葉で意志を伝える努力をしろ、とよく言われるので自覚はある。

そんな自分と一緒になのだ、退屈していても可笑しくは無い。

ふと、この部屋を見回して成る程、と思う。

王妃の支持で侍女がいくつか『暇潰し』と思われるものを持ってきてはあった。貴族の子女がよく行なうと言われている、刺繍やレー

ス網、そして何冊かの…。

「童話、か。お前の年では退屈だろうな」

言葉使いがぞんざいになっているのに気が付きはしたが、相手が相手なのでコレが普通だろう。

「面白かったですよ？」

と、いう事は全て読んでしまった、と言う事なのだろう。対象年齢は遥かすぎているが、それでもそれなりの量はある。

「…よかるう、付いてくるがいい」

立ち上がった男は、膝丈の少女の服を見て苦笑を浮かべた。

「『向こう』では、これが普通の長さですよ？」

エンデルクの視線に気が付いて、二藍がスカートの裾を少し持ち上げた。

「っていうか、もつと短いものの方が主流です」

少女が上げて見せたスカート丈に、男は目を見開き、大きく息を吐いた。

「…とりあえず、他ではやるな。先日の人買い組織は壊滅してないからな」

はい、と素直に頷く二藍に、少しばかり疑わしそうな視線を向けて、エンデルクは外に居た騎士に言葉をかけ、扉を大きく開けさせた。

通路側からは、暮れ始めた複雑な色合いの空が見て取れた。ヨーロッパの古城にある窓ガラスの無いむき出しの通路には、結界が張ってあって、風雨を防止しているとキースが教えてくれた。

呼ばれる声に、我に返ると二藍は騎士達に頭を下げてエンデルクに向って歩き出した。

5話

案内されたのは至ってシンプルな内装の部屋であった。

印象として、校長室とか理事長室。大きな机の前に高級そうな応接セット。壁際には作り付けの大きな本棚。

その本棚の前にエンデルクは二藍を誘った。

「本来なら王室の書庫に案内すべきなのだが、あそこは陛下の許可がないと使用できない。悪いな」

男の言葉に少女は首を振る。

「ここは、俺が王宮に居る時に使う部屋だ。好きな本を選ぶといい」と、いうことはこの本全てがエンデルクの私物なのだろう。多少気になる言葉がありはしたが、深く追求するべきではない、と考え口を紡ぐ。

彼女は、よく友人に「雑食」と言われる、読むものに対してジャンルを選ばないタイプだった。ライトノベルから、専門書まで。自分が面白いと思えばそれでいい、との考えは従兄に由来する。

彼女の従兄は表向き図書館の司書を勤めていた。裏の職業というか、本職は言うまでも無い。

それはさておき、エンデルクの本棚も多種多様な本が置かれていた。背表紙を見る限り恋愛物とかは無さそうだが、歴史書や軍記物、哲学書に経済学、流石といえば流石な内容だ。

ざっと見ていた少女の視線が、ある一点で止まる。

「これか？」

二藍の視線を追ったエンデルクは少し高い位置にあるその本を指差した。少女の首が縦に動いたので、取り出して渡す。

「神話か。興味があるのか？」

「はい、この世界の神様の位置づけはキースさんから伺いましたけど、こうして本になっているということはそれなりに伝承とかあるんだなあ、って思ってた」

ぱらぱらと捲って、改めてキースの魔法は凄いと思う。部屋に置かれてあつた絵本たちは、子供向けの文章で書かれたものだったので、どこか読めて当然、という気持ちがあつたが、この本は古典的な文体で書かれているにも関わらず、すらすらと読むことができた。

他の本も同様である。中には違う言語の本もあつたが、見知らぬ文字も気にならない。

（あ、これは辞書要らずかも）

とはいえ、いつまでもこの腕輪に頼っても居られないだろう。最低読み書きくらいはできるようにならないといけないな、と二藍は決心を固める。

「この本、お借りしてもかまいませんか？」

この厚みならそれなりに時間が潰せそうだ。それに、外面の良い紫炎なら兎も角、柘榴が社交場に長時間居られるとは思わない。

「構わない。好きなだけ……いや、それはお前にやろう」

え？と顔を上げた二藍にエンデルクは頬を緩める。

「先日怖い思いをさせた詫び、ということだ」

口を開きかけた少女は、思いとどまるように口を噤んで暫く考える
と、笑顔と共に男を見上げた。

「ありがとうございます。遠慮なく頂戴いたします」

「…その言葉遣い、なんとかならないか？」

首を傾げる二藍にエンデルクは苦笑する。男の表情で何かに気づいて、少女は困った表情を見せた。

「『ねえちゃん、虫にまで、ですますを使って話す』」

問いかける眼差しに、少女の笑いの質が変わる。

「弟たちがよく言うんです。何に対しても丁寧語を使いすぎる、つて。でもこればかりは今更治せません」

二藍にとって、この話し方は思考と同一となっている。これが普段の自分だから諦めてくれと暗に言っているとエンデルクも頷かざるを得ない。

扉を叩く音が聞こえ、侍女が食事の用意が出来たことを伝えるとエンデルクは、少女へと顔を向けた。

「この部屋で構わないか？」

「私は構いませんが、このお部屋で頂いてもいいんですか？」

「問題ない。食すのは隣の部屋だ。悪いが二人分こちらに持つてくれ」

深々と頭を下げ、侍女が部屋を出て行く。さほど時間をおかずに、別の侍女と共にトレイを押してやってきた。

控えていた侍従が続き部屋の扉を開ける。

隣の部屋に案内されると、6人がけのテーブルが置いてあった。

暖炉の上にはこの国の国旗と剣。いかにもな部屋に小さく笑いが漏れる。

「軍の会議室と執務室をかねている部屋だ」

先程の部屋と同じように、窓際に大きな机が置いてあり、その隣に小さな机が並んでいる。おそらく秘書とか副官の机だろう。

テーブルに並べられた食事を見て、二藍は微かに眉を寄せた。内容は豪華だ、手が込んでいるのは見ただけで解る。そしてこうなつた理由も想像がつく。

お家騒動の最中の王族の食事。江戸時代の將軍家でもあつた話だ。椅子を引いてくれた侍従に会釈すると正面に座つたエンデルクに視線を向けて姿勢を正す。男が軽く頷くと少女は手を合わせて『いただきます』と呟いた。

「それがキースの言つていた、食事の前の挨拶か」

一体どこまで報告されているのだらうと考えつつ、二藍は「はい」と返事をして、前菜用のフォークを手にした。キースの家では、本人の希望も合つて普通の家庭料理がでてくるが、きちんとしたディナーはフランス料理に近い形式だ。

王宮を訪ねる前に、基本的なマナーはマーシャから教えられていたが、『人間』が食べる食事は使う食材や道具の差異こそあれ、変わりは無い、ということなのだろう。

食事のマナーは「憶えておいて損は無い」という、両親の方針で和洋中一通り身につけていた。ナイフとフォークでバナナも葡萄も食べれることが出来るのは、実は密かに自慢だつたりする。

（外見と服装で）幼い少女のきちんとしたマナーに侍従が驚きの表情を見せるが、それに気を悪くした様子も無く、少女は淡々と食事を進めた。

エンデルクに比べれば量も少なく、子供用にアレンジしてある辺り、流石王宮だと二藍は感じる。例え、毒見の為に冷たくなった料理でも、十分に味わいがある。これが温かかったらさらに美味しいだろう。

非公式であれ、王妃の客で、王弟が付き添っている相手に手を抜くことはしない。きちんと教育がなされているなあ、などと呑気なこ

とを考えながらデザートに進んだところで、少女の手が止まった。
「どうした、フタアイ？」

はっとして顔を上げた少女は、首を振って笑顔を見せる。

「このケーキ、すつごく手が込んでいるなあって思ったんです。崩すのがもったいなくて、どこから手をつけて……って、きやつ」

考え込んで手が滑ったのか、皿のケーキがテーブルに横滑りしていった。眉を八の字にして情けない顔で侍従と侍女を見ると、彼らは微笑んで首を振った。気にするな、ということだろう。

彼らにしてみれば、王妃の客人で、それなりの家柄とはいえ、若い少女が完璧に近いマナーをすること自体が非日常だったのだ。

他の貴族の令嬢たちのように出された食事に文句を言うことなく、出された品々に「おいしい」と言って笑顔をみせる少女に、好感を持って接していた。この程度の失敗は、微笑ましくさえある。

「すぐに代わりを持ってまいりますね」

侍女に「ありがとうございます」と礼を言って、少女は首を振る。

「せっかくですけど、いいです。お腹一杯で、これ以上食べると横に育って行きそうで怖いです」

「もう少し縦にも横にも育つべきだと思うが？」

笑いを滲ませたエンデルクの言葉に少女は頬を膨らませる。

しかし、それ以上に周囲は普段見ることが出来ない穏やかな表情のエンデルクに驚いていた。

「では、私も止めて置こう。エドガー、すまぬが彼女に何か果汁と私には茶を持ってきてはくれぬか？」

立ち上がったエンデルクに、エドガーと呼ばれた侍従は頭を下げた。少女の椅子を引くときちゃんと礼が

返ってくる。軽く目を細めて、彼は頭を下げた。

「後で、あのデザート調べたほうがいいです」

差し出された手に自分の手を重ね合わせ、歩き出した少女は、隣の男にしか聞こえない小声で囁いた。

一瞬目を見開いたエンデルクだったが、お茶の支度に下がろうとしたエドガーを呼び止め耳打ちする。

息を飲んだ侍従ではあったが、すぐに平静の顔となり頭を下げた。

「ああ、フタアイ」

「はい？」

エンデルクに背を押される格好でエドガーに体を向けた少女は、不思議そうに二人を見比べる。

「この男なら大丈夫だ、憶えておいてほしい。エドガーも同様に」

エンデルクの言葉に少女は笑顔を、エドガーは驚きの表情を見せる。

「エンデルクさま…このお方は」

「…そうだな、私の友人、という事にしておこう。どうだろうフタアイ」

「光栄です」

悪戯っぽい口調のエンデルクに笑顔で応える少女を見てエドガーは目を細めた。暫くぶりを見る主のリラックスした表情に安堵の息を吐く。

隣の部屋に移っていく二人に腰を折り見送るエドガーの口元には、彼自身久しぶりの穏やかな笑顔が浮かんでいた。

5 話（後書き）

いい加減、他の女性の登場人物も出したいです。

6話

お茶と共にエドガーが持つてきた果汁には、小皿に焼き菓子が乗っていた。嬉しそうに礼を言う少女に笑顔を見せると、彼はエンデルクに難しい顔を見せた。

「やはり仕込まれていたか」

「はい、致死量ではありませんでしたが、お二方とも数日は動けなくなるかと」

焼き菓子を口に使っていた二藍は、甘い味にも関わらず苦い顔を見せる。

「お嬢様にも感謝いたします。…しかし、良くお分かりになりましたね」

あゝとか、うゝとか唸っていた彼女は、困った顔で「内緒ですよ」と二人に念を押す。

「祖母の専門だったんです…毒物つて。独特の香りがしましたから。香り付けには、あのケーキ不似合いです」

ほう、と驚きの顔を見せる彼らに少女は小さく息を吐いた。

「他の家族には内緒で教えられた知識なので…祖父は、そんな知識祖母で途絶えさせてしまいたい考えでしたから、まさか、祖母の膝の上で薬学、毒物の知識を教えられているとは思っていませんでした」

双子の弟を身ごもっていた間と、産後暫く、二藍は祖母の手によって育てられていた。この時の祖母の毒薬講座が、少女の子供らしさを奪う大きな要因であった。

「祖母は厳しかった訳じゃないんです。むしろ、初めての女の子の孫っことで相当甘かったみたいなんですけどね」

でも、彼女の口から話されるのは、毒薬の効能と症状。聞いていて気持ちのいい話ではない。

「正直助かりました。デザートは盲点でしたので」

不思議そうな顔を見せるとエンデルクは苦笑する。

「普段は食べないからな。だが、客と一緒にいる時は相手に合わせて食べることもある。…こうなると、どちらが狙われたのか判別できないのが難しいな」

致死量でもなく、食べる食べないが判断できない、とあつては二藍の方が確立としては高いだろう。

ここに居る誰もがそれを感じた。…しかし、何故リスクを犯してまで少女を狙うのか。

ふと、気がついたようにエドガーが疑問を口にした。

「では、お嬢様のお兄様がたもこのことは？」

「知らないですよ。だから『内緒』なんです。それとですね」

エドガーに二藍は笑顔を向ける。

「子供の頃から家族同様に、っていうか、忙しい両親の変わりに育てられたようなものですけど、紫炎たちは兄ではないです。でも、うん、おにいちちゃんですけどね、私にとっては」

おや、とエドガーは笑い、承知しました、と返す。彼もまた、少女が外見どおりの年齢ではないことに気がついた。

「しかし、あのキースさまともあろうとお方がお嬢様のご年齢に気がつかないとは思議ですね」

「保護者でいたいのだろう」

唇の端を上げてエンデルクが答えた。

「自分が保護すべき、護るべき対象と思うことが、必要以上にフタアイを子供にしたいのだろう…お前も良い様に利用していそうだな」

「人聞きの悪いことおっしゃらないでください。全面否定はしませんけど」

口を尖らせる少女はやはり幼く見える。

軽いノックの音がして、二藍に部屋についていた騎士が入ってきた。
「お連れ様のお一人が戻ってこられました。こちらにご案内いたしますか？」

「いや、向こうに戻ろう」

少女に与えた本を手にとると、少女に手を差し出す。立ち上がった二藍はエドガーに頭を下げた。

「ごちそうさまでした。楽しかったです、ありがとうございました」

「とんでもございません、私の方こそ楽しゅうございました。またお会いできる事を楽しみにしております」

深々と頭を下げる侍従に、照れたような笑顔を見せて少女はエンデルクに手を引かれ去っていった。

それを見送って、エドガーの口元に別の笑いが浮かぶ。

「可愛らしい姫君ですね。我が主がお気に召すのもわかる気がします」

小さな呟きは誰にも聞かれることが無い。
「邪魔者は私が排除いたしますよ」

「よう、二藍」

部屋に戻るなり目にしたのは、ぐったりと疲れきった表情でソファに身を沈めていた柘榴だった。

「そちらさんは？」

「っていうか、もう化けの皮が剥がれたんですか？」

「二時間が限度だっつーに：三時間も良く我慢した、俺」

なにか違う、と思いながら少女は柘榴の傍に腰を降ろす。その肩に頭をおいて、柘榴は視線をエンデルクに向けた。

「で、もう一回聞けど、そちらさんは？」

「ああ、失礼した。今宵の警護をしている、エンデルクだ」

ふうん、と呟いて青年は自分たちの前のソファを目で示した。

「座れば？王弟殿下さま」

「知っていてその態度ですか？」

少し驚いた顔をしたものの、何も言わずに男は示されたソファに腰を降ろす。

「いや、だってお前が気い抜いているんだもん。俺が気張る必要ないだろう？」

「そんなに気を抜いていました？私」

「少なくとも背中預けていただろう？」

先程の立ち位置を思い出し、少し照れた顔をした少女に柘榴は「ばか」と笑う。

「俺達にはそれで十分だ。二藍がアンタを信用したんなら、それでいい。何者であっても、な」

黙って聞いているエンデルクに柘榴は目を細める。しかし、すぐにその表情を緩めた。

「あっちじゃ、何人か探し回っていたぜ。王様と王妃様は『仕事』だつてやっていたけどさ、こういった行動が不仲説を増長させているんじゃないか？」

「柘榴」

「いや、構わない」

あふ、と欠伸をもらした柘榴は男に視線を向ける。

「ところで、アンタの結界ってキースすら感知できないって話だけど、本当か？」

「中に居れば感知はされないだろうな。もっとも力技で対抗されれば意味は無いが」

感知はされないが、破られはする。そういうことだろう。

「なあ、二藍。俺暫く『本体』に戻ってもいいか？流石に疲れた」
「柘榴！？」

「構わないだろう？紫炎はいないし、こっちにーさんはお前が信用した奴だし、俺疲れたし」

頭を抱えた二藍だったが、申し訳無さそうにエンデルクを見上げる。
「申し訳ありません。暫くの間結界をお願いしますか？私達の周囲だけでいいので」

「よかるう」

そう言つて、エンデルクは静かに詠唱の言葉を唇に乗せた。完成と同時に柘榴は体を大きく伸ばす。

「んじゃ、お休み」

次の瞬間、少女の膝に居たのは一匹の黒い猫。今まで着ていた服が彼女の足元に落ちた。

「！」

言葉も無く瞠目するエンデルクに二藍は苦笑をむける。

「…詳しい事情を聞きたいところだが、頭がついていかないだろう。機会があれば話してくれ」

「ありがとうございます」

頭を下げると、少女は膝の猫を庇いながら、服をソファに置いた。

その間に、エンデルクは外に居る騎士に少女の兄が転寝をしたので結界を張った旨を伝える。これで、魔法が働いたことに不審を持って尋ねてくるものが居ても騎士たちが対応してくれる。

膝の猫を気遣いながら、少女は貰った本を読み、男はリラックスしたように瞳を閉じてソファに身を預ける。

静かで穏やかな気配が、その部屋には満ちていた。

6 話（後書き）

とりあえず、柘榴の正体です。紫炎についてはまた後日、という事で。

7話

柘榴が顔を挙げ、少女の膝から飛び降り天蓋付きのベットに潜り込むと、彼女は畳んだその服を布団の上に置いた。

軽いノックが聞こえ、エンデルクが結界をとくと呆れた顔の紫炎とキースが入ってきた。

「王弟殿下の結界のなかで寝るなんて、どこの何様だ」

「…柘榴さまだ」

紫炎の言葉に顔だけ布団から出した柘榴が答える。布団の上に畳まれた服を見て、溜息を一つ吐くと近くにあった衝立を持ってきて置いた。

「俺達は、ここと続きの隣の部屋を用意されている。寝るんならそっちで寝ろ」

そついうと体をエンデルクの方に向けて頭を下げる。

「柘榴の為にお手数をおかけしました」

「いや、必要はないかと思ったが念のためだ。気分を害されたなら申し訳ない」

いいえ、と首を振ると青年は二藍の頭に手を乗せた。

「お詫びを申し上げるのはこちらです。妹がご迷惑をおかけいたしました」

おや？と少女は紫炎へ視線を向け、キースへと首を巡らせると、青年が困った笑いを浮かべていた。

「閣下がここに結界を張られたので、お出でになる場所が特定されたのですよ。ですから二藍の警護の為の夜会の欠席ということになり、紫炎の身分が取りざたされましてね」

王弟みずから警護をする相手の兄、というで周囲から色々勘繰られてしまったと、キースは教えてくれた。

「知る者が全て笑って流していたので、憶測だけが進行しましてね。一番大きかったのがフォーネック王国の隠された血筋、というものでしたね」

「フォーネック、か。『秘された王国』だな」

不思議そうな少女の視線にエンデルクが苦笑する。

「伝説の王国だ。本当に逢ったのかもわからない幻の国」

「ムーやアトランティス。エルドラドみたいなものだ」

「永遠の楽園。黄金の都とも呼ばれる国ですよ。あくまで物語上の話ですが」

「伝説の国の王子さまと王女さまか、こりゃいいや」

上着を羽織って柘榴がやってくると、紫炎が口元に笑いを浮かべた。

「お前だってその一人だぞ、殿下」

「…悪かった」

「それだけ、お二方の立ち居振る舞いが完璧だったということですよ」

くすくすと笑いながら言うキースに、紫炎と柘榴がうんざりとした表情を見せる。

「義理は果たした。王妃さまのご好意とやらにもそれなりに報いたと思うが？」

「十分です。感謝いたしますよ」

気取った仕草でキースが頭を下げる。そんな青年の様子を見てエンデルクが驚いた表情をし、次いで、その口元に笑みを乗せた。

「そなたが、そのように打ち解けるとはな」

低く響く声に青年ははっとしたように男の方へ顔を向けた。

「たとえ切っ掛けはなんであれ、モナドに感謝せねばいかぬ。彼らには迷惑な…いや、それ以上に多大な被害を及ぼしている話であつてもな」

そう言つて音をさせない動作で少女の前に跪く。目元を綻ばせ、二藍の手を取り口付ける。先日の一瞬掠めるようなものではない、掌への口付け。

「私の世界では掌への口付けは懇願だといいます。こちらでは、どいう意味を指すかは存じませんが、それでも我らが感覚でお尋ねします。何を願われます？」

大人びた…彼女にしてみればこれが普通なのだが…その問いかけにエンデルクは微笑んだ。それこそキースが驚きの表情を固まらせるほどの、そんな笑顔だった。

「何も…貴女がたが平穩であるならば、キースも私も穏やかに暮らせましょう、忒色の姫君よ」

優雅に腰を折ると男は出て行つた。

その扉を呆れたように見つめて、紫炎が溜息を吐く。

「西の分家の若旦那といい勝負だな、あの気障さは」

噂の相手の顔を思い出し、少女は苦笑を返す。掌へのキスが「懇願」だと教えてくれた、当人だ。二藍にとつては、又従兄にあたる青年は、一族の中でもフェミニストで有名だ。

「確か、額のキスは親愛のキス。頬のキスは友情のキス。唇へのキスは愛情のキス。甲へのキスが忠誠で、掌が懇願…だったっけ？」

「驚きました」

詰めていた息を吐き出すようにキースが言う。

視線を集めた青年は泣き笑いに近い顔をしていた。

「閣下があのような表情をお見せになるなど…何年ぶりの事でしよう」

不思議そうな表情の異世界の友人達に、青年は複雑な顔のまま言葉を続けた。

「あんなに穏やかな顔は、殿下との継承問題がおきてからお見せになったことはありませんでした。二藍」

名を呼ばれ少女が振り向くと、青年は静かにその前に膝をついた。慌てる少女に見せた笑顔に、彼女の動きが止まる。

「感謝します。貴女に。そして、紫炎、柘榴、貴方方にも」

静かに少女の手を取り、その手の甲に唇を落とした。

彼らは知らない。この国一の魔法使いと剣士、この二人が王とも言えども膝を屈した事が無いことを。

8話

「もう二度と王宮になんて行きません」

二藍にしては珍しい語気の荒い口調に、青年達は苦笑する。とはいえ、内二人も同じ気持ちであつたが。

翌朝、少女や式神たちの元には山のような贈り物と、同じくらい面会の申し込みが来ていた。

それら全てを断つて、贈り物は全て贈り主に返し（匿名のものは怖くて受け取れない、とキース経由で宰相の下へと届けられた）キースの魔方阵で屋敷に戻ってきたのだった。

「しかし、もう必要がないと思つていたのですけれどね」

屋敷に新たに張りなおした結界に青年は肩をすくめる。面会と贈り物攻勢は、ここにも及んでいた。

「しかし、モナドの名前には呆れました。しかも、貴方方の保護も名乗り出るとは」

彼らの存在が政治的に利用できると踏んだのであろう。キースに自分の責任だから彼らを保護するのは自分の役目だといつてきた時は驚いた。流石に呆れた国王から、正式に彼らはキースの保護の下に、この国での生活を保障する書類が届いた。

「モナドを止めるより余程簡単で効果的なやり方ですからね。流石に王妃さまも反省されたらしく、貴族たちに牽制しているらしいですよ。まあ、ある意味逆効果でしょうけれど」

それだけ彼らが重要人物だと暗に示唆しているようなものだ。と、

「いか人は物事を自分の都合の良い方向に捕らえたがる。彼らが王室の大切な客人ならば、自分たちもその恩恵に預かりたい、と。」

「いつそのこと本当の事を言う、とかはどうだ？立場的に問題があるのならモナドの事は抜きにして」

「そうすると、今度は好事家の餌食ですよ。それでも二藍の容姿は王宮で話題になっていますからね」

「エンデルクに付いて歩き回っていた姿は、それを見た者達から貴族たちに広まったらしい。」

「お嬢様にお届け物でございます」

召使が持つてきた包みを見て、少女は顔を綻ばせた。

「誰からだ？」

「エドガーさんです。王弟殿下の侍従でいらっしゃる方です」

「エンデルクと行動を共にしていた彼女がその侍従と知り合ったのは不思議ではないが、その相手が何故彼女に贈り物をしてきたのか、その理由がわからない。」

その疑問をキースが口にすると、少女は中身の一つを手渡した。

「本…ですか。ああ、流石にこの類は家にはありませんね」

「王弟殿下の書庫にもなかったもので、それを口にしたらエドガーさんがいくつか見繕って貸して下さるっておっしゃってくださいなんです」

包みの中身はいくつかの本。恋愛小説を中心とした女性の好みそうな内容だった。

「楽しそうにページを捲る二藍に、呆れたような笑いを浮かべて紫炎は軽く手を振る。」

「部屋で読め。お前は一旦本を読み出すとキリが付くまで動かない」

から。こんなところで読まれたら迷惑だ」

頬を膨らませた彼女だったが、心当たりが山ほどあるので何も言い返さず、キースに声を掛けると自分の部屋へと戻っていった。

「気持ちには判らなくもありませんね。私も新しい魔道書が届くと寝食を忘れて読みふけりますから」

「あいつはもつと酷いぞ。いつだったか、公園で読み出して夢中になって、探しに行った俺にも気づかず、抱いて家に運んだんだが、運ばれた事も気づかずになっていたからな」

「あれには笑った。『どうして私家にいるの!?!』だったな」

これには流石のキースも呆気にとられ、ついで盛大に吹き出す。ひとしきり笑って、青年は瞳を和ませた。

「エドガー殿は、お若い頃王宮の書庫に勤めて要らしたことがおありの方です。きっと二藍に良い本をお薦めくださるでしょう」

まさか、それがこの世界での毒薬に関する書物だとは誰も考えてもいなかった。

上手くカモフラージュされた中にあるその本には、古今東西（と、この世界で表現するかは兎も角）ありとあらゆる毒物に関して書かれてあった。

ある可憐な花を咲かせる植物から、ほんの数滴出る蜜には、何人殺すことのできる猛毒がある、とか。

動物が食しても大した事にはならないが、人が食べるとお腹を壊す効能がある植物や、ある生き物の臓器の一部が、皮膚から浸透する遅効性の毒だとか。

解毒方法のあるものはその説明まで懇切丁寧に書かれた本だった。

「でも、エドガーさん、どうやって入手されたんでしょう？」

ちなみに、その背表紙と始めの何枚かは、この世界で有名な悲劇の恋物語が差し込んであった。その内容は大まかに手書きで書かれて、自分の世界のロミオとジュリエットに良く似ていると二藍は思う。

（人の思考パターンって、異世界でもそんなに変わりは無いということですね）

自分たちに盛られていた毒のことはすぐに分かった。割とポピュラーな毒ではあるが複雑な効能と部位によっては薬にもなりうる植物を原料としたもの。

殺傷能力は低いが、使い方によっては副作用も強い。

流石に、ここまで複雑だと本当に自分を狙ったのか分からなくなる。だが、二藍が考える程度の事は、エンデルクもエドガーも想定のうちだろう。

弱い毒とはいえ、その犯人が皇太子派とは限らない。

「ま、とりあえず今のところは傍観させてもらっていてもいいですよね」

ページを捲りながら、少女は笑いを口に乗せる。少しばかり火の粉が降りかかってきたとはいえ、未だ『対岸の火事』である。

24年という年月を王弟という立場で生きてきた上に、年の近い甥と王位を巡って対立をさせられようとしている人物ではある。それなりに身の処し方を知っている大人に余計な口を挟むほど、二藍は身の程を知らぬわけではなかった。

本音を言ってしまうと、そんな厄介ごとに首を突っ込む気など更々無い、と言うことだ。普通の生活が平穏な日常が一番。

しかし、彼女は忘れていたのだ、あちらの世界の自分の日常を。

自分が生きてきた世界の日常が、一般のそれと大きくかけ離れていることを。

そして、彼女の平穏を願った当の人物が策士であることを気付いていながら、失念してもいたのだ。

9 話

暫く続いた贈り物攻撃と面会の申し込みであったが、絶対に受け取らない、会わないの姿勢を貫いた彼らと最終的にキレて「彼らをつれて領地に引つ込む」と言い出したキースの一言によって、沈静化したのは彼らがこの地に召喚されて三桁の日数がたとうとした頃だった。

半ば軟禁状態で、いい加減鬱屈が溜まっていた三人の下に、エンデルクが訪ねてきたのはそんな時だった。

「人買い…あの時の人たちですか？」

ほぼワンシーズン、夏一杯出歩けなかった彼らは、その間こちらの言葉を覚えることに費やした。

元々「言葉」に括りの無い紫炎や柘榴に加え、語学が得意な二藍だったので、今では日常会話程度であれば不自由なく話すことが出来る。ただ、周囲の目を欺くためと、霊力の変換の為に腕輪は填めたままだった。

「ああ、手伝ってもらえないか？」

図ですね。心の中で二藍は密かにツツコミをいれた。

「反対です！そんな危険なことを彼女にやらせるなど閣下らしくありません。それ以前にそれは街の警邏の仕事。將軍自らお動きになることはありません」

「だからこそ、私が動くのだ」

キースの反対は予想の範疇だったらしく、エンデルクは淀みなく言

葉を続ける。

「二藍に協力してもらう故に私が動く。それに紫炎殿も柘榴殿もおいでだ」

言葉に詰まるキースに少女は内心苦笑を浮かべた。ここで、彼が反対すればエンデルクや紫炎たちの実力を疑うことになる。しかし。

「二藍も自由に外に出たいであろう？」

矛先をこちらに向けましたね？視線で問うと、男の瞳が微かに細められた。

先程から気づいていたが、青年は彼女達の名前を綺麗な音で…彼ら本来の音で発音していた。こちらの言語から考えると翻訳機なしでたいしたものだと、妙なところで感心する。

ゆっくりと紫炎と柘榴を見ると、二人とも黙ってはいるが瞳は楽しげな光を宿していた。

（気持ちは解ります。いい加減ストレスも溜まってきましたからね）
「喜んでご協力させていただきます」

「二藍！」

椅子から立ち上がって叫ぶキースに、少女は笑顔を向ける。

「紫炎と柘榴の実力はキースさんもご存知でしょう？それに護符をいただければ身を守れますから」

「しかし…」

「キース。私はそれほど信用ならぬか？」

止めの一発とはよく言ったものだ。エンデルク本人も確信犯だと彼女と式神たちは気づく。

「…承知いたしました。ならば、私もご同行することをお許しくだ

さい」

「ならぬ」

顔を挙げ男を見つめるその瞳を、当の本人は何でも無い事のように受け止める。先に逸らしたのは魔法使いの方だった。

「そなたほどの魔力を持ったものが控えていれば罠だということが解ってしまう。今回は我ら騎士隊の一部が全面協力をするのだ。蟻の子一匹逃さぬよ」

この世界でも「蟻の子一匹」なんて表現をするんだ。などと呑気に考えたのは二藍で、紫炎と柘榴は久しぶりに揮える術と、このところ溜まったストレスの発散場所に心なしか頬を緩めている。エンデルクは相変わらず涼しげな表情で、一人苦虫を噛み潰しているのはキースだけだった。

ふと、その言葉に引つ掛かりを憶えて、彼は居住まいを正した。

「騎士隊が協力するとおっしゃっていましたが、それほどの組織なのですか？」

「貴族の一部が関わっている。人身売買などという忌まわしい事実が、今だはびこっている一因がそこだ」

後ろ盾が居る、隠れ蓑がある。需要があるからこそ供給するものがある。

「ここで叩いたところで、また同じような組織は生まれるであろうが……」

男の瞳が穏やかに細められ、二藍に向けられた。

「異国からの客人にこの国を見てもらえぬのも寂しいからな」

赤くなる顔を自覚しながら、二藍は顔を俯ける。どこかこの場にそぐわない空気が流れた。

「ほんと、お前って『王子様』だよな」

「柘榴！閣下に対してそのような口の利き方は不敬です！」

キースがとがめるような口調で柘榴を静止するが、エンデルクは苦笑して首を振った。

「構わぬ、キース。言葉使いがどうであれ、柘榴殿は私を信頼してくれている」

「そんな無表情で言われたって嬉しかねえよ」

無然とした表情の青年に少女は笑い、魔法使いも渋々ながら引き下がる。

そして、紫炎は。

盗み見た主と視線が合い、返される笑顔にもはや苦笑するしかない。柘榴の彼への信頼は、彼女のそれに由来する。二藍が男を信じているからこそ、彼もそして自分も信じるのだ。

主と式神の、しかも普通とは異なる結びつきは、こういった感情も影響する。

一夜にも満たない短時間でどうやってこの男が彼女の信頼を得たのかは解らないが、それならそれでいい、と彼は思う。

この少女が、この世界の人間達の中で独りきりにならずに済むのなら。

10話

「ファミアさんって騎士さまなんですか」

うわぁ、と少女の感嘆の声に、ファミアと呼ばれた女性は微笑んだ。金色の髪に淡い緑の瞳。並んで歩くには相当の覚悟が要る彼女は、そっと自分の唇に手を当てる。

「あ、ごめんなさい」

頭を下げる二藍に首を振ると、ファミアは笑顔を深くした。

「ザリックの話の通りですね」

え？と顔を上げる二藍は聞き覚えにある名前を記憶から掘り起こす。

「え、と。確かでん…エルリックさまのお傍に仕えていらっしやる騎士さまですよ」

内容が内容だけに声を潜めるが、美女と異国の顔立ちをした少女は目立ちはしても、話の内容は街の喧騒にかき消され、聞かれることまでは及ばない。

腕を組んで、露店を冷やかしながら歩く二人は、仲のいい姉妹のようだった。勿論、外見を除いてではあるが。

「同期なんです。騎士団の。もっとも部署が違うからめったに会いませんけれどね。その彼が以前話してくれたんです。とても綺麗な話し方をする女の子だよ、と」

うわぁ、と二藍が顔を赤くするのを見て、ファミアは瞳を和ませる。最初この話が持ち上がったとき彼女は反対したのだ、囿になるなら自分だけでいい、年端の行かない一般の少女を巻き込むのは善くな

い、と。しかし、彼女の上司は静かに首を振ると言ったのだ「心配無い」と。

紹介された二藍とその兄たちは、確かに魔力を有していたが、さほど強いものに感じられなかった。

青年達は武道もやっているらしく、鍛え上げられた体をしてはいたが、騎士団に所属する彼女から見れば、普通の青年と変わりは無かった。

あのエンデルクが何故そこまで彼らを信用するのかわからなかったが、命令と押し切られてしまえば、彼女に拒否権は無い。

膝下のスカートに、ゆるく三つ編みにした髪の毛を後ろで一つに結んだ少女は、多少赴きは違うがキチンとした躰を受けた良家の子女、という以外特筆したところは見当たらなかった。

（でも、異国風ではあるけど可愛い子よね）

自分がこの外見で人目を引くことは自覚しているが、この少女が人目を引くのは、この辺りであまり目にしない外見ばかりではないと彼女は気づく。

柔らかな笑顔、物腰。謙虚な対応。だからといって決して卑屈ではない生まれ持った「何か」。

ザリックではないが、好感を持つのに時間は掛からなかった。

そういった意味では、今回の囿に相応しいといえよう。好事家がこぞって手に入りたいタイプなのだ。

「他にも女性の方っていらっしゃるんですか？」

二藍の言葉にはっと我に返る。思った以上に自分の考えに没頭して

いたようだ。これでは、素人と変わらない、と苦笑して、意識を少女に向ける。

「ええ、いますよ。女性の方をお守りするには、男性ではどうしても限界がありますからね」

成る程。と頷く少女に、ファミアは悪戯っぽい笑みを見せる。

「同僚が嬉しそうに話してくれました。夜会でとても素敵な殿方がいらしたって。それきり会えないので残念がっていましたよ」

あはは、と乾いた笑いを浮かべた少女だったが、すぐにその笑顔が消えた。

「ファミアさん？」

二藍の問いかけに「なんでもない」と首を振るファミアだったが、組んでいる腕から緊張が伝わってくる。

心の中で苦笑して、少女は顔を向けた。

「釣れました？」

少女が見せた表情に怯えの样子が無い事に気がついて、ファミアも笑顔を見せる。

「どうしますか？」

「取り合えず、指示ではどこかの小道に誘い込む、なんですが」

ふうん、と首を傾げ少女は辺りを見回す。周囲から見れば、あちこちの店に目移りしている彼女に、困ったように笑いを浮かべる女性という構図が出来上がっていた。

「お嬢さん方、何かをお探しかな？」

いかにも人のよさそうな男性が声を掛ける。商人風のその男はにこやかな笑みを彼女達に向けた。

「アクセサリーを探しているんです。特別な時に使う物を」

少女らしいニュアンスを響かせ、二藍は笑顔で男に言う。女の子の「特別」は、国やたとえ異次元でも差異は無い。

訳知り顔で頷いた男は、近くの路地を示した。

「私の扱い物でないことが残念だが、ここを入った所に小さいが良
い店があるよ、行ってみなさい」

顔を見合わせた二人は、頷き合うと男に礼を言って頭を下げ、示さ
れた路地に入っていく。それを見送った男の口元に笑いが浮かんだ
が、すぐに体の向きを変え別の方向へと歩き出した。

そのサツシュに、小さな紙が挟まれていることを全く気づかぬまま。

店は確かにあった。小さな扉を開けると、店の女性がすぐに彼女達
の近くにやってくる。

「いらっしやいませ。どのようなものをお探しで」

「あ、えつとアクセサリーなんですけど…」

口元に手を当て考え込んでいる二藍に、ファミアは微笑みながらそ
の様子を伺う。

ひょっとして、ここが組織のアジトかも知れないと気を張ったが、
中に居る店員も普通の女性だ。客がいないのも、こんな風に路地に入
った場所ならば良くあること。そう思い、自分もアクセサリーを
見ようとしたとき店員が二藍に何かビンのようなものの蓋を取って
嗅がしているのが視界に入る。止めようとして後頭部に衝撃を感じ、
その場に崩れ落ちた。

ファミアに手刀を落とした相手は、膝をついて完全に気絶している
ことを確かめると、口元をゆがめた。

「売ればそれなりの値になるが、色々厄介な相手だからな、この女
騎士さまはよ」

そう言つて、店員の女性の腕の中で意識を失っている二藍に視線を
移して、笑いをさらに深くする。

「しかし、本当に珍しい顔立ちをしているな。伯爵が外に出さないっていうのも頷ける」

「そんなやばい相手にどうするんだい？」

女の言葉に男が鼻で笑う。少女の腕に手をやると、腕輪がずりりと抜けた。

「コレが無きゃ、伯爵だって居所を探せねえよ」

「この女は？」

床に倒れているファミアを見下ろして女が問うと、男は肩をすくめた。

「このままにしておけばいい。そのうち気がつくだろう。まあ、気がついたところで警護についていたお嬢様は行方知れず。コイツには懲罰が待っているだけだろうが、な」

楽しそうに笑う男に微かに嫌悪に眉を寄せ、女は二藍を抱えなおす。それに気がついて男は少女を受け取り抱き上げた。

「俺は先に行く。後片付けをさっさと済ませてお前は後から来い」
そう言つて裏口から去っていくのを見送つて、女は大きく息を吐きその場を後にした。

女が、彼女の周囲を注意深く探れば…もしくはここに居た男共々、もう少し強い魔力を有していれば気が付いていただろう。

ファミアが倒れたその傍に、一枚の小さな紙が落ちていたことを。

そして、二藍を抱き上げ出て行つた男の後を、一匹の黒猫が付いていった事を。

11話

二藍をベットに横たわらせると、男は部屋を出て行った。外から鍵を下ろす音がしたと同時に、少女は意識を周囲に向ける。体の上に軽い衝撃と重みが掛かり、柔らかな感触が頬を撫でた。

『誰にも見つかりませんでしたか？』

『そんなへまはしない』

自分を誰だと思っているんだ、との柊榴の台詞に二藍は苦笑する。

『しかし、なんていうか…立派な屋敷だな』

天蓋付き、ではないがそれなりに上質な布団とベッド。家具も立派なものだということが解る。

しかし、窓にはしっかりと鉄格子があり、そこから見える範囲では、声が届きそうなところに家屋敷はない。

どこかの貴族か有力者、裕福層の別邸か何かのように思われた。

二藍の腕輪が外されているため、会話は全て日本語だ。

『そういえば、柊榴。どうしたんです？その首輪』

ブルーグレイの色合いの革で出来た首輪を見て、少女は微笑む。黒い色の彼にそれは良く似合っていた。

『ああ、エンデルクから貰った。なんでも俺の霊力を抑えるものらしい。あいつの結界能力の応用らしいが、この世界の魔法使いつていうのは本当に凄いな』

実は、この魔法具はエドガーが作ったもので、彼はこの国でも数少ない魔法具の製作の術者であるのだが、二藍たちがそれを知るのは、

もう少し先の話となる。

と、黒猫は顔を挙げ、少女の布団に潜り込んだ。

『誰か来る。寝ている』

こくり、と頷いて二藍もベッドに横たわる。暫くすると、鍵が開く音と共に数人入ってきた。

「おお！」

「勝手に近づくなよ。こいつは大事な商品だ」

近づこうとする気配を誰かが止める。

「商品なら私が買っても問題は無いはずだが？」

その声に、別の声が被る。

「忘れたんですか？決まりは決まり。どんな形であれ、オークションを掛けると言うこと、買ったければ貴方が高値をつけて競り落とせばいい」

うつむ……。と唸る声と溜息を吐く音、軽く晒う声が交じり合う。

「ファリス伯が王家を通じて近衛に護衛を依頼する相手ですからね。困うならば余程気をつけないと、貴方が困ったことになりますよ」
溜息を吐いた声が言えば、晒った声が一層大きくなった。

「そんな大声で、目を覚ましたらどうする！」

「アンタの声のほうがよくぽどでかいぜ。心配するな、こいつには『ラグラ』の香を嗅がせてある。あと2、3ユラは目覚めねえ」

「ラグラとは、このような子供にそんな強い薬を使って大丈夫なのか？」

「さあな。けど、多少大人しくしていたほうがいいだろう？扱い易いからな」

足音が聞こえ少女の体が持ち上げられた。

「布団を掛けてあげてください。いくらなんでも、このまま放っておけば風邪をひきます」

「お優しいこつて」

呆れた声が返ってきたが、男は言われるままに降ろされた少女に布団を掛ける。

「大事な商品と言ったのは貴方ですよ」

顔に掛かった少女の髪を直し、抱き上げた男はふ、と笑いを浮かべた。

「本当に珍しい色合いですね。瞳も黒いと聞きました。ぜひ、起きた後に会ってみたいものです」

「お前も相当物好きだよな。こんな子供に何考えているんだか」

「何を言っている！その娘は私が競り落とすのだ！」

「競り落とすのは高値をつけた相手ですよ」

ふふふ、と笑いながら男は少女の髪を一房救い上げて、唇を落とすた。

「オークションは今宵、だったな。それまで眠っているのか？」

「いくらなんでも、その頃までには起きているだろうさ。何なら別の薬も与えておくか？」

「いえ、それは止めておきましょう。複数の薬を子供に与えて悪影響がないとは限らない…それに」

ふ、と笑う気配と、どこかウンザリした気配がおきる。

「涙に濡れた姿もまた愛らしいものです」

「…呆れた趣味だ」

自分の事は棚上げにして、最初に二藍に興味を示した声があがる。

「あんたが言うか？」と返って来て、男達は部屋の外へと出て行った。

『…髪の毛洗いたい』

『気持ち解るが、我慢しろ』

どこに隠れていたのか、布団を上げられた時には居なかった柘榴が、ひよっこり顔を出す。

『さて、とりあえずここの報告をしてくるか。一人で大丈夫か？』
につこりと笑う表情は彼らが見慣れたもの。

本来の仕事に望む時の二藍の顔。

『久しぶりに見たな、その顔』

『はい？』

不思議そうな彼女に首を振ると、柘榴は身軽な動きで窓の外に出る。
鉄格子も今の彼に意味は無い。

『よほど警備に自信があるのか、それ以外の理由か、魔法結界張って
いないぜ、この屋敷』

目を見開いた少女に軽く尾を振ると、黒猫は音もなく姿を消した。

それを見送ってから、少女は再びベッドに戻る。

『ラグラですか。なんだか、嫌な符丁ですね』

ラグラというこちらの世界の植物は、その全てに異なる薬効成分があることは、先日貰った本の中に書いてあった。

花から取れる香りは催眠作用。茎と葉は虫除け。そして、その根は。
(この間ケーキに仕込まれていた毒も、ラグラの根から作られたも

の
)

たまたま使用目的にあわせての偶然か…それとも。

とりあえず、体力の温存と二藍は静かに瞳を閉じた。

12話

ひたすら静かに泣き続ける少女を女たちは持て余していた。

何を言っても不思議そうな顔をして首を振るばかり、彼女の口から話される言葉も全く理解できない。

落ち着けさせようと飲み物や食べ物を与えようとしても口にしよう
としない。

彼女らが、自分たちの上の存在に助けを求めに行ったのも当然の成
り行きだった。

男が少女の部屋に行った時、彼女は部屋の隅におびえるように座り
込んでいた。

泣いては居なかったが、真つ赤な泣きはらした瞳と、男を見上げて
震える姿は妙な保護欲と同時に嗜虐心を煽る。しかし、少女に言葉
が通じない理由を知っている相手は、安心させるように膝について
視線を合わせて微笑んだ。

「心配しなくてもいいですよ…と、言っても貴女には理解できない
でしょうけれどね」

一杯に見開いた瞳の中にあるこぼれそうな雫に、男は満足そうな笑
みを浮かべた。

「本当に黒い瞳なのですね。珍しい…。黒い髪と瞳、別々に持って
いるものは何人か知っていますが、併せ持った者は、貴女が初めて
ですよ」

ふふふふ…と笑う男に、少女は怯えたように後退さる。離れた掌を
そのままに、男は笑いを深くした。

そのまま立ち上がると、周囲の女達に手を振る。

「この子供はこのままにしておいて構いません。どうせ、逃げられはしないのですから。他に仕事があるものはそちらを優先させなさい」

男の言葉に女たちは頭を下げ、部屋を出て行った。

扉に手をかけ男は少女の方へと顔を向ける。

「本当に、あの馬鹿ではありませんが手に入りたいですよ。異国の……いいえ、異世界の姫君」

泣きそうな、何を言われているのか解らない顔の少女をもう一度みると、男はそのまま扉を閉めた。

鍵を閉める音に、はっと気がついて扉に駆け寄り叩く。外からは楽しそうな笑い声が聞こえた。

「安心しなさい。貴女は私なんとしても手に入れますよ。そして、全てを一から教えて差し上げましょう。言葉も、何もかも、ね」

どんとどんと叩く音を背にしながら、男は笑いながら去っていった。

『本当に変態、ですね』

その気配が完全に消えるのを確認してから、二藍は扉を背に息を吐いた。

『しかし、異世界、ですか』

壁に耳有、障子に目有。そんなことわざを思い出して、日本語で少女は口にする。

自分たちが異世界からやってきたことを知る者は限られている。あの男がどこから情報を入手したかそれも調べないといけない。

少し考えてから服の隠しポケットを探る。万一のことを考えて、鞆から和紙を一枚持ってきていたのだった。

それを器用に折りたたみながら、目くらまし用にと、キースが書いた呪符を手にする。

彼女がキースの家の預かりとわかっているのなら、こいつったものを持っていることくらい想定済みだろう。それを調べなかったことは彼らの落ち度だ。

「ブラン！」

ベッドの上で呪符を燃やし、それと同時に紙を飛ばす。それは一羽の鳥となり空へと消えていった。

燃え盛る炎と煙に、近くに居た見張りが気づいて、火はすぐに消し止められた。逃げようとした二藍はすぐに捕まって、先程の男の元へと連れて行かれた。

「うかつでしたよ…そうですね、あの伯爵の預かりとなっているのですから、護身用に魔方陣くらい持っていると感じくべきでした」
睨みつける少女に、男は笑う。

「なかなか気の強い姫君だ。先が楽しみですよ」

飛んできた鳥を、掌に誘うと折りたたまれた紙はその場で消えていった。

「それも二藍の術か？」

「ああ。俺達限定ではあるが」

掌を握り締め紫炎は、少しはなれた場所にある家を見上げた。先程まで、その一室から煙がでていたが、すぐに消し止められたのか、今は見ることが出来ない。

「我らが異世界から来たことを向こうは知っているようだ」

驚いたように目を見開いたエンデルクだったが、すぐに考えるように細められた。

「お前達の事を知るのは、王と王妃、エルリックに宰相と筆頭魔道師であるセレスと將軍である俺だけだ。あとは、張本人のモナドだな」

「王女達は知らんのか？」

「あくまで、お前達は異国の客人だ。あの屋敷も調べたが持ち主は架空名義になっていた」

そろそろ夜の帳が下りようとしている。彼らのオークションがいつから始めるかは解らないが、まだ「客」らしい姿はない。

「思った以上に根は深そうだな」

紫炎の言葉にエンデルクは大きく息を吐く。

「愚かな話だ。本人は利を求めていることだろうが、実際には失っている。それに何故気づかぬ」

「愚問だな」

紫炎の唇がゆがむ。それに頷き返して、エンデルクは屋敷へと視線を戻した。

「目先の利のみ目に出来ぬものが、他を気づくはずもない。どの世界でも人間の考えることは同じだ」

そう言つて紫炎は、キースの腕輪を外してエンデルクに渡す。変わりに受け取ったのは、柘榴がしていた首輪と同種の物であった。

「結界を」

「承知」

男が詠唱を唱え、周囲に魔方陣が浮き上がると、青年はその中心へと移る。

「柘榴も俺もこの世界に同族が居た分助かつてはいるな。この姿で

走り回っても違和感を持たれない」

振り返り、笑いを浮かべると次の瞬間そこに現れたのは大型の獣。彼らの世界で言う「狐」であった。

体の色は白。尾の先が微かに灰色がかったそれは、同色の首輪をしていた。

音もなく立ち去った相手を見送り、脱ぎ捨てられた服を集めると苦笑する。

「惜しむらくは、あの姿に戻ってしまえば人間の姿になるには相応の場所が必要、ということか。不便といえば不便だな」

いつの間にか傍らに現れたエドガーに服を渡すと、エンデルクは踵を返す。

「隊はどうなっている？」

「第三隊が控えております…それと」

視線で問う主にエドガーが苦笑を向けた。

「ファミア殿が」

「足手まといはいらぬ」

一言で切り捨てたエンデルクにエドガーは頭を下げる。

「自分を知らぬ愚か者に用はない。去るか、邪魔にならぬよう控えているよう伝えておけ」

「承りました」

一足先に本体に戻るエドガーを見送ると、エンデルクは後ろを振り返る。

「今暫し、辛抱してほしい。二藍」

マントを翻すと、男は静かな足取りで隊へと戻っていった。

13話

服を着替えさせられ、両腕を拘束され、先程と別の部屋に移された少女は、静かにソファに身を沈めていた。

膝に感じた重みに視線を移すと、黒猫が不思議そうに両腕の縄を見ていた。

『魔法陣を使わせない為の措置らしいですよ』

ふうん、と鼻を鳴らして柘榴は縄の匂いをかぐ。その姿は猫というより犬っぽい。

『術の匂いも何もしないな。普通の縄だ。ここには魔法使いはいないのか？』

『さあ？私が会った人は表立って魔法を使う人は居ませんでしたけど。唯単に温存しているのか、それとも』

『それとも？』

『キースさんやエンデルクさまとか柘榴いの人たちが近くにいらっしやったから、感覚が麻痺しているのかもしれない』

『それは否定しない』

柘榴いの魔力を日常で見えしまうと、普通が普通でなくなる。それは、自分自身にも当てはまることだった。

『お前、また後ろ向きだろう』

柘榴の声に少女は笑った。

男だ女だと差別をする家ではないが、術者としてどうしても差は出てしまう。特に女性は月のものの影響もあつて、均一に力を出すことは難しい。

符師として一族の中でも優秀な部類に入る二藍ではあるが、本人に言わせれば「符がなければ唯の役立たず」であった。決してそうで

はないことを紫炎たちは知っているが、近い存在の術者たちが優秀すぎるため、彼女の卑屈さは増すばかりだ。

唯単に、抜きん出て出来る術者が揃って彼女の近くに居るだけ、なのだが。

そして、その優秀な陰陽師達は知っている。紫炎と柘榴という二人の式神が自らの意志で彼女に仕えることを選んだ、ただその事実がどれほどの事を意味するのかを。

だが、知らぬ者は目に見える事柄だけで評価する。それは彼女自身も同じだった。

そういうコンプレックスから時々彼女は考えが後ろ向きになる。普段、害がないので放っておくが今回のように何か事の最中は邪魔になる。

軽く首を振って、少女は膝の上の猫を軽く撫でた。

『解っています。ごめんなさい』

尾を振って、二藍の膝を叩くことで答えると柘榴は顔を上げた。

『紫炎のやつが本体に戻っている』

瞠目する主に、黒猫は器用に喉で笑った。

『あつちでも、符でいるか、人型でいるかで本体に戻るなど滅多になかったが…まあ、ここではそのほうが動きやすかるう。同種の生き物もいることだしな』

それに…と、言いかけた言葉を柘榴は飲み込んだ。

以前、この世界で人型を取っていることが安定している、と紫炎は言った。そして、これほどの日数で自分たちが本体か符の姿で居続けたことは今までなかったのだ。しかし、自分たちも二藍も体調にも霊力にもなんら変化はなかった。むしろ自分たちにおいては、向こうの世界よりも過ごし易いくらいなのだ。

本体に戻っていると尚のこと解る。今までより格段に能力が増している。

この話をすれば二藍は喜んでくれるだろう。しかし、それと同時に思い知るのだ、ここは自分たちが居た世界と違うのだと。理性で理解していても感情はそうは行かない。解っていても慣れる事のない寂寥感と望郷の念。

あの世界において、異端の身である自分たちですら感じるのだ。二藍に至っては更に強いだろう。

視線を感じ顔を向けると、主の心配そうな瞳にぶつかった。この聡い少女は自分の思惑などすべてお見通しであろう。そして、更に心配するのだ。

柘榴は体を摺り寄せごろごろと喉を鳴らす。そんな彼に二藍は顔を綻ばせた。

『なんだか、本物の猫みたいです』

『莫迦、俺は猫だ』

くすくすと小さく笑う声が部屋の中に響いた。

屋敷の周囲を白い獣が走る。

時折立ち止まって辺りをうかがうと、獣は器用に屋敷の壁に符を貼って行った。

呪符を描いたのはキース。それはかれらの霊力を変換させるための

もの。それと同時に周囲にこれから張られるエンデルクの結界を不可視とする為のものでもあった。

人間が行なっていたのであれば、見咎められた行為であろうが、この辺りでは珍しくない種類の獣が屋敷の周囲をうろついていたとしても誰も気にはしない。

膝の上の猫が音もなく降り立ち、少女は窓の外へと視線を向けた。

『終わったようだな』

柘榴の言葉が終わらないうちに、窓から入ってきた狐に二藍は目を細める。格子よりも大きな体をどうやって入れたのか、疑問に思う者はここには居ない。

『その姿も久しぶりですね』

そう言つて、首輪を見てその笑いを更に深めた。

『よくお似合いです』

ふん、と鼻を鳴らすと紫炎は少女の足元へとやってくる。小さく切った和紙を数枚その場に落とした。

『エンデルクの結界は客が来てからだそうだ。俺が札を張っている間に馬車が何台か来ていたからな。そろそろだろう』

ではな、との言葉と共に紫炎と柘榴の姿が消えた。残されたのは、二枚の札と和紙と首輪。

『…どうしろと』

呆れたように溜息を吐いて二藍は腕の縄をあつさりと抜いた。

『また、元の通りに戻すのって面倒なんですけどね』

独り言を言いながら、サッシュに器用に二枚の紙と和紙を隠し、首輪もしまう。

暫くして、扉が開いた時、ソファには憮然とした表情の少女が、腕を縛られたまま座っていたのだった。

14話

一体どこに隠されていたのか、その部屋に集められたのは10人ほどの少年少女。

下は5、6歳から上は13、4歳…この国でいう未成年ばかりだった。

彼らに共通していることはいうまでもない、外見の美しさだった。相応の年頃はそれなりに、幼い子供達もこれから先が楽しみな容姿を持っていた。

部屋の中に立ち込める香りに少女は眉を寄せる。彼女をここに連れてきた男は、部屋の中に入れると扉をすぐに閉めた。小さく呪を唱え、先程紫炎が落とした一枚の和紙を口に含む。

周りの子供達が一様にとろん、とした顔をしているところを見ると、催眠性の香が焚いてあるのだろう。しかも、男の様子から即効性のもものらしい。

同じような表情を作り、その場に座り込む。

やがて、外側から窓が開けられ空気が入れ替えられていったが、誰一人表情は戻らない。

ラグラといい、仲間の一人に薬師が居るのだろうと判断して周囲の反応と動作をあわせる。

暫くして、二藍は密かに『変態』と呼んでいる男を先頭に数人の男が入ってきた。彼らは子供達を中央に集めその周囲を囲う。おそらく彼らが「人買いの一味」なのだろう。

どうもあの男が一味の中心人物のようだった。舐めるような視線に鳥肌が立ちそうになるのを必死で押さえる。

思わず心の中で唱えたのは大祓詞。

（この場合、どなたの罪穢れを祓うんでしょうね）

しかし、気分はパンダかコアラかそれとも朱鷺か。周囲を囲う柵をぼんやりした表情で見ながら、祝詞を唱える意識とは別の場所を考える。

人の気配に祝詞を途中で中断させる。すると20人ほどの男女がぞろぞろと入ってきた。

一応アイマスクのような仮面をしてはいるが、知る者が見ればお互い誰か判る程度の変装をしている人々はその服装から、裕福層だといふのは見て取れた。まあ、こんな風な非合法の組織と取引が一般家庭でできるわけが無い、と思い直す。

入ってきた彼らは、子供達を一通り見回して、当然の事ながら毛色の違った二藍に興味を示す。中には、あからさまにぎよつとした気配を表す者も居る。

（あ、成る程。これがエンデルクさまがおっしゃっていた『貴族』

ですか)

一応、客達は柵の内側に入ることを禁じられているようだった。身
を乗り出す者もいたが、人買いたちに離される。

さて、どうするかと計画を練る。もう間もなくエンデルク率いる騎
士隊が突入してくるだろう。その時自分はどうするか。

結界を張る為の「符」は、先程紫炎から貰った。自分がここでしな
ければいけないことは、ここに居る子供達を護る事。

自分を過信してはいけませんが、やるべき事を怠るのは尚いけない。

と、外の気配がおかしい事に気がついた。人買いたちは、外に様子
を伺いに出て行った。例の男も扉の外に居る。

貴族たちも扉から顔を出したり、窓の外を窺ったりしている。

その隙を逃す二藍ではなかった。手首を動かすと縄を解く。

『略式』

腰のサッシュから符を取り出すと、猫と狐が現れた。見咎める者も
無く彼らはするりと柵の外へと出て行った。次いで渡された紙のう
ち、別のものを取り出す。

【結界、現出】

これは此方の、言ってみれば「魔法用語」であった。キースの苦肉
の策ともいえるそれは、二藍が本来持っている言霊とこちらの魔法
と魔方阵をあわせたものだ。彼女が解除しない限り、その範囲内に
出入りはできない。

それと同時に屋敷に貼られた符も発動するしかけだ。

魔力を持った者が、発動に気付いて止めようとするが、時すでに遅し、である。

「参りましたね。薬が効いていませんでしたか」

男が呆れたように近づいて結界に触れて、弾かれるようにその手を引く。

「流石は、キリアルル、というところでしょうか」

自嘲めいた笑いを浮かべ、男は二藍に視線を合わせた。

「思った以上に強かなお嬢さんの様ですね。益々ほしくなりましたよ」

眉間に皺を寄せて黙り込んでいる少女を、どう判断したのか男は笑いを深くする。

そう言つて振り返ると、男はおや、と瞳を開く。二人の青年が周囲にいた仲間達を捕らえていたのだ。

「妹が世話になったな」

柘榴が笑いを浮かべながら、一人の男の鳩尾に拳をいれた。

「おやおや、情けない。それなりの報酬は払っていたんですが、返して頂かなくてはいいけませんね」

「ドアレグっ！」

その声は記憶にある者と同じ、二藍を誘拐した本人であり、この屋敷で再び薬を飲ませようかと進言した者であつた。

ドアレグと呼ばれた「変態さん」は、静かに振り返る。

「…何ですか？セドリック」

その声に、セドリックは自分の迂闊さを悟つた。すっかり同じ報復をする辺りに相手の性格を再認識する。

「悪い。っと、それどころじゃない、騎士隊が出張ってきている。」

しかも、將軍付きでだ」

「ほう、ウエリントン公がお出でですか」

やれやれと肩をすくめると、ドアレグは艶やかな笑みを二藍に向け、そのまま、紫炎たちに顔を向ける。

「いずれ、妹姫をいただきに上がります」

「断る」

「…たぐい現出、炎界」

石榴が指で円を書き、男達に向けると、その足元に炎の円が生まれ動きを止めた。

「ほう、お国の魔法ですか。しかし、まだまだですね」

そういうと、ドアレグは指先で魔方阵を描き始めた。どこかで見たそれに、紫炎ははっとして右手を前に突き出し手剣で格子を描く。

臨める兵、鬪う者、皆陣列べて前を行く。破陣

5行4列の格子が、真っ直ぐな光となって、魔方阵を打ち消した。

「ほ」

男は面白そうに唇を上げると、懷から紙に描かれた魔法陣を取り出して柵に貼り付けた。

「爆」

ボン、という音と共に窓に打ち付けられていた柵がばらばらになる。

「行きますよ、セドリック」

「させるかつ！」

足元の炎を一層大きくさせて、柘榴は地を蹴った。

「……残念ですね。身の処し方は解っているでしょう」

炎に躊躇した一瞬を付かれて、青年に羽交い絞めにされた男にドアレグが意味ありげな笑いを浮かべた。

「紫炎！ 柘榴！ 氣をつけてください！ その人は！」

勢い良く騎士達が入ってくるのと、ドアレグが窓から飛び降りるの

と、セドリックの体から力が抜けるのは、ほぼ同時だった。

「ちっ」

舌打ちと共に、柘榴が騎士に男を渡し、先に窓から外へ出た紫炎に続く。

周囲を見回して、少女は騎士たちが貴族や人買いを拘束しているのを確認すると結界を解いた。

14話（後書き）

お気に入り登録が100件を超えました。皆様ありがとうございました。す。

もう暫く、この騒動にお付き合いください。

15話

「フタアイ!」

ふわりとした柔らかな感触と視界に映る金の髪。

抱きついてきた相手を認識して少女は小さく微笑んだ。

「ファミアさん。ご無事でよかったです」

「あなたこそ、どこも怪我は無い?」

首を縦に振った少女は入ってきた気配に視線を向けて、笑顔を深くする。

「紫炎たちはどうした?」

「首領らしい男を追っていきました」

立ち上がるうとした彼女の腰に手が回り、男は軽々と片手で少女を抱き上げた。

「あれは?」

数人の騎士に囲まれ、倒れている男に視線を移すと、少女が小さく溜息を零す。

「セドリック、と呼ばれていた人です。ファミアさんを気絶させ、私をさらった人ですけど…」

「自身に毒でも仕込んでいたか」

エンデルクの言葉に、騎士の一人が頷く。その間も少女は男に抱き上げられたままだ。

「あの、エンデルクさま? 私は大丈夫ですから降ろしていただけませんか?」

彼らを見た騎士たちは一瞬ぎよつとしたような表情をするが、すぐ

に何事も無かったかのように、事後処理に動く。ファミアはといえば、エンデルクの突然の行動に固まって動けなくなっていた。

「足を痛めているのだろうか？」

え？と目を見開く少女に男は薄く笑う。

「あいにく俺は治癒魔法は不得意だからな。後で治療班の所へ連れて行くから、暫く辛抱していてくれ」

確かに足は痛めている。敵を欺くために、言葉が解らない振りをしている時に軽く捻ったのだが、紫炎たちですら気付かなかった程度のものである、わざわざ抱き上げて運んでもらうほどではない。

それを伝えると男は、目を細める。

「俺がこうしていたいのだ。不満か？」

真っ赤になった少女に、男が笑いを深くする。その瞬間、周囲に流れた気配は感嘆と驚きと、別のなにか。

「ほんつとうにお前って王子様」

振り返ると、窓の外で呆れたような柘榴と目が合った。少女を抱いたままエンデルクが近づくと、軽い身のこなしで窓から中に入ってくる。

「悪い、逃げられた」

「外には騎士隊がいたはずだが？」

あゝと、柘榴は頭をかきながら、彼らの近くまでやってくる。

「お前にや悪いが、駄目だありゃ。もう少し魔法に対する耐性を付けさせたほうがいい」

問うような眼差しに、柘榴が苦笑する。

「邪魔されたんだよ、あいつの魔法に。正直言つと見失った一因は騎士隊だ」

「そういうことが、済まない」

「どういうこと、ですか？」

ようやく立ち直ったのか、ファミアが彼らの元に近づいてきて柘榴に質問した。

「ああ、簡単に言ってしまうえば、魔法で目くらましを掛けられたんだ。俺じゃなくて騎士達だけだ。おかげで俺と紫炎は敵と間違えられて、もう少しで切られる所だったってわけだ」

「馬鹿な！騎士隊は魔法に対してもそれなりの訓練はしているのに！」

「向こうの方が一枚上手だったって事だ」

なおも言い募ろうとするファミアをエンデルクが視線で止めた。凍るような眼差しは、誰もが口を閉ざしたくなるものだった。

「ドアレグ、という名前に聞き覚えはありますか？」

掛けられた声に視線を向けると、腕の仲の少女と目が合った。

「私達を捕まえていた人たちの首領のような存在でした。状況から考えると、この組織のトップかそれに近い存在だと思います」

「ドアレグ？…うむ」

「髪は薄茶色。瞳も同色です。年のころは30前後…もう少し若いかもしれません。少し吊り上がり気味の瞳で、あ、手首の裏側に、アレは刺青でしょうか？魔方陣らしき模様が描かれていました」

「…まさか？」

呟くように言ったエンデルクに二藍が首を傾げる。

「ドアレグ…アーノルド・ドアレグ・デミスターか。奴が絡んでい

たのか」

男が呟いた名前に周囲の騎士たちが反応する。

「お知り合いですか？」

「奴は俺が着任する前まで第一騎士隊の隊長だった男だ」

目の前の男の複雑そうな表情に、少女は首を傾げそつとその腕から下に降りた。

「俺には陛下との間に姉上がいた。その嫁ぎ先がデミスター伯爵家だ」

少女の腕を掴んだまま、男はソファに腰を降ろす。

「嫁がれて、長くお子がいらっしゃらなかったが、数年後身ごもられ：お腹の子と共に亡くなられた」

そして、と男は気の重い様子で言葉を続ける。

「姉上の喪が明け切らぬうちに、義兄上が不慮の事故で亡くなられた」

エンデルクの話によると、元々3人兄弟の末っ子だったアーノルドは幼い頃から神童の誉れも高く、将来を嘱望されていたという、自身も騎士隊に入り、めきめきと頭角を現してきた、そんな矢先の兄の訃報だったらしい。

二番目の兄は、幼い頃に大病を患い、殆どベッドから離れることができない生活をしている。

「騎士隊を辞した彼は、当然家を継ぐために領地に向ったと、誰もがそう思っていた……しかし」

アーノルドはそのまま消息を絶った。そして、彼が居なくなった途端次々と第一騎士隊の不祥事が表ざたになったのだ。

小さなものでは、歓楽街での暴行から始まり、最終的に発見されたのは公金横領。

発見されて、全て隊長であるアーノルドに報告されている。犯人はいつの間にか騎士隊からいなくなり、代わりの者が勤めているので、皆は隊長が処分して騎士隊を辞めさせてのだろうと、そう思っていた。

あまり名誉なことではないから、とアーノルドが苦笑すれば、誰もが口を噤む。それ故、この話が表に出る事がなかったのだ。

「それが、どうして？」

「……」

「噂が、流れたんです」

エンデルクが言いにくそうに口を噤んでいると、事後処理をしていた騎士の一人が口を開いた。

「騎士隊を辞めさせられた者は、誰一人実家に戻らず行方不明になっ
つていると」

「噂ではない。事実だ」

疲れたようにエンデルクは大きく息を吐く。

「そして、あの男の恐ろしいところは何一つ証拠を残していない、

「
事だ
とい
う」

15話（後書き）

申し訳ありません、少し修正いたしました。

16話

アーノルド・ドアレグ・デミスター。

ある日、忽然と姿を消したこの男が、一体どれほどの犯罪に関わっているのか、全く解っていない。

限りなく疑わしい人物ではあるが、証拠が無い以上、誰も彼を「犯人」と名指すことは出来ないのだ。

だが、彼が騎士隊に在籍している間に起きた不祥事を調べていくと、必ず、どこかでその影を見ることが出来る。

しかし、存在を匂わせながら、確かめることは誰にも出来なかったのである。

「けれど、今回は違うんじゃないか？二藍や俺達という証人がいるんだし」

「いや、難しいと思う」

「無理でしょうね」

柘榴の言葉に、紫炎とエドガーが同時に答えた。

治癒魔法で足首を直してもらった少女は、二人の式神とともにエンデルクの屋敷へ案内された。

本来なら、キースの家に帰るはずであったが、ドアレグのことはエンデルクよりもエドガーの方が詳しいと聞いて足を運んだのだ。

ちなみに、当主は今回の事後処理と報告のため、王宮にいる。

「どうしてだよ？」

「見たのが俺達だからこそ、だ」

納得のいかない柘榴の様子に、紫炎はやれやれと肩をすくめた。

「俺たちが『異国』の住人だからだ。相貌でその男かもしれない、と言う事ができて決定打ではない。…そういう事なのだろう？ エドガー」

「はい、紫炎さま」

既に、何度も「さま」付けを止める止めないの攻防に疲れた青年は、少し眉を顰めただけで相手の対応を流す。

「つまり、今まで面識がなかった俺達が何を言っても無駄、というわけか」

「はい。言い換えれば、それほどの家柄なのです、デミスター家は」
王妹が降嫁できるほどの家柄だ、悪いわけが無い。

「あの、腕にあった魔方阵は証拠になりませんか？」

少女の問いに、エドガーは苦笑交じりで袖を上げると肘の近くに同じような魔方阵が現れた。

「王宮勤めで魔法に関わる者でしたら、おおよそ持っています。いざという時に自分の得意な魔法に対しての増幅機能を表すものです。本人の使い勝手などで多少位置は違いますが、利き手に持っている者は多いですね」

実際は個人認証を兼ねてはいるらしいが、宮廷魔道師クラスが、きちんと確認しなくてはわからないほどの複雑さだと男は続けた。

「それまで品行方正で騎士の鏡とまで言われていた方だったのですが、消息を絶たれた途端、色々と醜聞が明るみとなり、疑惑も数多

くできてきたのです」

「疑惑、ですか？」

嫌な予感がしながらも二藍が口を挟むと、エドガーは首を縦に振る。「まず、現在の御当主…彼にとつては下の兄ですが、彼が日常服用している薬に微量ながら毒物が含まれていました。もちろん、いま飲んでる薬には入っておりませんが…」

服毒して命を絶った男の顔を思い出し、二藍は顔を曇らせる。

「厄介なことに、薬効成分もあるもので、疲労回復に用いることも多々ある薬です。しかし、それは健康な者が、一時期使うだけであり、微量とはいえ長期にわたって使えば毒以外の何者でもないのです」

ここでも判断が難しくなる。服用していた時期がどれほどか解らない為、毒として用いられたのか、薬として用いられたのか判断がつかない。

「その後になつて、『今考えれば』という言葉が多くなったのです」

「ああ、一番上の兄夫婦の死因が」

「はい」

しかし、それも「今考えれば」なのだ。その時点では疑問に思ったものがいなかった、という事だろう。

「そいつが犯人だとすると、恐ろしいほどの知能犯つてわけだな」
思い切り嫌そうな顔をして柘榴が言う。二藍も紫炎も不快そうな顔をしている。

「ひとつ、伺ってもいいだろうか？」

お茶と軽食の支度を手早くやっている相手に、紫炎は視線を向けた。

「貴公がそこまで事情に詳しい理由を、お教え願いたい」

青年の言葉使いが変化していることに気がついて、エドガーは顔を上げる。他の二人も「おや？」という表情を浮かべている。

「ああ、いや無理にお答えいただかなくても良いのだが」

「え？いいえ、構いませんよ」

黙り込んだ相手の反応を誤解した紫炎に、男は首を振る。

「従弟、なのですよ。とはいえ、血の繋がりがあるのは長男だけだったのですが、叔母が先代のデミスター伯に嫁いでいましたね。下ふたりは側室の子供でしたから、あくまで書類上の姻戚関係ではあります」

格式高い貴族の縁者であるなら、このエドガーもそれなりに身分のある者なのだろう。

そんな思いが顔に出たのか、男は自嘲めいた笑いを口に乘せる。

「犯人と決まった訳ではなかったのですが、次々と黒い噂ばかり出てきましたからね。流石に王宮に居辛くなった所をエンデルクさまに拾っていただいたのですよ」

話が降嫁した王女にまで及べば、流石に姻戚とはいえ、王室の勤めは難しいものがある。

「成る程」

頷く紫炎に、エドガーは周囲に気付かれぬ程度に顔を曇らせる。王宮勤めだった頃、周囲は腫れ物を扱うように自分に接した。つい昨日まで親しくしていた相手の掌を返すような扱いに、頭の中では理解していたものの、貴族社会のありかたに嫌気がさしたのも事実だった。

しかし、彼らの反応は少しばかり異なつた。自分たちを害したものの身内であらう彼に対して、全く態度を変える事無く、事実を事実として受け止めているだけ。そんな様子が伺えた。やはり、自分の主の目は確かだったと改めて思った。

「私も一つ伺つてよろしいですか？」

男の問いかけに彼らの顔が上がる。

「紫炎さまと柘榴さまのお召し物は、一体どこから調達なさつたのですか？」

弾けるような少女の笑い声が屋敷中に響き渡つた。

17話 (前書き)

これで二章が終わります。長かったので二話に分けての掲載になります。

続きは今日中にアップさせていただきます。

17話

王宮の一室。エンデルクの私室で、二藍は図鑑クラスの大きな本を膝に乗せ読みふけていた。

タイトルは「魔法大全」。主だった魔法陣と、その効果について書かれたもので、上級魔法学院の教科書的存在である。

ことり、と音がして顔を上げるとエドガーの笑顔と目が合う。思わず笑いそうになるのを堪えて、少女は頭を下げた。

二藍の反応に苦笑気味の相手は、お茶請けのケーキを並べる。

「先日からそうだな」

ふと、書類に囲まれたエンデルクが立ち上がると、向かい側のソファへと腰を降ろした。

「エドガーの顔を見るたび、お前も紫炎たちも妙な顔をする。理由を聞いても構わないか？」

自分にもお茶をと侍従に指示をして、男は目の前の少女へと向き直った。呼んでいた本を脇に置いて静かにお茶を嗜んでいた彼女は、ばつが悪そうな顔をする。

「私が紫炎さまにお伺いしたことが、お嬢様の笑いのツボに入ってしまった様子さんなのです」

「お前が紫炎にした質問？」

ぷくくくと、少女が妙な笑いをした。怪訝な視線に小さく肩をすくめる。

「変化された後の、お二方のお召し物がどこからでてきたのか、です」

「ああ……」

流石にエンデルクも妙な笑いを浮かべざるを得なかった、彼自身も疑問には思っていたが、割り切って流していたのも事実だ。

「ご質問された時にもお答えしたんですけれど、あれは『条件付け』です」

お茶を口にして、少女は答えた。エンデルクのところで出されるお茶は、自分たちの世界の紅茶に似ていても飲みやすい。一度それを口にしたら、大量の茶葉が贈られて来た。今では、キースの家の食後のお茶の定番となっている。

「元の姿から、人型に変化する時に、流石に裸ではまずい、ということ。まあ、意味は違いますが、毛皮が服に化けると理解してくださればいいです」

本当はそういうわけではないのだが、口でできる説明ではない、ならば「こういう事」と思っていたほうが解り易い。

「っていうか、まさかエドガーさんの口からそんな質問が出るとは思わなかったものですから。ごめんなさい」

侍従に向って頭を下げると、穏やかな笑いと共に首を横に振られた。

軽いノックの音と共に入ってきたのは、先日関わった第三騎士隊の隊長だった。

「これは、姫君。お会いできて光栄です」

気取った仕草で頭を下げる相手に、少女も立ち上がって笑いながら腰を折る。

「珍しいですね、閣下に御用ですか？」

「兄たちのお供です。王女様にお呼びを受けまして」

いくら二度と御免だ、と騒いだところで王族からの呼び出しを無視するわけにもいかない。呼び出しを掛けられたのは紫炎と柊榴だけだったので、留守番するつもりだったが、王妃が少女も連れてくるようにと言ってきたので付いて来たが肝心の王妃さまが、急な来客で動けなくなってしまったので、こうして時間を潰しているのだった。

「ああ、あのお二方ですか。捕まってしまったんですね。お気の毒に」

面白そうに笑う隊長を見て首をかしげると、少女はエンデルクへと視線を移す。すると、男も同じような表情をしていた。

「あの二人は義姉上に良く似ている。外見もだが、性格もだな」

ああ、ミハーさんなんですね。そう納得すると、彼女は再びソファに身を沈め淹れなおされたお茶を口にした。

「そうだ、姫君」

持ってきた書類をエンデルクに渡し、ドアに手を掛けた男は満面の笑顔で二藍を振り返る。

「騎士たちが褒めていましたよ。犯人の特徴を掴んだ冷静な判断力と、子供達を護った結果に」

そう言っ、居住まいを正し、騎士として最上級の礼を少女にとつた。

「貴女の勇気と行動力に、我ら第三隊より心からの感謝と敬意を捧げます」

隊長の行動に慌てる少女を、男達は目を細めて見ていた。

「姫さんを泣かしたら、俺達第三隊がお相手しますからね。覚悟し

ておいてくださいよ」

笑いながらエンデルクにそういい残し、隊長は去っていった。

残された少女は眉を八の字にして、笑っているエンデルクとエドガーを見上げる。

「カイルに気に入られたようだな。人脈は大切にしておけ。いずれお前達の楯となる」

「いえ、別に楯になっただけでいたただかなくてもいいんですけど」

がつくりと肩を落としてソファに身を沈めていると、外から華やかな声が聞こえてきた。その気配に頭を抱えるエンデルクと苦笑するエドガーを少女は不思議そうに見つめる。

「すぐにお解かりになりますよ」

少女の表情に気がついて、エドガーは意味ありげな笑顔を試みせた。

18話

カップを下げたエドガーの言葉通り、ノックの音と同時に華やかな一団が入ってきた。

（うわぁ）

二人の女性を中心に、彼女らをエスコートする紫炎と柘榴。そして、侍女と思われる数人の女性と騎士の制服に身を包んだ女性達。何故かキースも後ろに付き従っていた。

（あ、ファミアさんだ）

見知った騎士に気がつき目で追うと、気付いた彼女が微笑み返す。美人さんは何をやっても様になるなあ、などと呑気に考えていたら、エスコートされていた女性とも目が合った。

「うわぁ、可愛い」

語尾にハートマークがつきそうな勢いに、二藍は思わず固まる。

「マリーシア。彼女は私の客人だ。挨拶してしかるべきだろう」

「はあい」

エンデルクの叱責に舌を出して肩をすくめる。その姿だけで、華やかな印象が可愛い、になる。

マリーシアと呼ばれた女性は、エスコートしていた柘榴の腕から手を抜くと、優雅に腰を折った。

「初めまして、フタアイ。セラフィーク第二王女マリーシア・セレスと申します」

はっと我に返って少女が立ち上がり腰を折ると、もう一人も軽く膝

を曲げて略式の礼を取る。

「わたくしが、第一王女のアディアーヌ・レナス。グランチエスタ
ー公爵夫人ですわ」

「お目にかかれて光栄です。フタアイ・クヨウと申します」

暇だった一つの季節、覚えておいて損は無い、とマーシアに王宮作法を叩き込まれた。確かに損はないが、向こうの許しがあるまでの体勢は辛い。

「楽になさって、フタアイ。本当に噂どおり愛らしい方ね」

うふふふふ、と満面の笑顔でアディアーヌが言えば、マーシアも首を縦に動かす。

体を起こし、改めて王女達を見て思わず心の中で溜息を吐いた。

（本当に、この国の王族って）

皇太子や王、王妃、王弟であるエンデルクを見ても、そのDNAは素晴らしいものがあると感じてしまう。

王女二人も趣は異なるが、両親の良い所をそれぞれ受け継いだ存在と言えるだろう。

王女達にソファを勧めると、この部屋の主は二藍を隣に座らせ自分も腰を降ろす。

騎士達は扉側に、紫炎と柘榴は窓側にそれぞれ立った。

姉のアディアーヌは父王譲りの明るい茶色の髪に、青い瞳。嫁いで子供も居ると聞いてはいたが、全くそんな事を感じさせない。

妹のマーシアは少し赤みがかった金髪と姉とは少し色合いの異なる青い瞳は、エンデルクのそれと良く似ていた。

「一度お会いしたいと思っていましたのに、なかなか機会が無くて

残念に思っていましたら、母が叔父上のところにフタアイがいらしやることを教えてくれましたの」

この国の王女という立場にしながら、言葉使いの丁寧さに少女は感心する。きちんと愛されて教育されているのだと思うと、ふと遠い世界の両親や祖父、弟たちの事を思い出して、鼻の辺りがツン、とする。

二藍の微かな表情の変化に気付き、一步踏み出しかけた紫炎は、その頭の上に置かれた手に気がついて、動く事をやめた。
少女が掌の主にながが気がついて笑顔を見せる。

「まあ」

「あら」

流石姉妹。などと、二藍が呑気に考えてしまうほど、二人は同じように手を頬に当てるポーズをして目の前の光景に見入っていた。

「叔父様がお優しい」

「本当に、噂は真実でしたのね」

少女の頭をひと撫でして、男は二人の姪へと視線を移した。

エンデルクの視線に気がついて、二人は顔を見合わせて微笑みあう。
「フタアイがここに来るようになって、叔父上のお顔に笑顔が増えた、という話ですわ」

ここに来たのは、まだ二回だけなんですけど、と少女は心の中で呟く。

「わたくしなんて、叔父上に頭を撫でいただいた記憶はございませんわ」

「わたくしだってですわ、お姉さま」

ね。と、声を合わせる姪たちに、エンデルクは疲れたような溜息を吐く。

「自分と同じ年の姪や、実の兄に溺愛された姪を相手にできると思うのか？」

心の中で、子ども扱いされているだけです。と突っ込みながら、二藍は、この夏（酔っ払った）キースから聞いた話の一つにあったエンデルクの幼い頃のものを思い出す。

産後の肥立があまり良くなかった王妃に代わって、エンデルクを育てたのは、今の国王夫妻であつた。

なさぬ仲の彼らは親子というには無理があつたが、実の姉弟、姉妹のように仲が良く、それ故我が子と代わらぬ態度で育てたのである。

（家族間の人間関係は良好、なのにそれを良しとしない人物が居る、って訳ですね）

国際間に紛争がないからこそ、中に目が行く……どうすれば自分に利が向くか。

（傀儡にはなりそうに無いタイプなんですけどね）

ファミアに対しての態度でも伺える。彼は自分の立場を弁えない者、自分がやるべきことを理解していないものに対して容赦が無い。

この男を少しでもしれば解りそうな事である。彼は、自分の兄を裏切らない。ましてや甥である皇太子を廃してまで王位を望むタイプではない。

『むしろ、その逆、ですね』

ふと呟いた日本語に、他の者が少女の方を向く。何でもないと言を振って二藍は曖昧に微笑んだ。

紫炎と柘榴に目をやると、彼らもまた複雑そうな顔で少女を見ていた。彼らもまた解っているのだ、今の自分たちの立ち居地と今後の展開が。

向こうの世界での自分たちの日常。それに近いものがこの世界でも起きている。当事者ではないが、黙って傍観させてもらえる立場でもない、そんな微妙な立場。

しかし、そんないつ起こるかわからない未来よりも自分たちには片付けなければならない、身近な問題がある。

（とりあえず、目指せ一人：いいえ、三人の独立、ですね）

今回の事件で二藍を囷に使った事実と、その一部始終を知ったキースは以前にもまして彼らに過保護になりつつある。今はまだ行動に移していないが、いずれ彼らへの過干渉が起きる可能性があるだろう。

今回王宮に呼び出された時も「断つてもかまわない」とまで言い出したのには驚いた。彼も王宮務めで、貴族でもあるのだ、王族への忠誠は絶対のはずだ。

あまり家族に恵まれたとはいえない青年が、漸く手に入れた「家族」に近い存在。それが彼らである。

（まあ、いざとなったら泣き落とし、という手もありますからね）

ふわりと浮かべた少女の笑顔に、何も知らない王女達は「可愛い」を連発し、魔法使いの青年も目を細める。

しかし、隣に座っていた男と、二人の式神は彼女の奥底の黒い思考に気が付いたのか、半ば呆れた表情を浮かべるのであった。

18話（後書き）

これにて、第二章終了です。

ストックが尽きましたので、この先の更新は今までよりもゆっくりしたペースになると思いますが、お付き合いくだされば幸いです。

お気に入り登録してくださった方に、心からの感謝を捧げます。

幕間 2（前書き）

一応、第三章への場繋ぎと状況説明です（笑）

幕間 2

王室騎士団は、大きく分けて3つの部隊がある。

第一隊は、「近衛」とも呼ばれ、主に王族や要人の警護が主流となる。王宮に配備されるのも彼らで、貴族の子弟が中心の構成となっている。ファミアたち女性騎士の多くがここに所属している。

第二隊は、国境警備の部隊で2年周期の交代となる。これは、ある意味兵役制度に似ていて、身分に関係なく成人男性の義務である。

そして、第三隊。

主に市中警護が任務である彼らは、その構成に身分は問わないで居た。言い換えれば、貴族だろうが平民であろうが同じ扱いをする、ということだ。ここが、ロデオの目指している「騎士団」である。

そして、ここでもお約束のように身分に寄る選民意識が起きるのである。

「全部の貴族がそういう訳ではないけどな」

第三騎士隊の隊長であるカイルは少女に話した。

肝心の中心的人物を逃したとはいえ、資金源の商人（かの変態発言をした人物の一人である）や買い手となっていた貴族が捕まったので、暫くは安全だろうと、紫炎たちと街に出て巡回中の彼に出会ったのだ。

部下を先に返し（隊長ばかりずるいとの声をすっかり無視して）行きつけの食堂に案内した男は苦笑まじりで現状を説明してくれる。

そもそもは少女の素朴な疑問「騎士団の仕事の内容」である。

「この間一緒だったファミアは少数派だな。けれど大多数が『騎士団』は自分たち第一隊の呼称と思っている。…と、いつでも第二隊は別だが」

「大方、新人教育にでも使うんだろう？ 国境警備を通して愛国心を養うとかどうか」

「当たり前だ。それに身分関係無く『義務』だからな。2年くらい我慢しろって言うのが一般的な考えだ」

柘榴の言葉にカイルは頷いた。

「今の陛下も將軍閣下も実力主義だからな、別に第一隊が貴族でなければいけない、とおっしゃっている訳じゃない。けど、今までの因習とお偉方が煩くつてな。まあ、三隊の連中もお高く留まっている一隊の中で仕事をしたいとは思わない連中だからね」

自分たちが居た世界でも、表立ってではないが身分というものは存在した。とはいえ、この世界ほど確立したものではない。おぼろげに財産や職業などの差別意識に似たようなものだ。一昔前なら兎も角、現代社会において「身分違い」というのは死語に等しい。

「と、いうわけで、お前さんたち三隊に来ないか？」

「どこでどう繋がって」と、言うわけ』になるんだ？」

「今の陛下と將軍閣下が実力主義ってところだな」

紫炎の呆れたような声にカイルはあっさり応じる。

「幼い頃より相応の師について修行をしていた貴族に比べると、どうしても一般人は剣技において劣勢となる。入隊後数年もすれば、桁違いに実力は異なってくるがな」

入隊するときの心構えが違う、とカイルは説明する。ある意味全てを捨てる覚悟の平民と、自身に箔を付けあわよくば王族や上級貴族と繋がりを持とうとするもの。

しかし、入隊の試験はどうしても修練を積み重ねてきた貴族に軍杯があがる。

「だから、三隊は万年人員不足なんだよ」

「俺達は二年も妹を置いて国境に行く気は無い」

「それなら大丈夫だ、俺と閣下の推薦付なら、新人教育なんざ免除できる」

「ほう」

にやり、と笑った紫炎にカイルはしまった、という顔をした。

「成る程な。話の元はそこか」

唇の端を上げる紫炎を見て、男は深々と諦めたように息を吐く。

「確かに話を持ってきたのは閣下だ。けれど、悪くないと思ったから俺も賛成したんだぜ？」

ちなみに、二人の会話中、柘榴と二藍は我関せず、といった顔で食事を黙々と続けている。彼らは、ちゃんと自分の立場と役割を理解して行動しているのだ。この場合、紫炎は一番上の「お兄ちゃん」である。

「…雇用条件は？」

「騎士隊名義の一戸建て付、二人とも三隊所属で給料が」

カイルの出す条件に、二藍がおや？と顔を上げる。彼らが提示する

給料がこちらの物価水準で換算すると大企業の重役クラスに値するのだ。少女がそれを口にする、騎士隊長は妙な表情を浮かべる。

「閣下の言葉をそのまま使うぞ？ 彼らに帰る事を諦めさせた以上、国からの保護は当然のことだ」だ、そうだ。意味解るか？」

男の言葉に彼らは顔を見合わせる。エンデルクの言うことは分かる。諦めたわけではないのだが、危険を冒して探すより、今出来ることを選んだだけなのだ。

「ま、いいさ。貰える物は貰っておこう。邪魔になるものじゃないしな」

「柘榴」

やれやれと笑いながら、紫炎はカイルへと向き直った。

「話はわかった。しかし、三隊の面々はどうなんだ？ 色々特権を与えられた俺達に反感を持つことはないか？」

「っていうか、少なくとも三隊はお前達…特に紫炎、お前さんに対して腹に一物持つ奴はいねえよ」

軽く肩をすくめ答える相手に、紫炎は鼻で笑い、柘榴は「ああ、あれか」と爆笑する。

嫌な予感満載の少女は、目の前の男に恐る恐る尋ねた。

「すみません、兄、何をしたんですか？」

ん？と男は少女に視線を向けて、次にゆっくりと唇を上げた。

楽しそうな、悪戯を思いついた少年の顔。

「気にすることは無い。向こうの魔法に踊らされた部下達の目を覚ましてくれたただけだ」

「雷を落としただけだ」

怒鳴るとか、怒るとかの比喻ではないことくらい少女にも解った。

あの時柘榴が一足先に戻ってきたのはこういう理由だったのかと改

めて思い出し、肩を落す。

「大丈夫さ、姫さん。騎士隊は魔法に対する耐性があるからな。それくらいやったところで死にはしねえよ」

つまり「それくらい」やったんですね。とは、口に出せない――藍であつた。

幕間 2（後書き）

次回も番外です。

幕間 3

「ほぼ、初対面の相手にあれだけ心を許すなんて、御崎の姫さん以來じゃねえ？」

彼らが軟禁状態に置かれて暫くたったころ、「退屈だろう？」と数冊の本と茶葉を土産にやってきた男を見て柘榴が口を開いた。

彼が以前二藍に与えた魔法学の本を繰っていた紫炎は、テラスで静かにお茶を飲む二人に目を向ける。

何を話すわけでもない、時折どちらかが話しかけ、どちらかが答える。しかし、それ以外は穏やかな沈黙が流れていた。

「御崎の姫…葎殿は『特別』だろう。彼女は本家の三の君のご紹介で知り合ったお方だ。色々な意味で耐性も理解もあるお方だから」彼女の家の事情を知る幼馴染たちは、それが当たり前として親の代からの付き合いだ。彼ら以外で彼女の家の事を知る者は友人関係では葎以外、いなかった。

「ここでは、魔法が当たり前として生きている世界だ。受け入れる側もキヤパが広いのはわかるけどな。でも、キースにだって気を許すまで、それなりに日数がかかったぜ？しかも、複雑な立場でさ？普段なら避けて通るタイプだろう？」

本に目を向けたまま、紫炎はふ、と口元を緩める。

「だからこそ、だろう？」

「ん？」

エンデルクの持ってきたお茶を口に運び柘榴が顔を向ける。

「ど真ん中、ストライク」

ぶぶつ。

予測できたのか、紫炎は防御壁を張る。魔法の発動に気付いた二人が顔を向けると、壁に弾かれて飛び散ったお茶が柘榴とその周囲を濡らしていた。

その惨状に二藍は頭を抱え、エンデルクは可笑しそうに笑う。

やれやれと立ち上がり、少女は手際よく辺りを片付け、自分で乾かしている柘榴に着替えてくるように指示をすると、お代わりの為のお茶を淹れる。

「慣れているのだな」

ふと漏らしたエンデルクに、紫炎と二藍の視線が向けられる。

「…ああ、いや。労働を知らぬ手のようだが、そうやって片付ける姿が慣れているようなのでな」

「こいつは家事は一通りこなす。小さい頃から祖母さまに教えられてきたからな」

「『手』ですか。生活環境と、それに付随する品々の発展の違いだと思いますよ？こつちにはハンドクリームがないですからね」

「『ハンドクリーム』？」

こくり、と少女は首を縦に振る。手荒れを防ぐ軟膏だと説明した後、ふと考え込んだ。

「…二藍。顔が商人になっているぞ」

呆れたように言う紫炎に、少女は笑顔を向ける。

「だって、儲かりそうじゃないですか？薬効成分はわかっていますから、後は応用だと思えますよ？」

「エタノールやグリセリン。どうするんだ？」

ぐ、と言葉に詰まって少女は口を閉ざす。

「手荒れを防ぐ薬ならあるな。ただ、あまりにも高価で一般の庶民

には手が出せぬだけだ」

そんな時代が日本にもあったなあ、などと遠い目をしながら力なく笑うと、エンデルクが少女の前に立つ。

「入用なら持つてくるが？この手が家事で荒れるのは忍びない」

そつと少女の手を持った男に、青年は呆れたような表情を向けた。

しかし、今回の少女の反応は少しばかり異なる。

「ご遠慮させていただきます。王弟殿下」

失礼にならない程度に手を離し、優雅に腰を折った。

「頂いた茶葉も本も『こちら』では高価なもの。我らには過ぎたるもの。これ以上のご配慮はご無用に願います」

ほう、と目を見開く男に少女はにこり、と笑顔を見せ、男もそれに応える。

ここか、と青年は思う。相手の言葉の真意を汲み取り、理解する。身分の高さゆえではなく、本質と育ち。それに少女は惹かれたのだと。

「アロエに似た成分の植物ならあったぜ？」

いつの間にか戻ってきた柘榴が口を挟む。その言葉から、彼が今さつき来たわけではないことが窺い知れた。

「柘榴、悪趣味。っていうか、いつの間に見つけたんです？」

「こんなところに一日中いるわけないだろう？隙を見て、な」

「屋敷の者に見つかるなよ。つまみだされるぞ」

紫炎の言葉に柘榴が不敵に笑う。曰く「そんなへまはしない」。

こんな日常会話を拾い上げて、エンデルクが二藍を囿にさせること

を思いついたのは、また別の話。

1話（前書き）

第三章です。少しは彼らの日常に触れられればなあ、と思います。

1話

二藍たちが独立することを、どうやってキースに納得させたかは、ご想像にお任せするとして。

彼らに与えられたのは、「此方風」に言う3LDK。それぞれの個室に、リビング、ダイニングキッチンという一般的な間取りであった。

やたら大きな屋敷が下賜されたらどうしようと心配していた彼女だったが、これならば自分でも管理できると安心する。

実際彼らが貰っている給料であるならば（後で知ったのだが、騎士団の隊長クラスの金額らしい）召使の2、3人十分雇えるのだが、少女は全て自分がやると笑顔で答えた。

彼女を心配したマーシャが後日覗きに行ったが、結局するべきことが何も無いと肩を落として帰ってきた事もある。

彼らの家は、一般に「貴族街」と呼ばれる王城の周囲にある、貴族たちが王都に居る場合に済んでいる屋敷が並ぶ街の外れにあった。

庶民の暮らす街にも、王城にも近いそこは、騎士団の第三隊も多く住んでいる一帯でもある。どちらに対しても有事の際にはすぐ動きが取れるようにとの配慮で作られた場所だといえる。勿論、独身の騎士団の団員は、王城の敷地内にある寮に住んでいるのだが、下宿

する者もいる。第三隊の場合、一旦寮に入るものの、数ヶ月もしないうちに出るものが多い。曰く「なんで、家に戻ってまで気疲れしなくちゃいけないんだ？」が、理由のトップに挙げられるのは押して知るべき、であろう。

「落ち着いたようだな」

洗濯物を干し終わった少女は、掛けられた声に笑顔を見せた。

「いらつしゃいませ。エンデルク様、エドガーさん。どうぞ、お入りください」

庭の日当たりの良い所で寝そべっている大きな黒猫に気付いて、男は目を細め少女に誘われるまま、侍従と共に家へと入っていった。こちらの家の建て方は、大きな屋敷であれば、玄関を入ってすぐにホールがあるのだが、一般の庶民の家は居間になる。と、言ってもその広さは、二藍の感覚で言えば20畳以上ある。部屋の数多くは無いが、一部屋一部屋が広い作りになっているのだ。

初めて訪れたかれらの家の中を見て、主従は軽く目を見開いた。

「変わった造りですね。二藍さまの故郷の様式ですか？」

今日はお客さまだから、と少女に勧められ、ソファに腰を降ろしたエドガーの言葉に二藍は笑顔を見せた。

「そうですね、自分の家というより友人の住んでいた所を元にしてあります」

友達が住んでいたマンションのリビングダイニング。キッチンと居間をカウンターで仕切っており、それがそのままダイニングテーブルとなつて食事を取れるようになっていた。正直間口で靴を脱ぎたい気分になるが、この国にそんな風習は無いので、自分達の私室だけにとどめて置く。

リビングに置いてあるソファのセットは、キースの家で柘榴が使っていた客間に会ったものを貰ってきた。座り心地が良いと漏らしたことを憶えていて、引越しの際に移動魔法で運ばれてきたのだ。後で、名のある職人の一点物だと知り、慌てて返そうとした彼らに「では、新しい物を揃えましょうか？」と言われ、このままが良い、と答えたのはつい先日のものである。

「結界はキースのものか。相変わらず複雑で細かいことをする」苦笑交じりのエンデルクの言葉に、二藍とエドガーが顔を見合せて笑う。

最初はエンデルクが張るはずであつた結界であつたが、男の結界魔法は強すぎて、入っても構わぬものさえ入れなくなると言う事で、キースが魔法を掛けた。

エンデルクほど強力ではないが、いくつも条件付けを施したそれは、必要な者だけが入ってこれないようになっており、彼らのレベルで考えれば、十分強力な代物であつた。

ふと、お茶を出す少女の手を見て、エンデルクは眉を顰める。以前そこにあつた滑らかな手はない。いくつかのかすり傷と小さな火傷の跡、少し荒れた手がそこにあつた。

「…怒られることを前提に持ってきた」

男が差し出した小さなビンを見て少女が困ったように笑う。暫く考えるように黙り込んだ二藍は、笑顔の質を変えてエンデルクに頭を下げる。

「ありがとうございます。頂戴します」

でも、これ以上は無用ですよ、と念を押す辺り、少女の気質が窺い知れる。

それ以前に、青年達の給料なら、この程度の薬は楽に買えるのではないかと尋ねると、彼女は肩をすくめる。

「一から生活を始める、というのは結構費用がかさむものなんです。…あ、でも余計な予算は立てないでくださいね」

きつちり釘を刺され、エンデルクは苦笑いするしかなかった。隣でエドガーも少しばかり呆れた表情をする。

「貰える物は貰っておく、ではなかったのですか？」

「必要以上に借りは作りたくねえんだってよ。二藍、俺にも茶、くれ」

大きく伸びをしながら柘榴が入ってきた。彼が起きた気配は感じていたので、二藍はすでに支度をし終わっている。

「お給料だって、本来なら二人合わせて今の一人分くらいの金額なんですから、これ以上のことはやっていただく謂れはありません」しかし、カイルからは十分金額に見合う働きはされているとの報告がきている。

二人の青年達は、勤務の合間に他の騎士達の練習に付き合ったり、魔法の指導もしているらしい。

「自分の鍛錬も兼ねているからな、気にすることでもないさ。それに休みとかも優遇してもらっているからな」

外壁の警備も三隊の仕事であるため、そちらの当直日になると、2、3日は戻ってこれない。当番を重ならないようにした上で、その日は片方は非番になるよう配慮されている。

「俺達のこととは心配いらねえよ。それに三日に一度はキースも顔を出すからな」

「道理で最近の登城率が高いわけだ」

やれやれと二人は顔を見合わせて溜息をつく。彼らの家を訪ねてくるとき、登城の帰り道だと言ってやってくる青年の本音はどちらが主流か。

「一番上の『お兄ちゃん』は外に出た弟妹の事が心配で仕方ないらしいな」

笑いながら言うエンデルクに、柘榴と二藍から返って来たのは、疲れたような溜息だった。

2話

18の誕生日にエンデルクが持ってきたのは数枚の服。

作りはしっかりしたもののだが、素材やデザインは一般的に流通しているものであった。…ただし、踝までの長さがあるスカート丈であったが。

「家の中なら兎も角、いい加減年齢詐称はどうかと思うが？」

「別に偽っていたわけではないです」

唇を尖らせた少女に笑って見せると、男はもうひとつ包みを渡した。「こちらが祝いの品だ。気に入るかどうかわからぬが」

中から出てきたのは青い石の付いたペンダントだった。良く見ると、鎖になっているのは細い金糸と銀糸で、それに黒い糸とで複雑な組みひも状態になっている。

「エドガーが作った魔法具だ。石は俺が元々持っていた魔法石を加工してもらった」

男の言葉に少女は目を見開く。この世界でいう魔法石はレアメタルよりも希少性が高いということを最近知った。

石によって様々ではあるが、一般の装飾品として使う程度の大きさでも、紫炎か柘榴の年間所得にあたる価格がする。

「…エンデルク様、高価なものは」

「金額の問題ではない」

男は静かな声で言う。もともと低音の声が、さらに低く響いた。

「俺がお前にコレを持っていて欲しいと願った。それだけだ」

口を閉ざし、少女はペンダントを手に暫く考え込んだが、やがてゆっくりと笑顔を見せる。

「ありがとうございます。大切にします」
二藍の偽りの無い笑顔に、ほっとしたようにエンデルクは息を吐いた。

暫くペンダントを弄んでいた少女だったが、ふと気が付いたように顔を上げる。

「エドガーさんがお作りになったんですか？」

「ああ、エドガーはこの国で数少ない魔法具の作り手だ」

「じゃあ、紫炎たちの首輪も」

「ああ、あれもエドガーの手によるものだ」

エドガーが彼らの正体を知っていることは解ってはいたが、そこまで深く関わっているとは思わなかったので、彼女は少し驚いた表情を見せた。

「数が少ないとおっしゃっていましたが、魔法具というのは作るのが難しいんですか？」

「いや、そういうわけではない。魔法具自体は難しいものではない。魔法学院に入れば一応習いはする」

では、何故『数少ない』といわれるのか。少女の疑問が顔に出たのだろう。エンデルクは小さく唇を上げた。

「ちゃんとした『効果』を付随させ、持続させる道具を作り出せるものが少ないのだ。この国でそれができるのは俺が知る限りでは、エドガーとキース以外に数人といったところだ」

力を分け与え、持続させるほどの魔法使いは少ない、さらにその力を物質に込められるほどの力の持ち主はもっと少なく、加えて加工の技術を持つものは…となると、どうしても限られてくるのだ。

「呪符は言ってしまえば『陣』を書き込んだ時点で魔法の力を付加させる事が自動的に行なわれる。簡単な護符程度なら、陣を描き魔力を有しているものなら誰でも描ける。…紙はあるか？」

少女が紙とペンを持つてくると、男はその上に魔方陣を描く。それを持ち、促すと庭に出た。

「ブラン」

紙を弾き、呪を唱えると手を離れた紙はその場で燃え上がり、一瞬で消えた。

「炎の呪符ですね」

「ああ、俺ですらこの程度なら描くことが出来る。キース辺りならば、これにいくつかの付加をつけるだろう。例えば手を離す事無く、魔力のみを離れた場所で発動させる、とかだな」

成る程、と少女は思う。あの魔法使いなら、それこそ「朝飯前」で、それ位やりそうだ。

「魔法使いというものは、通常自分に最も適している魔法に力が入れる。俺の結界魔法もそうだ。エドガーも道具を作る腕は一級だが、自分が魔道を行なうとなると、言うては何だが三流の街の魔法使いとそう変わらぬ」

辛辣な男の言葉に少女は苦笑する。男は事実しか口にしない。しかし、場と相手を弁えている事が彼を必要以上に寡黙にしているのだろう。

少なくとも二藍の知るエンデルクという男は寡黙なタイプではない。…饒舌、というには程遠いが。

「キースのように万能に近い魔法使いは稀だ。近隣諸国何処を探し

てもあれほどの魔法使いは居ない。あれが、大国ではなくこの国に根を下ろしていてくれるのは有難い…それ故…いや…」

少女の顔を見て男は口ごもる。これが演技だとしたらたいしたものだと心の中で苦笑して、二藍はそれに乗る。

「餌、ですか？紫炎たちの騎士団への入隊は。私達がここに留まるための楔、といった方が正確でしょうか？」

「敵わないな、お前には」

ゆつくりと上げる口角は確信犯のそれ。どいつもこいつもと、少女は悪態をつく。勿論心の中で、だが。

「いいですよ、お付き合いいたしましょう。少なくとも私達がここに居る間は…ね」

くすりと笑う少女の後ろには、いつの間にか二人の青年。

將軍の地位は飾りではない。それでも、エンデルクは彼らに気付くことが出来なかった。

しかし、彼らの「正体」を思い出し、無理からぬ事と小さく笑う。

「どこかの馬鹿が、私達を邪魔に思っ『飛ばさぬ』よう、しつかり釘を刺しておいてくださいね」

「その点は義姉上が抜かりなくやっていらっしゃる」

「できれば、平穩を乱さぬようにな。我らは日常をこよなく愛する」

「…迷惑な争いに巻き込むなよ」

「善処しよう」

善処ですか、と突っ込みたかったのは二藍ばかりではない。約束はしてもらえないんですね、などと少女が考えていることに男が気付いたかどうかはうかがい知れなかった。

ちなみに、この日キースから二藍に贈られたのは、山のような護身の魔方陣が書かれた紙と膝丈のドレスであった。

3話

ぼかん、と口をあけて「ソレ」を見上げている主を見て、二人の式神は顔を見合わせ笑いを浮かべた。

外見はプテラノドンとワイバーンを足して二で割るとこんな感じになるだろうと思われる姿をしている。

呆気にとられている二藍に苦笑をむけ、翼竜の手綱を持っていたカイルが手招きをした。

大きく目を見開き、首を思い切り横に振った少女に、男は苦笑を一層深める。

「大丈夫だ。こいつは卵の時から人の手で育てられているから、人間には慣れている。野生種だってこっちから何かしない限り危害は加えない」

眉を八に字にして動こうとしない主の背中を、式神たちはそつと押す。振り返った少女は恨みがましい視線を青年達に向けると、カイルの傍まで歩いていった。

「大丈夫だって、姫さん。第一コイツは草食だぜ？」

「それは解っているんですけど」

エンデルクが贈ってくれた本の中には、この世界の生態系について描かれたものもあった。早い話が子供向けの「動物図鑑」なるものである。その中には、自分達が居た世界と似た生き物が大半を占めてはいたが、中には「お流石ファンタジー」と苦笑するものも居た。その主たる生き物が、彼ら「恐竜」である。

自分達の世界と異なり、この世界では太古の「恐竜の絶滅」という

歴史が無かった、という事であろつ。

この国近隣には居ないが、別の大陸には小型ではあるが肉食竜がいると聞いた。

（象さん、ですねえ）

大きさといい、最大の草食動物、という意味合いで行くのなら同類項で括ることもできるだろう。

しかし、象が怖くないか、と聞かれると微妙なところである。

カイルが手を差し出すと甘えるように擦り寄る姿は可愛いと思う。

しかし、ソレを自分にやれと言われたら別の話になる。

「仕方ねえなあ」

ふいに、両脇に手を入れられ、体が持ち上げられる。ちょうど、大人が子供を「高い高い」するような格好で、二藍は竜の背中に乗せられた。突然のことに固まっていると、ふわり、とカイルが後ろに飛び乗る。

「何のための男物の服だと思っているんだ？ほら、ちゃんと跨れよ」半分涙目になって後ろの男を見ると、ニヤニヤ笑いを浮かべた瞳と目が合う。ちなみに、この男、二児の父でもある。

（多分、扱いはルークくんと同じなんでしょうね）

もうすぐ7歳になるという男の長男を思い出して、少女は深々と溜息をついた。

「行くぞ」

大きく羽の羽ばたく音が複数であることに気が付いて振り返ると、紫炎と柘榴もそれぞれ翼竜に乗っている。

「基本、騎士が移動に使うのは、この翼竜かラグだな。移動魔法は便利だがリスクが大きい分実践には向かない」

ラグとは馬に似た…と、いうより馬そのものの生き物だ。

来る時に温かい格好をしてくるように言われて、そうとう着込んできたものの、高度が高い場所はやはり寒い。マントに包まりながら、少女は眼下の景色を眺めた。

「これが、セラフィークだ」

男の指し示す先にある広大な大地に少女は目を細める。収穫を終えた田畑。いくつかの集落。

遠い異世界でありながら、自分が住んでいた世界の異国の風景を思い出させる。

「俺達が護るべき場所。俺達の故国」

穏やかな眼差しでカイルは眼下の大地を見下ろす。

「愛してくれとは言わない…嫌わないでやってくれ」

男の顔を見上げ、二藍は理解した。カイルは知っているのだ、自分達が異なる場所から強制的につれて来られたということを。

「問題ない」

器用に翼竜を操り、紫炎が口を開いた。

「どんな形であれ、この国に留まることを選んだのは我らだ」

「嫌いはしないさ。自分が生きると決めた国を」

柘榴も横に並び、答える。

「誰だって、未知なる物には警戒心を持ちますよ」
くすり、と二藍は笑った。カイルが示した方向性を無理やり別のほうへと持っていく。

自分達に選ぶ権利など無い。しかし、この世界で生きていくと決めた以上、受け入れるしか無いこと位理解している。

「別に高いところが苦手、とか爬虫類…竜が嫌いとかじゃないですか」

「そうか」

「でも、できれば空中散歩はもっと温かい季節の方がいいですね」

「そうか…そうだな」

カイルは紫炎と柘榴に視線を向けると、手綱を操り静かに竜を降下させていった。集落の近くの空き地に降り立つと、子供達が駆け寄ってくる。

二藍が労わる様に竜の首を撫でれば、くるるる、と喉を鳴らす声で翼竜は応えた。

カイルの手を取り、地面に足をつけると子供達はそれぞれ干草を持って3頭の翼竜へと近づいて餌を与えたり、体を拭いたりしている。一番年嵩の子供に男は何枚かの小銭を渡す。農閑期の子供達にはこうやって生き物の世話をすることが、小遣い稼ぎになるとカイルは説明した。

「閣下の騎竜はすごいぞ、こいつらの1・5倍はあるし、なんといつても野生種だからな」

「野生種？捕まえて飼いなしたのか？」

柘榴の問いに、違う違う、とカイルは首を振った。

「理由は知らん。ただ、普段は住処である山奥にいるが、必要な時

にノルグを鳴らして呼ぶんだ。餌代が掛からなくていい、と笑っておられるが、野生の翼竜を騎竜にするなんて考えられないけどな」

「ノルグ…ってなんですか？」

「竜笛、ていう当て字が出来ると思うぞ。犬笛みたいなものだ。人の耳に聞こえない周波数で翼竜を呼ぶ道具だな。死んだ竜の骨でつくられているらしいぞ」

そう言つて、柘榴が首から下げた白い棒状のものを見せる。説明の言葉が難しかったのか日本語だ。

『乳離れした子竜の餌やりの時に使った。1頭1頭それぞれにあつて微妙に違うらしいが、俺達には良く解らん』

軽く唇にあて息を吹きかけると、先程まで柘榴が乗っていた竜が顔を上げて此方を向くが、他二頭は知らぬ顔だ。

な、と二藍に声を掛け、青年は竜に近づき首を軽く叩く。甘えるように柘榴に擦り寄る巨体に、二藍は笑いを零した。

「あら、カイルじゃない」

突然掛けられた声に彼らがそちらを向くと、明るい笑顔の女性が赤ん坊を抱いて立っていた。

「よう、アナ」

手を挙げ、彼女に答えると男は二藍へと視線を移す。

「紹介しよう。アナ：アナスタシア。俺の従姉に当たる。アナ、こっちはウチの新人と妹姪だ。翼竜の訓練ついでに遊びに来た」

「…遊びつて、アンタねえ」

呆れたように息を吐き、アナスタシアは、少女達へと向き直った。

「こんにちは。いつもカイルがお世話になっているわね」

ふるふると、頭を振って少女は笑顔を見せる。

「とんでもないです。こちらこそいつもカイルさんにはお世話になっています。フタアイ・クヨウと申します」

「シエンだ」

「ザクロ」

二藍の言葉に、アナスタシアは少し驚いた表情をする。

「異国のお嬢さんなのね。小さいのにしっかりしているわ」

ここでもそうですか。

表に出さないものの、少女が内心大きな溜息をついたのも、後ろに居る青年たちが微苦笑を浮かべたわけも彼女は気づかず、柔らかな笑みを深めた。

「よかったら、温かい飲み物でも飲んでいつて。空は寒かったでしょう」

「ソレが目当てでここに降りてきたんだ」

従兄の台詞に、アナスタシアはわざとらしい大きな溜息を吐いたのだった。

3 話（後書き）

お待たせして申し訳ありません。

なんだか、妙に公私共に慌しい二週間でございました。

お気に入り登録ありがとうございます！

4話

宿舍の窓から二藍を抱き上げて、翼竜に乗せたカイルの姿にエンデルクは軽く眉を寄せた。

騎竜の使用許可も出ているし、カイル自身、騎士団のなかでもトッククラスの翼竜使いだ。

紫炎や柘榴の竜に乗せるよりも、安全だということは解ってる。

しかし。

「面白くないな」

ふと漏らした自分の言葉に驚き、軽く首を振ると、少し先で自分を待っている副官に気付き窓際を離れた。

耳に残る翼竜たちの羽ばたきの音が、いつになく神経を逆立てた。

「手馴れているのね」

赤ん坊を抱いている紫炎を見て、アナスタシアは目を見張る。

お茶の支度をしに台所に立った彼女が、手伝いを申し出た二藍とともに戻ってきた時、最初カイルに渡されていた子供は、いつの間にか紫炎の腕の中にいた。

「こいつと弟達の面倒を見ていたからな」

「あら、弟さんもいらっしゃるの？」

一瞬、少女の瞳が微かに翳るが、すぐに笑顔になって持ってきたポ

ツトをテーブルに置くと二藍は首を縦に動かした。

「はい、双子なんです。国許で両親と一緒にいます」

「あらあら、男兄弟ばかりなのね。アタシといっしょだわ」

少女の言葉に笑顔を見せ、アナスタシアは手際よくカップをテーブルへと置いた。

二藍の一瞬の翳りに気がついたのは二人の式神のみ。それほど鮮やかに彼女は自分の感情を綺麗に誤魔化した。

「アナスタシアさんも、ご兄弟がいらっしゃるんですか？」

いつの間にか紫炎の腕の中で眠ってしまった赤ん坊をベツトに移すと、彼女はお茶とは別に冷却庫からグラスの水差しを取り出す。「やった」と、小さくガッツポーズをとる従弟を開いた手で軽く小突くと彼女は紫炎たちにもソファを勧めた。

「アナって呼んで頂戴。そう、下に三人。少し離れた村が実家でね、そこにいるの」

にぎやか、と言うより煩いわよ、と笑う彼女に少女も頷いて、5つ離れた弟達を思い出す。

生まれたときは、未熟児で小さかった頃は体が弱く入退院を繰り返していた弟達だったが、成長するにつれ、丈夫になって今にも自分の身長を追い越す勢いである。

『どうしているかなあ』

小さく日本語で呟いた言葉に、紫炎たちが反応し、少女の傍に歩み寄る。大丈夫と笑った二藍の頭を軽く撫で、アナスタシアが用意した果汁を口にする。

「ほう」

「あ、美味しい」

「旨い」

思わず零れ落ちた言葉にアナスタシアが笑顔を見せた。

「ありがとう、ウチでとれたリザヤの果汁なのよ、それ」

リザヤというのは、洋梨に似た味と食感の果物である。外見はパイナップルの葉の部分がない形で、木に実っていて、最初見たときは生態系の違いに苦笑した。

何度かキースの屋敷で出されたことはあるが、それよりも数倍良質で上品な味わいがあった。

「農場を営んでいらつしやるんですか？」

「ええ、そんなに大きくはないけれどね。果物と穀物を作っているわ」

「こいつの旦那の作る作物は王都でも有名なんだ。質がいいってなカイルの言葉にアナスタシアの笑顔が大きくなる。

ふと、外が騒がしくなり何事かと見に行く従姉の背を見送って、カイルが唇を歪ませる。

「思ったより早かったな。執務さばらせちまったか？」

「隊長？」

くつくつと笑うカイルに柘榴が怪訝そうに視線を向ける。

「姫さん、外見てみ？」

私ですか？と自身を指差す二藍に頷きが帰ってくる。不思議そうな顔をして外に出ていく主を追おうとした柘榴を紫炎が止めた。

「煽ったな？」

ふ、と男の笑いが深くなる。その視線は閉まった扉の向こう　外
に向けられていた。

「急に二藍を騎竜の訓練に連れて行く、と言いだしたから可笑しい
と思っではいたが」

「煽るつもりはなかったが……」

男は青年に視線を戻した。先程までの楽しそうな笑いは影を潜め、
真摯な光をその瞳に宿す。

「すり抜けてからじゃ遅いんだよ」

男の言葉の真意を尚も問いただそうとした時。

「ちよつと！カイルっ！」

顔をなくしたアナスタシアが、大きな声を上げて家へと入ってき
た。母親の声に驚いたのか、赤ん坊が目を覚まして泣き始める。

「あーあ。ったく」

立ち上がり、ベットから子供を抱き上げ手際よくあやす。流石二児
の父、と柘榴は妙なところで感心した。

「って…アンタ…外…」

アナスタシアの震える声に、紫炎と柘榴も外へ出る。

彼らが外に出たとき、少しはなれた場所に一頭の翼竜が地面に降り
立つところであった。近くに居た自分達が乗ってきた竜より一回り
大きな「ソレ」が、着地するや否や、その背から飛び降りる影があ
った。

「って、ありやエンデルク…っと、將軍閣下じゃないか」

一直線に自分のほうに向ってくる長身に、呆気にとられていた二藍
は目の前に差し出された手に、はっとして顔を上げる。

「迎えに来た」

「…え？」

ふわり、と抱き上げられ視界が高くなる。

少女を抱き上げたまま、男は部下のほうに視線を移した。

「先に戻っている」

一言言い残して、再び竜の背に載ると、翼竜はその体に似合わぬ身軽さで飛び立った。

後に残された二人の青年は溜息をつきながら顔を見合わせ、今回のことを仕組んだ犯人に視線を向ける。

「とりあえず、我らも戻る。どうなさいますか？」

慇懃な物言いに、怒りと微かな呆れを感じ取って男は口の端を上げた。

「俺は、状況説明をして戻るわ。先に行っていてくれ」

騎士隊長に頭を下げると、二人も竜の背にまたがり飛び立った。

ひとり残った男の口には楽しげな笑みが浮かんでいた。

5話

腕の中で小さくくしゃみをする音が聞こえ、エンデルクは小さな声で呪文を唱える。

すると彼らの周囲の風が収まり、暖かな空気に変わった。

少し驚いた様子で礼の言葉を述べる少女に笑顔で応え、男は前方を見据える。

翼竜は、魔法属性を持つ生き物なので、自分の周りで魔法を使われることを酷く嫌うが、彼の騎竜はささいな 自分達の回りに結界魔法を張り空気を入れ替える程度の 魔法は気にはしない。

元々、竜に乗っている時に攻撃されることを想定して訓練していたことだが、思わぬところで役に立ったと一人笑いをかみ締める。

それにしても、とエンデルクは己の取った行動に苦笑せざるを得なかった。

一旦は執務室に入ったものの、何をしても落ち着かず、気付いたら竜笛を鳴らしていた。

決してカイルを信用していないわけではないのだが、この少女に触れているのは自分だけだという独占欲に気付いた時点で認めざるを得なかった。

自分は二藍に惹かれている。

それは彼女の持つ一筋縄ではいかない部分：負、とも裏の顔ともいえる部分さえも愛しいと思えるのだから、我ながら末期症状だとも思う。

ひよっとしたら、いつかは自分の世界に戻ってしまうかもしれない娘。

その事が、ある意味自分のストッパーとなっていた。

確かに自分は恵まれているのだと、エンデルクは思う。

育児を人任せにすることを良しとしない王夫妻は、エンデルクにも同様に接した。実の親の代わりに、異母兄たちに十分愛情を注いでもらった。それが生まれの卑しさだと口さがない者も居はしたが、彼は二人に感謝しているし敬愛もしている。甥や姪達も実の弟妹といっても良い。

しかし、自分達の思いとは裏腹に、表向きの大義名分を掲げ築き上げてきた絆を断ち切ろうと躍起になって居る者たち。

いつその事、彼らを処分して自らも命を絶とうと何度思ったか知れない。そうすれば、異母兄夫妻や甥姪たちに禍が少しは減るだろう、と。

微かに身じろぐ気配がして、男は腕の中の少女に気付く。自分の思考に入り込み、腕に力が入ってしまったようだった。詫びを入れると、首を振り笑顔が返ってくる。

何かも一度は諦めた身の上だ。そういった意味なら、これ以上失うものは無い、そう思っ生きてきた。
そんな自分に『執着』を抱かせた存在。

その頭にそつと唇をよせると慌てた気配が帰ってくる。思わず笑いを浮かべると、どこか拗ねた様子で男を見上げる。そんな表情も愛しくて、笑顔を浮かべると、途端に真っ赤になり俯く姿がそこにあった。

「……けばいい」

「はい？」

不思議そうに首を傾げる二藍にエンデルクは微笑んで首を振る。

「何でもない。そろそろ王都だ」

「早いですね」

「この騎竜は特別だ。カイルは騎士団でも1、2を争う腕の持ち主だからな」

気恥ずかしさを隠すため、部下を褒める言葉を口にする、凄いですね、と素直な賞賛が返って来て面白くない。そんな自分自身に呆れてしまう。

「でも」

少女が言葉を続ける。

「この翼竜は野生だって伺いました。それをこんな風に慣らすなんて、エンデルクさまも凄いです」

少女の一言で気分が浮上する。我ながらどうしようもないな、と思いつながら男は騎竜を着地させた。

降りて、鞍と手綱を取ると、劣るようにその頭を撫でる。すると甘えるように擦り寄ってきた翼竜に少女は近づき笑顔を見せた。

「乗せていただいてありがとうございます。竜さんもありがとうございます。」

すると翼竜が顔を二藍へと近づけた。驚いた表情を見せた彼女だったが、ふ、と笑うと先程エンデルクがやっていたように頭を撫でる。くるる、と喉を鳴らし、竜は静かに羽ばたいた。

突然起こる突風に、よろめく二藍をエンデルクが抱き込む。一声高らかに鳴いて、翼竜は山の方向へ去っていった。

「…驚いたな」

肩を抱いた少女に微笑んで見せて、エンデルクは竜の去った方向へ視線を戻す。

「アレが初めて出会った相手に甘えるなど…今までになかったことだ」

「そうなんですか？」

「ああ…今度は一人で乗ってみるか？」

男の言葉に少女はとんでもない、と首を振った。その姿に、男の瞳が細まり、甘い笑みを浮かべる。

エンデルクのその表情に、一瞬惚けた二藍だったが、すぐに顔を真っ赤にして俯く。

「冷えただろう？ エドガーに温かい飲み物を淹れて貰おう」

そつと背を押しエスコートする相手に、少女は顔を赤くしたまま、それでも笑顔を見せて頷く。

傍らの男が、この時理性を総動員していたことを知らぬまま。

紫炎と柘榴が戻ってきた時、騎士団団長の執務室で大量の書類に囲まれているエンデルクと、優雅にお茶を飲んでいる二藍の姿があった。

「エドガー」

夜も更けた頃、静かに酒盃を傾ける主に、侍従が顔を向ける。

「本気になった…：なんとしてでも手に入れる」

エンデルクの言葉が何を指すか瞬時に理解して、男は唇の端を上げる。

「手出しは無用だ。…：だが、騒音の遮断には手を借りるやもしれん。頼んだぞ」

「承りました」

深々と頭を下げ、エドガーは主の部屋を辞する。

「戻らねばいい…：戻らぬ理由になればいい」

翼竜の背で呟いた言葉をエンデルクは繰り返した。

「この手で絡め取り、他に目がいかぬようにすればいい」

呟きは誓いとなり夜の闇に解けていった。

5 話（後書き）

漸くアップできました。年内に何とか、と思っていたので一安心です。

想像以上の方々にお気に入り登録していただいて、感謝の言葉もありません。

来年が皆様にとって良い年になりますよう、心より祈っております。

本年は、ありがとうございました！

6話

エンデルクがキースの事を指して言った「一番上のお兄ちゃん」というのは、決して揶揄ではなく、事実であった。

彼らが家を出るに当たって、キースが出した条件の一つが、ファリス家に籍を置くこと、である。

勿論、キースとの養子縁組、というのは無理があるので彼の弟妹としての登録であった。

だから、彼らの正式なこの国での名前は、それぞれのファーストネームの後に、セカンドネームとして「クヨウ」が付き、ファミリネームが「ファリス」であり、貴族の一員ともなったのである。

最初、認められるはずが無いと高を括っていた彼らだったが、あっさりと国王が認めてしまえば後は表向き口を出すものが居ない。

余談ではあるが、戸籍を作るにあたり、二藍の実年齢が明らかになったが、それでも誕生日のプレゼントに膝丈のワンピースを持つてくる辺り、キースのキースたる所以であろう。

「絶対反対の声が上がると思ってたんですけどね」

ぽつりと呟くように言う主に、紫炎と柘榴の視線が集まった。

「今の政権…国王陛下に表立った問題が無いにも関わらず、血筋のみで反対勢力が存在を隠しもせずある社会です。そこまで血筋大事

のお国柄なら、私達が伯爵家に縁組されることに対して反対意見が…特にキースさんの実家である侯爵家から横槍が入っても可笑しくない、と思っただけですね」

しかし、実際は彼らが拍子抜けするくらい問題なく進んでしまったのだ。

「水面下で在ったかも知れんと調べては見たが、コレといった波風は立っていないな。まあ、眉を顰めた奴は少なからずいただろうが、キースを怒らせるよりも、事なかれを決め込んだほうが楽だろうしな」

ソファに身を沈めやれやれといった表情で紫炎が応えた。

実際、普段穏やかで感情を表すことの無い（と、周囲には思われている）キースが彼らが絡むと人が変わる、という噂は前回の事で周知の事実となっているの、貴族達も迂闊な事は言えないという事なのだろう。

「モナドという男…なかなか『立ち回り』が上手い、と聞く」

冷たい声音で、紫炎が言う。

「下手なことをすれば、皇太子派に不利になる、と解っているから迂闊なことはいらないようだ、それでも王妃の血筋、という事でそれなりの保護は受けている…我らのことはやりすぎだったと思っではいるようだ、使えるものは使う、という主義らしい。政治的手腕も魔道の才能も無い、と言うのにそういった方面にだけ才能があると言われているな」

「どこでそんな情報仕入れてくるんだ」

呆れたように言う柘榴に、静かな笑みで応える。うわ、悪党と呟く声が聞こえ、小さな笑いが漏れる。

「そちらは暫く静観しておきましょう。ファリス家が、どちらの勢力とも結びつかず、またどちらの中心とも近い位置にある以上、波風はできるだけ避けたいですから」
主の言葉に式神たちが静かに頭を下げた。

「そういえば『秘された王国』ってあつたじゃないか」
「フォーネック王国の事か？」

以前一度だけ出た王宮の夜会で、彼らの出生が取りざたされた時出た今は伝説と化した幻の王国。

「どこぞの魔法使いに言われたぞ。『ファリス伯がお強いのは、貴公たちがお国の魔法を伝授されたからですか？』ってな」

「ほう」

紫炎の眉が微かに顰められる。彼らは自分が認めた相手が蔑まれる事を何より嫌う。

「『いえ、義兄は知り合つたときは既に我らなど及ばぬ實力でした。義兄がどれほどの努力を持って今の力を身につけたかは、我らよりも貴公のほうが良くご存知なのでは？』」

につこりと何かを潜ませた笑顔付きで語る柘榴に、紫炎が小さく笑いを返す。

しかし、彼らの末の義妹は複雑な顔を見せると財布を掴んで立ち上がった。

「どうした、二藍。買い物か？」

「…柘榴、それいつの話です？」

「ん？昨日だが？」

ふう、と息を吐くと少女は近くにあったケープを羽織った。

「今夜辺り『キース義兄さま』がいらっしゃると思いますよ。両手に抱えきれないほどの酒瓶と飛び切りの笑顔と共に、ですね。おつまみ用の食材買いに行つて参ります」

ばたん、と扉の閉まる音がして、はっと我に返った柘榴が紫炎を振り返ると、その先には苦笑いともなんとも言えない複雑な表情を浮かべた青年が居た。

「二藍の買物に付き合つてくる。お前は来客用のベットの支度をしておいてくれ…いや、あいつらなんぞ雑魚寝で構わないか」

彼もまた外套を羽織ると少女の後を追うように外に出て行つた。

一人残された青年は深々と溜息をついて己が失態を反省する。

ファリス家の家長は、面白くないことがあったときもそうだが、自分にとって良い事があったときは、それ以上に羽目を外す。新しく出来た弟妹を巻き込んで。

今までそういつた羽目の外し方をしたことが無かつた分、外し方は尋常ではない。

「エンデルクに言つて結界強化してもらおうかなあ」

酔つ払つた時に魔法を使うようなことはしないが、以前自分達が居た世界の「打ち上げ花火」の話をしたとき、酔いの勢いで再現しようとしたことがあった。

何とか思いとどまらせて、庭でやる「花火」程度に抑えることができたが、ヘタをすると、騒ぎを聞きつけやって来た同僚達と悪乗りする可能性がある。

第三騎士団面々はお祭り好きでもあった。

とりあえず、大人数がやって来ても良い様にソファを片付け始める

柘榴であつた。

この夜、最終的に二藍はファリス家の本宅に避難した、とだけ記しておこう。

7話（前書き）

二藍の一日はこんなカンジです。

7話

二藍の一日は、夜明けと共に始まる。

元々、朝には強い彼女であるから、前日よほど遅くならない限り起きることは苦にならない。

加えて、年間を通して四季があるとはいえ温暖な気候なので、冬^{シラ}である今でも、寒さで布団から出れない、などと言うことは無かった。魔法が発展している為、水道に似たシステムや釜戸もコンロと同じように使えるため、勝手さえ解つてしまえば不自由なことは無い。

まずは、朝食の支度。

ここの主食は麦に似た雑穀で作るパンに似た：名前を「ナン」と呼ばれる（初めて聞いた時は流石に笑ってしまった）物である。

日本人なので、ご飯と味噌汁が無性に食べたいと思うが、一度試しに穀物を炊いてみて：あまりと言えば、余りの代物に二度とやるまいと心に誓った。

予め仕込んでおいたナンを石窯で焼く間に、副食を用意する。

異世界とはいえ、環境は自分達がいた世界と似ているためか、生態系に大きな違いは無い。

肉も食べれば、魚も食べる。外見の違いはあれど野菜も穀類もある。そのうち、記憶を頼りに似た豆類で醤油と味噌を作ろうという野望を密かに抱いてはいるが、今はそこまで手が回らない。

食事が出来た頃か、もう少し早くに式神たちがやってくる。

「符」に戻らないことが影響しているのか、わざとそうしているのか、はたまたコレが「素」なのか、最近の彼らは人間と変わらない生活をしている。時々本体に戻ることはあるが、ほとんど人型で生

活してる。それが彼らにとって良いことかどうかは解らないが、とりあえず本人達の意思でしている事と、負担が無いことで良しとしておこうと、彼女は考えていた。

食事が終わると、青年たちは出勤する。

一応ラグは下賜されてはいるが、めったに乗らないのでキースの屋敷の獣舎で一緒に面倒をみてもらっている。

基本主婦業はどこでも変わりはない。

この後、洗濯と掃除を済ませれば時間はほぼ昼に近くなる。

彼女の方向音痴ぶりは学校の行き帰りに道を一本外れて寄り道をしてしまうと迷う、という筋金入りで、今まではいざとなったら紫炎や柘榴に助けてもらっていたが、ここではそうは行かないので、できるだけ一人では出歩かないようにしている。と、いうかその紫炎と柘榴に懇々と説教をされて言い聞かされている、と言った方が正しい。

実際、案内付きで出かけて逸れて迷子になった前歴があるので、逆らえる立場ではない二藍であった。

定期的にマーシャがやってきて、買い物に同行してもらうか、紫炎か柘榴の休日に出かける以外、彼女は午後の時間を家庭菜園と勉強の時間に当てるが多かった。

元々植物関係が好きな彼女は、エドガーに聞きながら、いくつか庭程度で育てられる野菜を植えて育てていた。

その中に、ひっそりと解らぬように薬草や毒草を植えてあるのは、こ愛嬌、というには聊か物騒な話かもしれない。

普段の生活が人と違うのは、毎日の「帰るコール」なるものだろう。彼らが交わした複雑な「契約」の中に簡易的な意思の疎通があった。もちろん、これはある程度意識的にしなくては出来ないようになっていたが、むこうの世界でメールでのやり取りに代わるものだともえば、便利な機能と言っている。実際に、呪符で似たようなものが市販されているらしいが、日常で使うほど安価なものではないという話だ。キースに言えば、無料で何十枚と作ってくれそうな気がするが、別の使用方法をされそうなのであえて言わずに居る。

彼らからの「知らせ」を受け、夕食の準備を始める。

手順は朝食と大差はない。たまに、2、3人分増えることもあるが、基本的に予め解っていることなので、慌てることはないし、食事時に急に人口が変わることは、「向こうの家」では日常茶飯事だったので、全く気にならない。

外側が木で出来ており、内側に金属が貼り付けられ、冷却の呪符が張られた「冷蔵庫」もときには笑ったが、確かに食品の保存には無くてはならないものだろう。

呪符には使用期間があつて、定期的に変えなければいけないが、これもキースから有無をいわせず何枚も与えられている。

電気、というものが無いこの世界では、灯は当然ランプであるが、その台座の部分に呪陣が描かれていて、自分達がいた世界のランプの数倍は明るい。難点は光度の調節が出来ないことと、光が届く範囲が蛍光灯などに比べると狭い、という所であつたが、日常生活に問題は無いので、良しとしておく。

暮らしてみると、機械文明にどっぷりとつかつた自分達でも、なん

とか生活できるレベルの発展をしている世界だとしみじみ思う。：
科学ではなく、魔法での発展ではあるが。

風呂は昭和前半まで主流であった、薪で沸かす形式だったが、祖母の家がこのタイプの風呂であったため、さほど苦労せずに沸かすことが出来た。流石に、火と水の相性は悪く、何らかの媒介を隔てないとこの二つを使つての魔法は難しい、とはキースの弁である。しかし、紫炎は兎も角、柘榴が風呂好きというのは二藍にとって意外な発見でもあった。なんといっても本体が猫の柘榴である。基本、猫は水が苦手、という印象は否めない。勿論、例外は数多く知ってはいるけれど。

夕食から就寝まで、彼らはそれぞれ自由に過ごす。あるときは居間でその日あった事を話せば、あるときはそれぞれの個室で好きに過ごす。

こうして、彼らの一日は終わるのであった。

7 話（後書き）

お正月明けに仕事が忙しい事は解っていましたが、プライベートでも慌しくて、その上、久しぶりに酷い風邪を引いてしまいました。寒い日が続きますが、皆様お体にはご自愛くださいませ。

8 話

静かに目を伏せ、紫炎はそつと周囲の気配を伺う。

とりあえず、危険の無い事を確認し、隣を見ると、柘榴もまた同じように周囲を探っていたらしく、紫炎に気付き小さく頷いて見せた。視線だけで同意を示し、再び室内へと意識を向ける。

その先には、第二王女マリーシアがにこやかな表情で他国の使者と話していた。

時々彼らは「特別任務」と称された、この王女の警護にあたることがある。それは大抵王女自身が気に入らない相手との会談や執務であることが多い。

曰く、乗り気でない仕事をこなすのだから、せめて気の置けない相手に傍に居て欲しい。というのが彼女の言い分であった。

彼らが騎士団に入ったとき、誰もが第一隊の所属するものと考えていた。しかし、蓋を開けて見れば彼らは三隊に身を置いている。誰何する声に、二藍いわく「胡散臭い」笑顔を浮かべて彼らは答えたのだった。

「ファリス家という名門に籍を置くとはいえ、余所者である我らが、高貴な方々と寝食を共にするわけには参りません」

第三隊は基本市中警護である。城下や近隣の町や村には、それとは別に「警邏」という職種があるが、彼らの立場の違いは、警察と軍隊のそれと近い。所有する権限を含めれば、それ以上の格差があつ

た。

隊長クラスになると、相手が貴族であれ、その場で司法権さえ有することが出来る。

「…なんだか、昔のお奉行さまみたいですね。水戸のご隠居さま、ともいえそうですけど」

そう評した二藍の言葉が一番近いものがあるだろう。

こうした権限を悪用しないために、彼らには多くの処罰が細かく決められたいた。ドラレグの事件の後はそれが更に増えて厳しくなつたとも聞いている。

どうして、第一隊の騎士を使わないのかと尋ねた時、第二王女は盛大に顔を顰めて、言ったのだ。

「警護より、己の昇進を考える相手と一緒に居て、安心できるわけがありませんわ」

王城の中なら安心と、警護よりも自分の家の自慢や、己が野心を隠そうともしない相手に本気で自分を護れるとも思わない。そう彼女は言うのだ。

この国は表向きは男性上位かもしれないが、実質は女性のほうが強かなのだと認識を改めた瞬間であった。

マリーシアの手が静かに動く。終了の合図だ。もつとも相手は終わる気配を全く見せないが。

静かに一步踏み出し、紫炎は優雅に腰を折る。キース仕込みの宮廷作法は伊達ではない。

「ご歓談中失礼いたします。殿下、次のご予定のお時間です」

一瞬、護衛の騎士に話を中断させられて、むっとした相手だったが、紫炎の容姿と洗練された動きに、彼が相応の身分と判断し、口を噤んだ。その間に柘榴が王女の手を取り扉へとエスコートする。その動きには一部の隙もなかった。

色々な場所に出入りして目が肥えている相手は、ある意味それが油断や過信となる。彼らの動きで身分を想像し、彼らの身分を「想定」する。いわば勝手に想像してくれるのだ。ヘタな相手より扱いやすい。

「…あれの何処が親善大使、ですの」

部屋を出て充分距離をとってから、マリシアが毒づく。確かに、表向きは自国との交流の報告に来た相手であったが、口を開けば、自分の国の王子の自慢話に終始していた。

「表立って縁談を持つてくることができないなんて、問題ですわね」
「持ってきたって、姫さん全部断っちまうだろうが」

人目の無い場所限定で、柘榴は彼女に対してこういった口調を許されていた。と、いうよりマリシアが望み、お互いに歩み寄った結果である。だから、彼らが警護につくときは、基本二人以外に誰もつかない。反対意見は、彼らの剣技と魔力、それにファリス家の力で黙らせた。一人当たり数人同時に相手して、息一つ乱さず完膚なまでに叩きのめした彼らである。勿論倒された側は、エンデルクから「やり直し」を命じられ、除隊処分を受けていた。

「王家に生まれ、それなりに恩恵も受けているし、立場だって理解していますわ」

「つん、と顎を逸らし彼女は唇を尖らせる。」

「でも、少しくらいロマンスを夢見たっていいじゃありません？ 姉上のように」

彼らの両親もそうであるように、姉であるナディアーヌも王族にシては珍しい恋愛結婚であつた。相手が公爵家という、身分が充分に釣り合っている相手なのは、先代の公爵と国王やエンデルクがまた従弟だからだ。

「グランチエスター公は、叔父上の守役でもあつた方なの」

その辺りの話はキースから聞いた事があつた。ゆるやかに長い年月をかけて二人は愛を育んだのだと。

「そこまで都合のいいロマンスを期待しているわけではないのよ？ でも、嫁ぐのならそれなりに尊敬できる殿方であつて欲しいと思うの」

王女の言葉に青年たちは静かに笑顔を返した。

自分達がそうであつた為か、国王夫妻は子供達の縁談に口を挟むことはしない。断ることも、全て彼らの判断に任せている。それと同時に「どこで縁があるかわからない」と自分達の判断で拒むこともしない。

「でも、不思議ですわ」

軽く首をかしげ、王女は自分をエスコートする二人の騎士を見上げる。

「ご容姿だつて、立ち居振る舞いや持つていらつしやる実力も充分で、個人的にも充分好感が持てて、ご尊敬も申し上げているお二方なのに」

そこで、一瞬言葉を切ると、マリーシアはわざとらしい大きな溜息をついた。

「少しもときめかないんですもの」

だから安心して、こうして傍についていたただけるんですけどね。そういう王女に青年たちは苦笑を返すしかなかった。

8 話（後書き）

遅くなり申し訳ありません。

色々ネット環境に不具合が生じた上に、仕事の状況がとんでもないことになっています。

…本来なら一年を通して一番暇な時期のはずなのですが。

また、お待たせするかもしれませんが、気長にお待ちくださると嬉しいですよ。

9 話

人間が人間である限り、薬の作用に大差は無い。

エドガーから貰った薬草における書物と、キースの家にあった医学書を読んで二藍が出した結論がそれである。

医学書は、この世界の人間が自分達と寸分代わらぬ「ホモサピエンス」であることを示し、発祥する病例も、自分たちと大差ないことを教えてくれた。

魔法が科学の代わりに発展してきた世界である故に、人の体を治す「治癒魔法」も当然存在はするが、基本体を治すのは、薬師に処方する薬草と、本人の治癒能力が基本であった。魔力による治療は長年の研究で人間の自己修復能力を著しく損なうという結果が出ていたのだ。

故に、治癒魔法は緊急の場合を除いて、基本的に禁じられていると書物に記されていた。

薬が人に作用する働きが同じならば、毒もまた同じ。

そして、幼い頃から、そういったものに触れる機会が多かった彼女は、普通よりも「かなり」毒に対する耐性を持っていたのである。故に、エンデルクと食事を共にした時、自分はさほど酷い状態にはならなかったのかもしれないと、今更ながらに思う二藍であった。

それはさておき。

「門外不出の箱入り娘？」

なんです、それ？と驚いた表情をする少女に、周囲から苦笑が漏れる。

「お前のことだ」

「はい？」

この日、マーシャと共に街に出た二藍は、出先で出会ったファミアを家に誘って帰ってきた。

揃って非番だった紫炎と柘榴と一緒にお茶を飲みながら、取り留めない話をしている時に出てきた事が『ソレ』である。

「それなら、私も聞いた事があります。『ファリス家の末の姫君は、至宝の姫君。目にするこの敵わぬ至高の存在』」
ファミアの言葉に少女は心底疲れた表情をする。

実際、囁かれている噂はそれだけではない。しかも、その大半は悪意に満ちたものである。

真実は、ソレを知る者が理解していればいい。

彼女の生家は、そう教えてきた。

「みなさん、お暇なんですネ」

マーシャから手渡されたお茶を口にしながら、二藍は苦笑を見せる。

「ま、噂の発信源は、ある意味義兄上だけだな」

柘榴の台詞に「さもありません」的な空気がそこに流れた。かの弟妹大事のファリス家の主は、彼らに来るパーティの招待状を家長権限で悉く断っている。

二藍ばかりでなく、紫炎や柘榴のものまでも、だ。

伯爵位という家柄もさることながら、キースという存在が繋がりをもちたがる貴族達にとって彼らの存在は大きな魅力でもあった。

「兄さまたちの分は兎も角、私はありがたいです。あまり好んで出向きたい場所ではありませんから」

同情するようにファミアが笑顔を見せる。彼女も子爵令嬢故に、王宮内のどろどろは身に試みているのだ。

しかし、自分達のような考え方をするほうが少数だということも彼らには解っていた。

「ところが、だ」

ひらり、と紫炎は一枚の封筒を見せた。

「あの馬鹿、皇太子殿下の誕生祝まで断ろうとした」

え？とその場に居た者たちが顔色を変えた。特にマーシャの動揺は大きく、給仕をしていたポットを危うく落としそうになる寸前で柵榴が支えた。

「そんな…王族の招待を受けるのは貴族にとって『義務』ですのに…」

それを断るなどと、王家への叛意とみなされても言い訳できない事である。

「でも、シエン様もザクロ様も、いらっしやいましたわよね？私、ご挨拶させていただきましたもの」

ファミアが首を傾げると、彼らは苦笑を向ける。

「寸前で気がついた將軍閣下が機転を利かせて出席の返事を代わってしてくださったんだ。エドガー殿に頼んで衣装を用意していただき、王弟宮から閣下のお供として出させていただいた」

あの時、表には出さなかったが相当驚いたキースに彼らは苦笑を零したのだ。弟妹大事の彼の気持ちはありがたいが流石にこれはやりすぎだ。

「そこで、これだ」

紫炎は手にした封筒をテーブルの上に置く。裏の封蝋を見て、ファミアが「ああ」と頷いた。

「ファミア殿も、これに？」

「はい、ご招待いただいております。当日は非番なので家からの出席となります」

不思議そうな表情の二藍に彼女は笑顔を向けた。

「王女殿下主催の晩餐会ですわ。先日お越しになった親善大使を歓迎してのセレモニーです」

親善大使の話は二藍も紫炎たちから聞いていた。お笑いネタのおまけ付きで。

「先日殿下から手ずから頂いた。表向きは、護衛の日と発送日が同じだったからついで、という事だが…キースを警戒しているな、あれは」

封筒の表の文字は二藍あてになっている。

「俺と柘榴は、その場で返事をしているから問題ない。キースから俺達の欠席の返事が来ても無視してくれるように手配は済んでいる。

…いいな、二藍」

「はい」

こくりと頷く少女にファミアが驚いた表情を見せた。

「フタアイはまだ未成年ではないのですか？」

「俺達の生まれた国では未成年だが、この国では立派な成人なんだよ」

笑って答える柘榴にファミアの驚いた表情がそのまま二藍に向けられる。それに笑って肩を竦めると、成る程、といった頷きが返ってきた。

「年の割りにしっかりしていると思っていました、相応の年齢だったというわけですね」

ごめんなさいと謝る少女に、ファミアは軽く首を振る。勝手に思い込んでいたのは自分達だから、と。

「それで、悪いがファミア殿、二藍の装飾品を見繕ってくれないか？支払いは此方に回してもらってくれ。ドレスは……ここに」

自分の部屋から紫炎が持ってきたドレスに、女二人は目を丸くした。

「これは、素晴らしいものですね」

「……ひよつとして、ワードルースのドレスですか？」

ファミアの言葉に、紫炎が口角を上げるとマーシャがほう、と感嘆の溜息をついた。ワードルースとは王室御用達の仕立て屋の名前である。

「マリーシア殿下が一度も手を通さずにいらったドレスだ。

今回無理を言うからとお前に下賜してくださった。サイズは自分で直せるな？」

「それならば、わたしが」

マーシャの言葉に紫炎は首を振る。

「ファリス本家で見つかれば、勘のいいキースの事だ、すぐにこの計画に気がついて、結界を張りに来る。それよりマーシャには、当日上手く理由をつけてここに来て仕度を手伝ってくれ。流石に俺達ではそれは無理があるからな」

頷いた二人は、それぞれ屋敷に戻っていった。

手渡されたドレスを見て、少女は大きく息を吐く。

「それで？」

ドレスから、式神へと視線を移し、二藍は口を開いた。

「ファミアさんやマーシャまで巻き込んで、エンデルクさまは何を

「お考えなのですか？」

主の言葉に青年達は顔を見合わせると小さく笑う。彼女の勘のよさと理解力を改めて認識したのだ。

「簡単なことだ、王女殿下の晩餐会にエンデルクのエスコートで行けばいい」

「……『お兄様達』は？」

「俺達は当日殿下の護衛だ」

もう一度深く息を吐くと彼女は手にしたドレスを広げた。

「手直しの必要はありませんね。……このドレスの出所は、あえて伺いませんが……。いくら侯爵家の傍流とはいえ、伯爵家ごときが王女殿下にエスコートをお願いできるような身分ではないと思いますけど？」

「いや、ファリス家なら問題ない。当主のキースは宮廷魔道師であり、皇太子殿下の右腕でもある。加えて義弟の俺達は第三隊とはいえ、王女殿下の護衛も勤めているからな」

「そして、末っ子は王弟殿下にエスコートを受ける……ですか？」

「ああ、伯爵令嬢が王家のエスコートを受ける、という意味合いも含めてだな。良い虫除けになる」

自分の上司で王族を虫除け呼ばわりなど、普通考えはしないだろう、と頭を押さえながら、仕方無しに首を縦に振る。

「義兄さまの防波堤は誰がなつてくださるんです？」

「そりゃあ、将軍閣下だろう？ 今回の首謀者だしな」

石榴の一言にがつくりと頂垂れた二藍であつた。

9 話（後書き）

ここで、第三部は終了いたします。晩餐会の模様は幕間に書かせていただきます。

多くの方が孤立していると報道されています。

一刻も早い救助と皆様のご無事をお祈りいたします。

友人達からメールで節電の協力が回ってきています。この場をお借りして皆様へのご協力をお願い申し上げます。

幕間 4

上司の机の上に投げ捨てられるように置かれた封筒を見て、紫炎と柘榴は眉を顰めた。

中身も一緒に開かれていたそれは、数日後に迫った皇太子の誕生祝のパーティの招待状である。

宛名はファリス家の三人の連名。

「…あの、馬鹿」

出席はキースのみ。他の二人は公務のため欠席となっている。

「エルリックの元に行く前に俺のところに確認が来た。第三隊だから、王宮行事に左右されないのはわかるが、代われる者がいるなら、なんとかならないか、とな」

キースが自分達に無断で送られた招待状の返事をしていることは気がついていて。元々キース自身がそういった付き合いが悪いことと、自分達も貴族社会に関わりたくないの、放っておいたのだが、流石にこれはまずい。

「ファリス家への招待状であれば、家長であるキースが出席すれば問題はない。しかし、こうして連名とはいえ個人への名指しできた招待状に欠席の意志を伝えれば、よほどの理由がない限り王家を蔑ろにしていると取られることになる」

「だろうな…しかし、何故これがそちらの手にあるんだ？」

もつともな紫炎の疑問に、エンデルクは小さな笑いを浮かべた。

「欠席理由が『公務』とあるだろう？エルリックの侍従が本人の手に渡る前に俺のところへ持ってきた。」

侍従が真面目な奴で助かったと呟くエンデルクに、紫炎と柘榴は笑いを浮かべる。この男は、自分の甥が『王弟派』を名乗る面々から

護り、対処するために自分の息が掛かった者たちを潜ませていたのだろう。

「キースは世間に疎い。ある意味お前達以上に、だ。この世界のことを誰よりも知ってはいるが、一般の常識や貴族間の暗黙の事情などは理解していないだろう」

元々ファリス家の先代が社交性があるほうだとは言えなかった。キース同様妻も娶らず、生涯を魔法の研究に捧げた男だったらしい。そして、その伯父以上にキースは社交界から離れている。

「今までファリス家が自分ひとりだったというのも理由の一つではあるな。王家からの招待でも、自分ひとりが行けば良い、お前達に余計な柵を持たせたくは無い…それが本音だろう。貴族の中では少数派だな」

しかし、今回のようにそれが仇となることもある。

「あれ自身には、いずれ言い聞かせるとして…出るならば、俺の共としてついてくるか？」

一瞬呆れたような顔をした二人だったが、すぐに表情を消して優雅に腰を折る。

「お気遣い感謝いたします」

鷹揚に頷きながら、これはこれで社交界を騒がせる一端となることに苦笑を禁じえないエンデルクであった。

「二藍はどうする？…まあ、今回は招待客に入っていなかったようだが」

「多分、今だ未成年と思われるからだろうな。公式文書を読めば、こちらでは成人なんだろうが…結構抜けているなこちらの役所も」

「今回のような大掛かりなものならば、そこまで手が回らぬか……いや……」

ふと気がついたように彼はエドガーを呼んで耳打ちすると、侍従は頭を下げで部屋を出て行った。

「エンデルク？」

「まさかとは思うが……キースが年齢を偽って届けた可能性がある」
絶句するも、それを否定できない二人だった。二藍への誕生祝に膝丈のスカートを持ってきた相手である。

「心配ない。エドガーは元々『専門家』だ。上手く処理をしておいてくれるだろう」

おや？と二人の青年は顔を見合わせた。以前キースはエドガーは若い頃王宮の書庫に勤めていたと言っていたはずだ。だが、あえて彼らも深くは突っ込まない。部署が移動になった事もあるだろうし、第一『それだけ』の相手をエンデルクが傍近くに置くとも思えなかったからだ。

「二藍のデビューは追々考えよう。……それでは、お前達の衣装を用意しなくてはな」

「それなら、以前謁見に使ったものがある。それに將軍閣下のお供なら、隊の式典用の礼服でいいんじゃないのか？」

「仮にも皇太子殿下のご招待だ、そうはいくまい。……だれかある！」
廊下にエンデルクの低い声が響き渡った。慌てたような足音がこちらに向かってくるのを聞いて、溜息をついた式神たちであった。

二人が入ってきたとき、それまでざわめいていた広間が静まり返った。

男の方は、その場に居る誰もが知った顔：この国の国王の異母弟であり、騎士団を束ねる将軍でもある人物。しかし、彼がエスコートしている女性は彼らも初めてみる顔であった。

着ているドレスは、胸元は白く、裾にいくにしたがって濃い藍へとグラウンダーシヨンとなっており、結い上げられた黒髪には小さな真珠がいくつもちりばめられていた。胸元には青い魔石のついたペンダント一つ、腕には小さな真珠と白金のブレスレットと至ってシンブルな装いであったが、見るものが見れば相応の品物と分かる一品である。

この辺りの民族には見られない、きめの細かな象牙色の肌に黒い瞳は、彼らにある噂を思い出させる。

「…ファリス家の末の姫君」

小さく誰かが呟く声がする。静まり返った広間にそれは思いのほか大きく響き渡った。

それを皮切りにざわめきが広がる。

「あれが？ 話に聞くような容姿とは違うではないか」

「エンデルクさまがエスコートなさるとは…一体どういう関係だ？」

「子供だと聞いていたが…成人女性なのか？」

中には、聞こえないと思つてか、中傷めいたものもある。人の何倍もの聴力を持つ、紫炎や柘榴の耳のには届く。微かに眉を顰めはしたが、すぐに表情を戻すと噂の二人が王女とそのエスコートを勤める皇太子、そして主賓の親善大使夫妻の前に進み出ると礼を取る。

「これは、叔父上にフタアイ。良くおいでくださった」

「ごきげんよう、叔父上、フタアイ」

二人に声を掛け、顔を上げるように言う。静かに顔を上げたエンデルクは、穏やかに甥姪に笑顔を見せた。

「お目にかかれて光栄です。王弟殿下」

「大使殿もお役目ご苦労に存じ上げる」

鷹揚に応じるエンデルクを目の端に捕らえ、流石王族と二藍は思う。

「では」と、軽く頭を下げ、二藍の背を押し後ろで控えている挨拶待ちの貴族に場所を譲る為に静かにマントを捌く。

ふと、その瞬間見えたサツシュにマリーシアの瞳が軽く見開かれ、物言いたげに伯父の顔を見、視線を傍らの少女へ移す。

不思議そうな表情を返して来た彼女に微笑んで首を振ると、次の貴族へと視線を向けた。

「目聡いな」

小さく呟くエンデルクに少女の視線が向けられる。それに笑顔を見けると少し恥ずかしそうな笑顔を見せた。

その穏やかで親密な様子を貴族達が見逃すはずもなく。

その翌日にはファリス家の末の姫の王弟との関係が噂になって貴族間を流れ、欠席したキースが慌てて弟妹の屋敷に飛び込んでいく事となった。

「上手くやりましたわね。叔父上も」

パーティが終わって護衛二人と退出してきた第二王女は、小さな声で言葉を発した。

「国王夫妻が出席しない非公式の、しかし王族である私の主催する晩餐会に出ることでお互いの確執がないことを表し、しかも私を護衛している貴方達の妹を連れてくることでより一層関係をアピールする」

「結構策士さまだからな。將軍閣下は」

呆れたような柘榴の言葉に、王女は笑みを深くする。

「それに気がつきまして？叔父上の腰のサッシュ」

「共布だな。二藍のドレスと。…あれは、何か意味があるのか？」
おもむろに振り返った第二王女の瞳が悪戯っぽく輝いている。

「まあ、今時アレを知っているものが貴族の間にどれだけ居るか知りませんけれど。…古い、とても古い『しきたり』ですね。結婚を約束した男女間で行なわれる、暗黙の了解ごと。男がドレスを贈り、その共布を自分の腰のサッシュとして使う」

「何気に防波堤を築いたのか…呆れた男だ」

王女が知っているのだ、古い家柄：言い換えれば、それなりの地位に居る貴族達の一部は気がついた可能性がある。

「似たようなのが向こうにもあるな。多少意味合いが違いはするが」
その話をせがんだ王女にすると「まあ」と、顔を赤くするが、面白がっていることはその顔を見れば分かる。

王女殿下の「面白がり」が、どこで発揮されたかは、また別の話。

幕間 4（後書き）

ご存知の方もいらっしゃるかもしれませんが、風習というより裏的意味合いで男性が女性にドレスを贈って、一緒に下着も贈る時、下着の共布をチーフとして使う。という話を聞いたことがあったので、その話からヒントを得ました。

因みにドレスの共布、という話もありしますが、何にせよ相手の服の好みとスリーサイズを知っていなければ出来ない話だと言う事です。

1話

恋愛に多少縁遠い環境に居たとはいえ、決して鈍くも天然でも無い。

それ故、時々自分に向けられるその視線の意味合いに気付かないわけではなかった。

柔らかな甘さを含んだ中に、確かにある種類の熱と欲を潜ませた瞳。そんな視線を向けてくる相手に、自分も仄かな淡い想いを抱いているのなら尚の事。

しかし、彼女はそれら全てからそつと目を逸らす。

何も確約されていないから。

そして、自分達の存在が、どこか不確かな者だから。

未だ『帰りたい』という気持ちは、確かに自分の中にあるのだから。

天秤はまだ『帰りたい』に傾いたままであるのだから。

社交界デビューした二藍に、普通ならば彼方此方から縁談のふたつやみつつ来ても可笑しくは無いのだが、それらしき話が無いのはエudelクとキースという存在故にであった。

『あの』王弟殿下自らエスコートしてくる相手である。自分達がヘタに横槍を入れるには相手が悪い、ということ。

シスコン、ブラコンを（たとえ義理の、であつても）隠そうとしないキース相手に、どこまで穩便に話を進められるのか、ということ。加えて、彼女の所作の優雅さから『秘された王国』の生き残り説も浮上してきたのだ。

ファリス家の末の姫君は、難攻不落の至上の姫君。

訳のわからない噂がまた一つ、貴族社会の中に広がっていったのだつた。

「よろしいのですか？お嬢様」

「はい。でも効き目は個人差があると思いますから、ちゃんと試してから使ってくださいね。赤くなったり、かえって手が荒れたりしたらすぐに使用を止めてください。私が差し上げたとか、気にしないで。却つて、悪化しているのに使い続けたら私のほうが困りますから。…約束してくださいね」

「勿論でございます」

浅めの口が大きなビンに詰められた軟膏を嬉しそうに持って帰っていくマーシャに、二藍は苦笑を浮かべる。後でロデオにでも事後報告と監視を頼もうと心に決める。

柘榴が見つけた、アロエに良く似た成分の植物は、それだけでは匂いも刺激も強く、クリームや化粧水の代わりに使うには問題があったのだが、市場に安く出回っている、糸瓜と同種の植物からできた化粧水と合わせると、刺激も匂いも押さえられることが分かった。試しに自分で使ってみると、想像以上の効果が現れ目を見張る。

ただ、こういう化学反応か分からないが、この二つを混ぜると、ど

ろりとしたクリーム状になるのだ。

日本に居た頃使っていたハンドクリームより柔らかく、乳液より固い。しかも、色合いがあまり好ましくは無い。

二藍が使っている場面を見たファミアが、一步後退する程である。試しに、と言われ、決死の覚悟で使った彼女は、翌日驚きの声と共に、ぜひ自分にも分けて欲しいと言ってきたのには笑ってしまったが。

「慣れてしまえば、さほど気にはならないけど…売り物にするには難しいわね」

確かに一般の女性が好き好んで『どどめいる』（と、柘榴が表現した）クリームを使いたがるとは思えない。…まあ、今のところ売り物にするつもりも無いが、将来的に製品とするのなら、改良点の筆頭だと思ふ二藍であった。

「ある種の凝固作用だとは思ふが…色は兎も角、効き目が俺達にも現れるところが凄いいえば凄いな」

手に掬って、塗りながら紫炎は苦笑を見せる。本体に戻った時毛艶が違ふと彼は言う。

「しかし、抽出される液体は、どっちも無色透明なのに、どうして混ぜ合わせるとこんな色になるんだ？」

「化学反応まで聞かないでください」

皮膚が弱い腹部や首筋にもアレルギー症状は現れなかったが、自分達がそうであるからといって、他者がそうとは限らない。

「香りつけも課題ですね。香水が無いわけではないですけど、思った以上に日本人感覚に近いですね」

貴族社会においても、女性も仄かに香る程度にしか香水をつけることはしない。

「下水道文化が発展しているからだろうな。あれはそもそも『臭い

消し』的な要素から始まった文化だ。日本の『香』も同じだよな」

「あと、香油の精製にも理由があるらしいです。こちらは機械で行なうのではなく魔法で精製するらしいので…かなり高価なものになるらしいですよ」

義妹から頼まれて、嬉々としてビン一杯の薔薇の香りに似たエランという花の香油を作ってくれたキースは「結構手間がかかるんです」と話してくれた。

とはいえ、天災（笑）魔道師が目の前で瞬時に行なってしまうので、自分達には実感は皆無だが。

「その上、好んで香水に使われる香りの花の香油は、肌に直接つけると刺激が強く、かぶれの元に成り易い、か。豪商への道は果てしなく遠そうだな」

「誰が商人ですかっ！」

ファミアやマーシャを通じて、騎士団や貴族の下働きの女性にクリームが口コミで広がって、ちょっとした小遣い稼ぎになるのは、これから暫くしての事。

2話

自分の話を聞いて黙り込んでしまった相手に、ザリックは気まずそうに視線をそむけた。

そんな青年の様子に気付いて、紫炎は小さく微笑む。

「貴殿が気に病まれる事ではない」

「しかし、私をもっと早くにこの噂を耳にしておりましたら…」

「正式に報告されていれば、我らの耳にも自然と入っていた事。それが無いということは、故意に隠されたか、当事者が気にも留めずに居たということだ。貴殿の責任ではない」

ファリス家の次男である彼は、第三隊の一員として登録はされているが、実質將軍の直属であり、王女の側近とまで最近では囁かれていた。

ファリス家の正式な一員となって、二つの季節を過ごしただけであるのに、驚くほどの出世の早さである。

とはいえ、実際の身分は、騎士団の一団員なので、出世しているかと問われれば怪しい話であるが。

自身も皇太子の側に仕えているから解るのだが、この国の王族は身近に置くものを自らの『目』で選ぶ。

周囲の言葉に踊らされているように見える皇太子だが、わざとそう思わせているのだと、いち早く気付いたのも彼である。

「義兄上すら、騙しているのか…気の毒に」

楽しそうに笑った青年に「腹黒に見えて、結構キースは正直ですから」と笑い返した皇太子の表情は、血縁だと再認識させるほどエンデルクに似ていた。

先日の晩餐会以降、彼らに取り入ろうと多くの貴族が接触を図ったが、キースの纏う冷気と、慇懃に対応する二人の青年、社交界にデビューしたばかりの当事者には、常にエンデルクが側に控え、全員が撃沈していると聞いている。

そんな中、ザリックの耳に入ったある噂は、彼の秀麗な眉を顰めさせたものだった。

第一隊の中で少数派の彼は、偶然王宮内で出会った相手に耳にした噂を告げたのだ。

「確かに隠匿が得意な者が多いですからね」

何れ知られることをどうして隠すんでしょうね、と問う青年に紫炎は苦笑を更に苦いものにする。

「本人は隠し通せると思うのだろう。だが、今回のことは隠した、という事とは少し違う気がするが」

「ええ。隠しているつもりは無いと思います。多分報告するまでも無いこと、と考えているのでしょうか。…彼らに言わせると、『第三隊が捕まえた犯罪者の遺体が無くなった所で、気にすることではない』でしょう」

「隠したのではなく、報告するまでも無い、と思ったわけだな」

「ええ、私も酒の席で耳にしたのは笑い話、というか絵空事の怪談に近い話でしたから。『安置してあった遺体が少し目を放した隙に無くなっていった』『死んだはずの男が市場で買い物をしていた』『氣になって調べてみたら、確かに安置してあったはずの遺体が無くなっていたらしいです。当日の当直が第一隊の騎士達で、自分達が居ない間に墓守たちがやって来て、持って行ったと思っていますよ』」

「『検死』のシステムが必要だな」
え？と顔を上げるザリックに紫炎は緩く首を振った。「機会があればゆっくり説明する」の男の言葉に首を縦にふる。知り合って日は浅いが、青年は彼が充分信用に足る相手だと理解していた。
でなければ、將軍を始めとした王族達が側に置くはずがないのだ。

周囲は王弟の恋人の兄、という捕らえ方しかしていないものが多いが、そんな生易しい相手ではない。

「閣下には私から話しておこう。ザリック殿は今まで以上に殿下の身边を気をつけていたきたい」

「承知いたしました。シエン殿もお気をつけて…フタアイも」

「まあ、暫くは問題が無いだろう。義兄上が心配して、今屋敷に連れ戻されている。不本意だが我々もだ。何かあったら、ファリス家の方に知らせてくれ」

「やはり、あの噂が原因ですか？」

笑いを滲ませながら言うザリックに、紫炎も呆れたような笑いを浮かべる。

「婚約発表が秒読み、という奴か。義兄の場合、自分が蚊帳の外に置かれたことが面白くないだけのようだがな」

思わず声を出して笑ったザリックと紫炎だった。

「セドリック？…ああ、自害した人買いの一味か。奴がどうした？」
「遺体が消えたってよ」

黒猫がぱたり、と尻尾を揺らし、寝そべったソファからエンデルク

に向けて言葉を放った。

「そんな報告はきていないが？」

眉間に皺を寄せてエンデルクが書類から顔を上げる。傍で控えていたエドガーも怪訝そうな顔を向けた。

「報告するまで無いと思っただけ。三隊が捕まえた下賤の男の死体がなくなると、騎士団に関わりは無いと思っているみたいだな」

もう一度綱紀を改めたほうがいいんじゃないか？

立ち上がり、音も無く優雅な動きで、柘榴は執務机の上へと飛び乗った。山積みになされている書類の紙ひとつ動くことが無い。

「どう思う？エドガー」

「恐らくは、仮死状態になる薬かと。そういったものが存在すると聞いたことがあります」

「脈も心臓も止まっていたぞ」

「だからこそその秘薬、かと。一步間違えれば『本物』になりかねませんから。常に死と隣り合わせの危険な薬だと存じます」

大きく息を吐いてエンデルクは目の前の猫に再びソファに戻るよう促すと、自分もそこに身を沈めた。

「二藍はファリス本家か？」

「ああ、あいつにもこの件は伝えてあるから、暫くは諦めてキースの相手をしていると笑っていた」

「そうか…確かにあちらのほうが安全ではあるな。キースの結界はいろいろな意味で脅威だ」

苦笑いを浮かべながら言うエンデルクに軽く尾を振ることで柘榴は応えた。エンデルクを拒むことは無いだろうがキースの冷気を浴びながらの会話は、楽しむにはかなり無理がある。

「キースには…」

「家から犯罪者はだしたくねえな」

否定できない内容の答えに、思わず口を噤む。弟妹のためなら王室を敵に回しかねない今のキースは、色々な意味で危険人物といえた。

「とりあえず、その件はこちらでも調べてみよう。未だ主犯が捕まっておらぬのでは、いつまた事件が再発するかもしれないがな」

「ああ、頼んだ。…けどよ、エンデルク、アンタだって気付いているだろう？事件としてはもう起こりはしないって」

難しい表情のままエンデルクは頷く。同じ轍は二度と踏まない。あの男はそういう相手だ。

「しかし、事件が起こって半年…二つの季節を過ぎるまで、よく発覚しなかったものだ」

「発覚しなかったのではない、事件としてみなしていなかったからだろう。事実俺自身もアレ以来遺体を見に行こうなどと考えもなかった」

死体を埋葬した、という報告すらなかったことを不審にすら感じなかった。

「元々一隊の団長だ。内部事情を良く知っていたからこそ、こんな方法を思いつく事が出来たのだろう」

大きく息を吐くと、エンデルクはいつの間にか人型に戻った柘榴に視線を移した。

「そろそろ頃合だと思っていたからな。陛下にもすでに許可は頂いている。騎士団の機能を変えようと思う。協力してもらえるか？」

「いいぜ。なんなら二藍にも一枚咬ませたらどうだ？あいつ結構詳しいぜ。なんたってミリタリーオタクと幼馴染だったからな」

「『ミリタリーオタク』？」

気にするな。と笑って、今度は入り口の扉から出て行った部下に苦

笑を向けるエンデルクであった。入ってきたときは猫の姿で窓から来たのだ。扉を開けて出てきた相手に、外で警護のために立っていた騎士たちが慌てて居るのが目に入る。

「一騒動起こすか」

「承りました」

深々と頭を下げたエドガーに静かに頷くと、男は執務を再開すべく机へと向った。

2 話（後書き）

章ごとに区切ることにいたしました。

思ったより作業が大変でしたorz・・・

お気に入り登録数に、驚いたり喜んだり。
皆様、ほんとうにありがとうございます。

3話

「『ミリタリーオタク』って…」

「^{たけし}健のことか？」

呆れたような二藍と紫炎の声に柘榴が口角を上げる。

「違うのか？」

「違う…とは言いませんが…」

そう言つて、脳裏に浮かぶ幼馴染であり、遠縁の少年を思い出して、深々と息を吐いた。

父親同士が従兄弟と言う関係からか、彼女は本家と近い血筋にあつた。マスメディアに取り上げられている『陰陽師』とは色合いを異なる彼女の一族は、それを知る数少ない相手から利用価値を認められると共に、一つ間違えれば、限りなく厄介な相手とも認識されていたのだ。

事実、本家の息子達は誘拐されること数回、命の危険に晒されることも度々会った。故に、彼らは常に自分の使役する式神を傍にしているのだ。式神が居ない幼い頃は、両親や親戚が使役する式神が護りにつく。

単独行動も危険とみなされたが、幼い子供達に完全に目が行き届くはずも無く、考えられたのが同年代の子供達を出来るだけ一緒に居させようと、先代の長が幼稚園を開設した。

大半は、近所の子供達で占められるが、職員は当然一族の息が掛かった者から選ばれ、一族の子供達は必ずここに通うことになった。た。

その頃から一緒だったのが、やはり一族の血を引く健と莉緒の二人だった。

二藍ほど本家に近い血筋ではないが、彼らも術者である両親の元で修行を積み、それなりの使い手となっている。

「その、『ミリタリーオタク』というのは何なのですか？」

エドガーの問いに、二藍は苦笑を向けた。

「『ミリタリー』というのは軍事を指す言葉です。戦争や軍隊、軍人の総称、ですね。けんちゃん：幼馴染で一族の健くんは小さい頃からそういった方面に詳しくて：まあ『オタク』っていうのは、一方向の方面に詳しい人、と考えていただければ間違いはないです」

制服は兎も角、普段の私服にモスグリーンや迷彩色の色合いが多い相手を思いだし、彼女は小さく笑う。あれはあれで、とても目立つのだが、本人は一向に気にせず街中を闊歩するのだ。

「ほう、軍事の専門家か」

そう言っているのか、疑問も問題点もあるが、まとめてスルーして二藍は笑顔を見せた。

確かに彼の蘊蓄のおかげで、一般より、軍事関係の知識は多いとは思うが、それがどこまで男の役に立つかは疑問である。

「この国の構造から考えると、けんちゃんより宗也兄さまかもしれませんね」

「宗也？図書館の司書がどうしてだ？」

宗也、というのは従兄だとエンデルクに説明してから、彼女は問いを発した柘榴に顔を向ける。

「雑多な知識は宗也兄さまの得意とする分野です。けんちゃんの知

識は向こうでの軍備がベースとなっていてますから、こちらでは意味を成しません。剣と魔法の世界と『化学兵器』では異なりますですよ?」

こちらで当てはめる言葉がなかったので、化学兵器は当然日本語となる。

成る程、と紫炎は頷いた。

「どこまでお役に立てるか解りませんが、異界での知識とあわせまして、私達で出来ることでしたら協力させて頂きたいと思います。ご遠慮なく命じください」

腰を折る彼女にエンデルクは苦笑を向けながら、首を縦に振った。

「…こんなものか」

既に日が傾いている。彼らがここに来て、昼食を挟んでおよそ7時間^ラという時間が過ぎていた。内容から考えれば、数日、もしくはそれ以上掛かってもおかしくは無いのだが、予めエンデルクとエドガーで草稿を作ったので、それを形作るだけでよかった。

…とはいえ、一軍の構造を変えるのだ、並大抵のことではない。

「しかし、言っちゃあなんだが、閑職だな」

「名称も変更…『近衛』響きだけなら悪くないからいいんじゃないか?」

「騎士団は一つにまとめるんですね。『騎士隊』ですか」

「ああ。国境警備は騎士隊、警邏両方からの兵役義務、という形に変化は無い。もちろん、近衛、もだ。そこまで甘くするつもりは無いからな」

「…甘い、ねえ。俺には役立たずは城の中で大人しくしてろ、とか思えないんだが…まあ、いいさ、どうせ対象者は一隊の奴らだけだからな」

「騎士隊も、剣技のみと、魔力中心に分けるんですね？」

「ああ、その方が任務によって指示しやすくなる。前の事件のように向こうに操られて邪魔されるのも問題だろうからな」

これには、紫炎が軽く肩を竦めることで応じた。相手の魔力に操られるものは、抵抗力が低いもの…魔力の少ない者ほど起こり易い、とキースが独自に調べて報告していたのだ。

「一隊に選択の余地は一応おあたえください。心ある…理解力のあるものなら騎士隊への残留を希望すると思います」

「数名いればいいほうだろう。まあ、相手によっては近衛に行かさざる得ない者もいるが…な」

「そういった方はちゃんとご自分の役目を理解されていらっしやると思いますよ」

につこりと笑顔で二藍が応じて、その場はお開きとなった。

エンデルクの名前で提出された書類は、事前に根回しがされていたこともあって、あっさりと認められ、騎士団の面々も表立って問題なく辞令を受け入れたのだった。

唯一人、マリーシア王女のみ面白く無さそうに口を尖らせた。

彼女は、この移動によって、今までのように気軽にファリス家の次男、三男を呼ぶことが出来なくなったからだ。

新しく、制服を支給され『近衛』と呼ばれる身分になったものは、今までのように平民と同じ扱いを受けなくなったと喜んだものが大半だったが、数名はそのまま騎士隊に残り、数名は己の立場ゆえ心

残りを抱えながら近衛に移動する。

その中には、ファミアやザリックも含まれていた。

3 話（後書き）

活動報告始めました。お氣が向かれましたら、覗いてくださると嬉しいです。

4 話

以前は断り無く、欠席の返事をしていたキースだが、弟妹とマーシヤの説得：説教ともいうが…に押し切られ、家に来た招待状を勝手に扱うことはしなくなった。

対外的にはいくらでも腹芸ができ、どこまでも冷徹になるファリス家の長兄は、一度懐に入れた、というか信用した相手にはどこまでも甘くなる、という事を目の当たりにしている弟妹達なので、エンデルクや皇太子の危惧も無理からぬ事と納得している。

加えて彼は、皇太子の言葉通り、貴族間の勢力図や、交友関係に関して驚くほどの事情通でありながら、暗黙の了解事や、当たり前となっている観衆には呆れるほど疎かったのである。

マーシャいわく、「社交界を疎かにしていたツケが回ってきた」と、いうことだ。

とはいうものの、その勢力図の中心人物がキースを欺いているのだから、彼の知識も何処まで信用していいものか決めかねているのも事実だった。

「基本的には、キースさまの情報は正しいですよ」

あるとき、エンデルクの使いできたエドガーに二藍がそれを零すと、王弟の侍従は見事な笑顔で彼女に応じた。

「お二方も、キースさまを大事になさる余り、隠されるのですよ。

殿下がお考えになつてゐるほど、甘い方とは思いませんから巻き込んでしまえばいい」と、これはあくまで、私個人の感想ですが」

「なんだか『やれ』つておっしゃつてゐるように聴こえますが…」

二藍の言葉に、男は笑顔を向けただけだったが、向けられた本人は小さく肩を竦めて、やれやれと首を振つた。

「それで、『近衛』と『騎士隊』はいかがですか？」

「大きな混乱も無く、勤務内容の移行もつつがなく行なわれたと伺つております。…まあ、言つてしまえば、二種類の者しかおりませんからね。『近衛』は」

エドガーの言う「二種類」とは、「お飾り」と「腹心」である。後者の数は、全体のほんの一握りではあるが。

「あ、あと兄達がお世話になりますが、よろしくお願いいたします」「とんでもございません。お二方には今以上の激務になる可能性がございますので、フタアイさまにもご迷惑をおかけいたします」貴族ならではの優雅さでエドガーは頭を下げた。

今までエンデルクの副官と兼任していた一隊の団長が、今回の件で正式に近衛隊隊長に任命され（本人曰く『子守』もしくは『監視』）カイルも騎士隊長となった。

そして、空席となったエンデルクの副官の席に紫炎と柘榴が着任したのだ。

もちろん、この話是一部の貴族、特に近衛に籍を置く者の関係者から批判の声が上がったが、書類上とはいえファリス家の一員ということに加え、皇太子や第二王女の推薦状が周囲を黙らせた。

「エンデルクさまから、お話を伺った時点である程度は覚悟しておりましたから大丈夫です。流石に立場上、あの家に住む訳にはいきませんから、伯爵家住まいになります。が……まあ、義兄さまにとつては、プラスマイナスゼロ、といった所だと思えます。兄達も含め自分が置かれた立場が微妙になった事と、私達が屋敷に戻ってきた事で」

今回の移動の中、ひっそり行なわれた一つに、キースが公式に皇太子の副官の一人として任命されたことだ。

コレによって、ファリス家を媒介として、皇太子と王弟は繋がりを持つ事になる。

皇太子派と王弟派に分かれて水面下で争っていた貴族達には、まさしく『青天の霹靂』。

城内で穏やかに談笑している彼らに近づける者は、僅かしかいなかった。

キース自身、今回のことをどう考えているのか、本人に確認はしていないが、どこか釈然としないものを抱え込んでいるのは、家に戻って酒量の増えた彼を見て窺う事ができる。

しかし、それは彼自身が消化しなければいけない問題である。

彼が本当に巻き込まれても問題が無いかどうか、彼女が決めかねているのは、青年のこういった状態を普段見ているからに他ならなかった。

「……と、いうか元々仲はよろしかったんですよね？ 煩かったのは周困だけだと伺っていましたし？」

「はい。しかし、人は自分の良いようにしか物事を見ぬもの。あくまで『表向き』と考えていた愚か者がいかに多かったか、という事

でございます」

二藍にしてみれば、まだ解らない事　隠された『事実』　はあ
るが、今はそれを言及することは控えておこうと考える。

紫炎と柘榴も何か思う節はあるのだろう。あの二人が、大人しくエ
ンデルクの副官に納まっていることがいい証拠、であった。

「ところで、今度の皇太子殿下の主催の夜会にフタアイさまも出席
されると伺いましたが」

「はい、義兄がエスコートすると張り切っていましたので。…いい
加減、妹ではなく別の方を、と思わないわけではないのですけれど
…相手があの兄ですから、ご婦人たちの苦勞が忍ばれます」

デビューして、間もない彼女ではあったが、出席する大半は王家が
らみのものであった。それゆえ、彼女の周囲には常に兄達のだけか
か、エンデルクの姿があった。

言い換えれば、彼女以外彼らの周囲に特定の女性はいない、という
事になる。

「ですから、それはお持ち帰りください」

彼女の視線の先にある、エドガーが持ってきた荷物に、男も困った
ような笑顔を見せた。

「やはり、お気づきでしたか？」

「マリーシア殿下にお教えいただきました。申し訳ありませんが、
これ以上殿下からドレスを頂くわけには参りません」

一般の貴族の女性ならば絶対に言わない台詞を言つて、少女は微笑
んだ。その中に完全な拒絶を見て、エドガーは大きく息を吐く。

「無理強いはするな、との主の言葉が無ければ置いて行きたい荷物

ではありますが…仕方ございません」

「ご好意だけはありがたく、とお伝えくださいませ」

立ち上がり、優雅に礼を取る彼女の態度は、無言で男に退出を促していた。

「承りました」

同様に男も礼を取ると、ファリス家を辞す。

「良かったのか？」

窓際に影を落す獣に、彼女は柔らかな笑顔を向けた。

「天秤は未だ傾いていません。これほどの錘を加えながら均衡を…いいえ、いまだ『向こう』に心は傾いたままで、迂闊な約束事はできません」

彼女の言う『錘』の一つに自分達があることを知っている青年は、軽く目を細めた。

「我らのことは気にするな。お前がいる場所が我らの居場所だ」

柔らかな毛並みに顔をうずめ、微かに頷く主に、紫炎は細めた瞳を柔らかなものに変えた。

「…やはり、改良は必要ですね」

顔を上げ、唐突に言葉を紡いだ二藍は、眉を潜めた。

「ほんの微かですけど、完全に臭いが消されていません。香り付け以前に、目指せ無味無臭、ですね」
どこか意味が違う、と溜息をついた式神であった。

5話

「本当にあの方に王位を継がせることが目的なんですか？」
ぼつり、と零した主の言葉に式神二人は顔を上げる。

「そんなことが可能なんですか？」

暗闇の中、その影は音も無く立ち上がり、周囲をゆっくりと見回す。
その周囲には他に三つの人影があった。うち一人は女性。

「やはり、やって来ましたね」

どこか笑いを含ませた声に溜息が応じる。

「少し突付いたらこれ、ですか。『あのお方』はよほど私が邪魔と
みえます」

自嘲めいた笑いを浮かべながら青年は言葉を紡ぐ。他の三人はあえ
て何も言わず彼に寄り添った。

それだけで充分だと彼は笑いを静かなものに変えていった。

さてと、と青年は、倒れた刺客を見回しながら影の一人に視線を移
した。

「とりあえずは生かしてあります？」

「無論」

無然とした声に彼女の笑いがかぶさる。殺伐とした光景でありなが
ら、彼らの周囲には穏やかな空気が流れていた。

「しかし、正直ここまでとは思ってもみませんでした」

溜息と共に吐き出された青年　キース　の言葉に、傍にいた二藍が微かに眉を寄せる。

「一応血を分けた父であり、兄ですからね。信じたかった、というのが正直なところです」

実際、彼が叔父の家の養子になることを決めた時、二度と敷居は跨がせないとまで言われたという。

「父が『手駒』としてしか私を見ていないことは解っていましたが……何というか、言葉になりませんね」

そうしているうちにいつの間に現れたのか、数人の人影が倒れた刺客を次々と護送用の馬車へと運び込んでいく。
丁寧には害防止の猿轡までかけての拘束である。

「閣下への報告は？」

「後ほど我らからおこう。そちらの手筈は？」

「計画通り何人かは逃しておいた」

「逃がしたのですか？」

「ああ、牽制の意味も込めてな。例え二藍一人狙っても、よほどのことが無い限り返り討ちにあうことを解らせておく必要がある」

最初に狙われたのは、女性である二藍だった。しかし、彼女は呪符を鮮やかな手並みで操り襲撃者を撃退したのだった。

「そちらの皆様はお怪我はありませんか？」

彼女の言葉に、男　カイル　は笑みをその口に乘せた。

「問題ないさ、姫さん。『騎士隊』はそんなにやわじゃない」

お上品でもないけどな。

その言葉が、揶揄を含んでいることに気がついて、彼らは苦笑しあつた。

「それじゃ、あとは任せた。『上品』な連中の二の舞はするなよ」

柘榴の言葉に口をゆがませ、しかし最後まで大きく騒ぐ事無く、男たちは去っていく。特殊な仕掛けでもしてあるのか、蹄の音も車の輪の音もしない。

ふと二藍が眉を顰めキースに近づいていった。

「義兄さま？」

慌てて手を引っ込めたキースだったが、時既に遅く、紫炎に軽く掴まれ袖をたくし上げられた。

「矢傷か…毒は？」

「問題ないです。わりとまっとうな刺客だったみたいですね。剣にも毒は塗っていなかったですし」

腰に下げたポシェットから薬を取り出し、手際よくキースの手当てをしながら二藍が応える。

刺客にまっとうも何も無い、と思わないわけではないが、そんな突っ込みをする勇者はこの場にはいなかった。

手当てを終えると小さく礼を言うキースの様子がおかしいことに気がついて、二藍は義兄の顔を見上げた。

「…申し訳ありません」

謝罪する彼に弟妹たちは怪訝そうな顔をする。

「貴方達を巻き込んでしまった」

彼と実家である侯爵家との関係が、皇太子やエンデルクを挟んで良くない事は知っていた。しかし、今まで彼らは表立って動いてこなかったのだ。紫炎たち3人がファリス家の養子になった時ですら、反対の声も様子を伺うこともしなかった。

この一年、何度か出会ったことはある。王宮の夜会や城内で。しかし、侯爵の方から彼らに声を掛けることは一度として無かったし、当然身分的に下の彼らから声を掛けるようなことはしない。

唯一言葉を交わした二藍も、主にエンデルクがエスコートしているときに、軽い目礼と月並みな挨拶をしたにすぎない。

彼らばかりではない、実弟であるキースに対しても同様な態度をとってきたのだ。

しかし、今回の襲撃のタイミングを考えると、巻き込んだのはどう考えても自分達であった。

（しかし…）

屋敷に帰る道すがら、紫炎は考える。

（エンデルクをに王位を与える…果たしてそれが本当の目的か？）主の言葉ではないが、彼らの目的がエンデルクに王位を継がせるのであれば、余りに杜撰な計画だ。

何といっても、当の本人にその気が全く無く、継承権を放棄する旨の言葉を誰憚る事無く口にする。兄王が『保険』の為、と理由付けして、不承不承継承権を持っているに過ぎない。

男性優位ではあるが、女性も王位継承権がある。下手なことをすれ

ば、形だけ一時王位につき、すぐに

マリーシアかナディアーヌに王位を譲ってしまいかねない。

（何が目的か…それをまず探らなくてはいけないな）

そう思いながら、最初は関わるつもりなど無かったこの国の情勢に、すっぱり頭から入り込んでいる自分達に呆れるしかない。

未だ天秤は傾いては居ない。

その言葉を心の中で反芻し、数歩先を歩く主に視線を向ける。

（この問題が片付いたら、天秤はどちらに傾くのだろう）

自分でも吉凶』判断しづらい予感を旨に、青年は小さく息を吐いた。

幕間 5

「ある、恋の話をしよう」

唐突に始められた『ソレ』に彼女は怪訝そうに顔を上げた。

自分の対面に腰を下ろしている青年の視線は、どこか遠くを見るものであった。

テーブルの上に置かれたカップをゆっくりと口につけ、喉を潤すと彼はゆっくりと語り始めた。

特殊な能力と家業を持つ一族の本家の極近い血筋に、久しぶりに女の子が生まれた。

遠い分家筋には何人かいたものの、何百年単位で生まれたことの無かった女子に一族は喜び、沸き立った。

しかし、その喜びは子供が成長していくに従って複雑なものになっていった。

類稀なる強い霊力。

本家に近ければ近いほど稀に生まれるその体質は、男子であれば諸手を上げ歓迎され、一族の総力を挙げて磨かれ、鍛え上げられたものだったろう。

しかし、その力を有するは女の子。

今はまだいい。しかし、年がたつにつれ、月経が始まり、やがては

子供を生む身。

その影響を知るものも、文献も何も残っていなかった。

古参の式神たちですら、女子でこのように高い能力を持つものは始めてみると口をそろえて言う。

彼女の力を抑えるため、一族は余り褒められない方法を取った。言霊で少女の心を縛り、萎縮させる。

いわば、劣等感を植え付けるものであった。

だが、少女の心を壊しては本末転倒というもの。

飴と鞭の使い分けと匙加減を間違えぬよう、細心の注意を持ってソレを行なった。

一族が有する中でも特に力ある式神ふたりが、自ら進んで少女の護りに下った。

本来なら、もつと強い式神を与えたかったが、そんなことをすれば少女の存在が知られてしまう。

幸い、彼女についた式神二人は、元は彼女の祖父に使えていたので、対外的には何とでも言い訳がついた。

蟻の這い出る隙間の無いほどの戒厳令であったとしても、秘め事は何処からともなく漏れるもの。

少女の存在を知ったある一族は、一人の少年に指示を与える。

少女を籠絡しろ。ソレが敵わぬならば、亡き者に、と。

彼もまた、その一族にとって切り札ともいえる存在であった。

少年の張った罫に、少女はあっさりとはまり込んだ。

初めての一族以外の近い存在に瞳を輝かせ、彼が見せる新しい世界に心ときめかせ。

友情が恋心に変わるまでに時間はさほど掛からなかった。

本来なら、彼の役目はここまでで、後は上手く言いくるめて、彼女を自分の一族の元に連れて行くだけのはずであった。しかし、何事にも不測の事態というものは起きる。

彼の場合は三つ。

一つは、彼女の存在が自分達と敵対する者に知られてしまったこと。

一つは不審に思った少女の一族が動き出したこと。

そして、最後の最大の事態。

少年もまた少女に恋をした事であった。

初めてで幼いが故に真っ直ぐな純粋な想い。

しかし、それは唐突に終わりを告げた。

少年の死、という形を取って。

何が起きたのか、少女も付き従う式神たちも黙して語らぬ。

しかし、その時から少女は変わった。

今まで見向きもしなかった（一族が故意に向かせなかった、ともいうが）仕事に積極的に参加するようになり、一族が望んだ形とは別の方向で才能を開花させた。

幼い頃から植えつけられた劣等感、相変わらず少女を苛んでいたが、それでも怯む事無く彼女は動いた。

しかし、決して無茶はせず、自分の限界を知り、身内や式神に頼ることとした。命を無駄にすることを何より厭ったのだ。

そして、以前はよく見せていた無邪気な笑顔は二度と見せることはなくなった。

すっかり冷めてしまった紅茶を入れ換え、律はソファに身を沈めた。礼を言っただけにしようとした渡辺は、おや？という表情を彼女に向けた。

「このハーブティ、彼が好きだったそうなんです。一緒に飲んでくれるうちに、自分も好物になったと言っていました」

瞠目する相手に律は複雑な表情を向けた。まさか自分がこの話を知っているなどと思っていなかったのだろう。

「目の前で、文字通り消えてなくなった、と言っていました。彼女を守る為、力量以上の術を使い、その負荷に体が耐えられず、骨も…魂すらも残さずに消えてしまったと、淋しげに笑って話してくれました」

初恋って実らないって本当ですね。

そう締めくくった彼女の笑顔を忘れることはないだろう。

自分の腕の中で消えていったその存在。本人にしかわからぬ思い。形は違うが、目の前で消えていく命へのあの感覚は、葎自身も経験したこと。だからこそ、自分達は友情を築く事が出来たのだ。

「きっとまた会える。そう信じています」

「…そうだな、きっと会える」

二藍が二人の式神と共に姿を消してから、一年の月日が過ぎた日のことだった。

1話

二藍は学生鞆の内ポケットのファスナーを開けると、そこから和紙に包まれた一枚の符を取り出した。

幾重にも包み込んだあるそれは、たった一枚の和紙を包むにはいささか嚴重だとも思われたが、それを見つめる彼女の表情も、明るいとはいえなかった。

その唇に微かに自嘲めいた笑いが浮かぶ。先日 of 襲撃以来、兄達の誰かが必ずこの家に居るようにしていたが、今日は偶然が重なって皆で払っている。家を出るとき、キースは屋敷に幾重にも防御結界を張り、自分達が戻るまで屋敷から出ないようにしつこいくらいに言い含めていったのだ。

それを違えるつもりは無い。

外界に向けて張った結界は、同時に自分がこれからやろうとしていることを、外にも漏らすことが無い、ということだ。やましいことをしているつもりは無いが、理由は事情を知らぬキースでさえも、この符が普通のもものと異なることにすぐ気が付く筈だ。

そして、それを使用する危険度も決して低くは無いことも。

紫炎や柘榴は言うに及ばず。しかし、彼らは、この符を彼女が持つてとは思っていない。

いや、あの時『彼』と共に消滅したと思っているだろう。

そつと周囲の和紙をはがすと、中から出てきたのは透けるほどに薄

く漉かれた和紙である。久しぶりに触れて、流れてくる強い『氣』に二藍は微かに眉を顰めた。

その表面には、どうやって記されたのか、細かい文様が透かし彫りになっていた。それを躊躇う事無くあらかじめむき出しにしていた二の腕に巻きつけると、瞬く間に腕の中に解けるように消えていった。

一瞬何かを堪えるような表情を浮かべると、すぐに大きな息を吐き疲れたようにソファにもたれる。

巻いてあった和紙を元のように丁寧に畳んで鞆の中に入れると、二藍は視線を天井に向けた。

最初に『おかしい』と感じたのいつの頃だったろう。

初めの頃は、周囲の話を聞いて、王弟と皇太子との継承問題だと思っていた。しかし、彼らの人物を知るにつけ、国の情勢を見るにつけ、何かが違うと感じ始めた。

貴族達が『皇太子派』と『王弟派』に分かれている。これは事実。

しかし、そのトップである人物二人が、周囲の思惑を全く意に介さず良好な関係を築いている以上、どちらに軍杯があがっても意味はない。ヘタな動きを見せれば、自分達に不利に働く可能性の方が高いのだ。

彼らの目的は何か。確かに、最初の頃エンデルクと食事をしたら毒が仕込まれていた。しかし、それは直接死に関わるモノではなかった。だとすると……。

「混乱：もしくは足止め、ですか？」

視線と思惑を『表向き』の理由に惹き付ける為の工作。そう考えれば、数々の疑問も合点がいく。

だが、真意は未だ闇の中だ。

自分達の家業の所為か、きな臭い話はいくつか知っている。一見平和そうに見えていたが、個人レベルから国家レベルまで陰謀や策謀はどこにでも転がっていた。

キースが言っていたように、主だった産業も何も無い、大きな変動の無い国。

しかし、それは本当だろうか。決して狭くは無いこの国の領土、未開の地など山ほどある。

「もう一度洗いなおしてみないといけませんか？」

小さく呟いて、傍らに置いてあったお茶を口にする。暫く考え事をしていたいと人払いを頼んであった為すっかり冷めてしまったそれを一気に飲むと、二藍は大きく息を吐いた。

「こうなると紫炎や柘榴が表立った仕事についてしまったのは痛いですね」

エンデルクに言えば、何らかの形で手を貸してくれるだろう。しかし、誰かの手を借りるというのは、それだけで外部との接触が起きることになる。

だから、自分達はできるだけ一族のみで動いていたのだ。もしくは、式神を使って。

「呼べるでしょうか？」

紫炎や柘榴のように元々「生き物」として存在し、何らかの事情で齢を経て「神」に転じた存在や、長きに渡って存在し、人間の想いを糧にして「モノ」が転じる「憑付神」はこの世界には居ない、と

されている。

「本当に？」

疑問が口に出る。紫炎や柘榴にこれほどの「気」と「力」を与えることの出来る世界だ。ならば、似たような存在があっても可笑しくはない。

その証拠に「神話」や自然崇拜にも似た「神々」がいる。

「と、なると『力』は神将クラスですか」

能力としては、トップクラスの本家の息子達でさえ扱いかねる『神将』クラス。

有名な話としては、安倍清明の十二神将がいるが、自分たちに言わせれば、あんな存在を十二人も従えた気持ちが出来ない、である。

確かに、味方にすれば心強い存在ではあるが…。

「相談した方がいいですね。三人がかりなら、何とかするでしょうから」

そう呟くと、立ち上がって屋敷の書庫へと足を運んだ。

この世界の神話体系と、神々の位置づけを調べる為に。

1 話（後書き）

新章です。少しナリを潜めていた二藍の本性が出てまいります。
ゆるゆると終盤に向けて動き出し始めます。

2話

召喚魔法は表向き禁呪となっではいるが、モナドが咎め無しだったように、ばれなきやいい、らしい。

いい加減な、と苦い思いで呆れる彼らに、成功例がないから罰則も起きたことが無いからだ、訳の解らない屁理屈を言われてしまった。

だったら、どうして召喚魔法が禁呪となっているのか。

今後、調べる課題がまた一つ増えたと思う二藍だった。

それを教えてくれたキースは自分も参加したがったのだが、彼ほどに魔力が強い人間が居ては、呼べる者も呼べないと弟妹に揃って反対された。

エンデルクも同様の理由で参加を拒否して。…後々の根回し為、事情は打ち明けはしたが。

彼らは召喚されたときに降り立った、森の中に来ていた。

キース曰く、この森は古くから不可侵の森といわれ人の手が殆ど入ったことが無い場所との事。

ある程度は侵入できるが、一定の場所を避けるような構造になっている…つまり、無意識のうちに人がそこを避けるため境界が張られているのか、何か術が施されているのか見当がつかないらしい。

何故、それを彼が気がついたかといえば、二藍たちを迎えに行くときに、一瞬の「ゆらめき」を見たからだそうだ。

まあ、その後の騒動で綺麗さっぱり忘れていたらしいが。

「ここで、一つ疑問が生じます。私達を呼んだのは本当にモナドなのでしょうか？」

召喚の儀式は、それなりの準備が必要で、実際彼は呼び寄せたモノが現れる予定だった部屋に男はいたという。

だが、そこに何も現れず、たまたま学院に用事があったキースが、モナドの不穏な魔法の残滓と、二藍が紫炎を呼んだ時に起こった術の波動を感じ動いたらしい。

「義兄さま御自身がおっしゃっていたように、モナドという男の魔力はたいしたことが無いのは私達も知っています。あの程度の『力』の持ち主が、多次元から召喚などという大技ができるでしょうか？」

二藍たちの身分が確定した頃、また妙な動きを見せた男に流石の王妃も底い立てする気持ちを無くし、学院長の役職の剥奪と、暫くの間謹慎して置くように言い渡したのだった。

証拠集めの為、彼らがひっそりと動いたのは言うまでも無い。

「発動をさせたのはモナドかもしれませんが、しかし何らかの『力』がそれを補助した、と言った方が私には自然に思えます」

「確かに。それにあの男ごときに呼ばれたというのは、正直腹が立つ」

徹底的に破滅させようと考えていたが、知れば知るほど馬鹿馬鹿し

くなるような男なのだ。

労力と時間が勿体無いと、適当に切り上げてエンデルクに報告した。

それでも、辞職、謹慎という貴族にとって不名誉な罰則が与えられた魔道師の学園長という身分を隠れ蓑に色々やってきたことが明るみに出ただけだが、叩けばもっと埃は出てくるだろう…ただし、一つはたいしたことの無いモノである。

それでも、数が多ければ罪にはなる。言い換えれば、辞職、謹慎程度で済む罪だということだ。

「ここだな」

ある程度進んだところで紫炎が立ち止まった。

「面白い構造になっているな。この先へ進もうとすると、無意識に今来た道か、大きく迂回して別の道に出るようになっていく」

「あと、幻惑の術も掛けてありますね。このまま歩けば、出ることは間違いないので、森自体の大きさの認識を誤らせる事になっています。凄いですね、複雑な術が幾重にも重なって掛けてあります」

紫炎と二藍がゆっくり感覚を伸ばして魔法を探る。

「こちらの魔法が全て無効になる魔術も併用されているな…なんつー念の入れようだ」

ただ、と柘榴は呟う。向こうの術には対応していない、と。

「でしたら、これを」

渡された和紙を手に取り彼らは眼を見張る。

「二藍：いいのか？」

につこり微笑む少女を見て、一瞬痛ましい瞳をしてから、紫炎も口の端を上げた。柘榴も黙ってそれを受け取りポケットにしまい込んだが、いつもの彼らしからぬ丁寧な動作だった。

「大事に使わせてもらう」

「はい」

それは、かの少年が持っていたもの。今では唯一と言える、彼女が手に出来る彼の形見。それを「符」に使ったのだ。

それを手に持ち、静かに動かす。向こうの世界の同族たちが見れば、その動きにあわせ、薄い紫の軌跡がある形を生んでいることに気がついただろう。

「ウン」

書き終った後に、不思議な形で腕を交差させると。その現れたのは一つの獣道の痕跡だった。

「それなりに古い時代には行き来があった、ということですか？」
符を大事そうにポケットにしまうと、紫炎は振り返る。

「長くは持たん：いくぞ」

「紫炎の大咲明王呪でも長く持たないって：どんな大物だよ」

二藍を真ん中に彼らは森の奥へと進んでいった。

2 話（後書き）

いつもより少し短めですが、キリが良いのでこの辺りで。

3話

その「神氣」は淀んでいた。

いや、「神氣」に「淀む」という表現は的確ではないかもしれないが、そうとしか言い表せない「淀み」かただった。

「封じられたのならば、兎も角、自ら檻に閉じこもった割には…なんだ、これは？」

呆れた柘榴の言葉に、紫炎も二藍も無言を返すしかない。

暫くの間の後、ようやく紫炎が口を開く。

「信仰だな」

式神の言葉に少女も頷く。

「自らを封じ、無き者にしてしまえば、自然人の信じる心も遠ざけてしまいます。動かない力はその場に溜まるのみ。それが『淀んだ』という印象に繋がるのだと思います」

そう言って、紫炎の前に右手を差し出すと、青年はその人差し指を軽く噛む。微かに少女は眉を顰め、手にした符に指ににじんだ血で文字を書いた。

「ククク」

喉で柘榴が嗤う。周囲の気配が微妙に変わったからだ。

「餓えているな」

「仕方なかるう。いつの時代からかは知らんが、己自身で封をし、閉じこもったんだ。腹も減る」

何かが違うと思いつながら、少女は淀みの中心へと近づき、その符を置いた。

「おーおー、葛藤していらっしやる」

柘榴は二藍の手をとり、先ほど紫炎が傷をつけた場所に舌を這わした。すると、見る見る傷跡が消えていく。傍で見ていると中々艶かしい姿だが、やっている者もやられている者も、艶めいた気配が全く無かった。

周囲の淀みは密度を増していくばかり。しかし、なかなか『餌』に喰らいついてはくれない。

「まあ、気持ちは解らない訳ではないが、な。自らを封印した者だ。そう簡単に現れる事は矜持が許さぬ…しかし、二藍の気は極上だ。

『信心』ではなくても、活力となりえる」

「あと、もう一押し、というところですか？」
首を傾げる少女に青年は頷いた。

「それでは」

「ぱあん、と音を響かせ拍手を打つ。

「六根清浄」

「ぱあ、っと白い光が二藍を包む。

「ふるえ ゆらゆら ふるえ ゆらゆらとふるえ」

「しゃん、と鈴の音がする。こちらの鍛冶師に造りを説明し特注で作ってもらったものだ。

周囲の淀みが少しずつ薄らいでいく。

「逆手にでたか」

苦笑まじりの紫炎に柘榴が問うような視線を向けた。

「『餌』で釣るのではなく、周囲を抜って出てこさせる。負荷は大きい、神の矜持に敬意を払ったんだろう。…柘榴」

「解っている。お出ましたな」

「とたんに恐ろしいほどの神気が、先ほど符をおいた場所を中心に辺

りに満ちる。陽炎のように不確かな「それ」は陰影でかろうじて人型だとわかるのみ。

『何故私の眠りを妨げる、異世界の者よ』

「お力をお貸しいただきたく」

ふ、と嘲る様な気配が帰ってくる。

『無理に眠りから引き剥がしたそなたたちの為に？笑止』

「ならば問う。この世界を創る一環を担いながら、何故放置した」

『獣ごときに答える義務は無い』

その瞬間、気配が変わったのは侮辱された紫炎ではなく、二藍だった。

うわちゃあ、と柘榴が片手で顔を覆う。紫炎ですら、天を仰ぎ見る。

『何？』

流石に、少し驚いた気配が二藍に向けられた。日頃穏やかな少女が纏うは、漆黒のオーラ。

「今なんとおっしゃいました？」

『獣ごときの質問に答える義務は無い、と申した』

律儀に繰り返し答える相手に、少女は視線を向けた。

「相手を間違えました、紫炎。これは神気を纏ってはいますが、『神』ではありません」

『娘、もう一度申してみよ』

怒りを微かににじませて、それは二藍に向き直った。漂う怒気は、抑えているにも関わらず、周囲から生き物の気配を遠ざける。唯人であれば、意識を保っているのも難しい。

「神ならば、創りしモノに平等にあらねばなりません。『獣ごとき』と差別をした時点で、あなたはすでに神ではない。…他者が認めても、私は認めません」

袖口から、いつの間に出したのか一枚の札。

『ほう、そのような紙切れ一枚で、我をどうにかしようと思うか』
紫炎と柘榴が動くのを目の端に捕らえながら、ソレは微かに嗤う。

「三方結界」

少女がつぶやくと、二藍、紫炎、柘榴を結んだ線上に結界が張られた。

微かにうなる相手に、柘榴がにやり、と口をゆがめる。

「アンタの言う『獣ごとき』でも、これくらいはできるんだぜ？」

『…貴様』

札を目の高さまで持ち上げ、少女は相手を見据える。

「調伏いたします」

4話（前書き）

ぜいぜいぜい。お待ちせいたしました。

4話

時代を経るにつれ、言葉の意味合いが違ってくるように術式も様変わりしてくる。

大元は同じであっただろうが、幾つにも枝分かれた術は、それぞれが得意とする分野で『進化』していく。

持っていた鈴を再び鳴らし。二藍は目の前の相手を見据えた。

『符』が無ければ、何もできないという思い込みは、その反対の側面を示す。本人は自覚していないが、彼女は『符』さえあれば、最強だという事実を周囲に植えつけられて育っていたのだ。

しかも、彼女の師：『飴』役はここ数代のうちでも、抜きん出た実力を持つ本家の三兄弟だ。彼女が幼い頃、同じ敷地内に住んでいた彼らは、自分たちは『鞭役には適さない』と、半ばごり押しに近い形で、彼女を溺愛しまくった。男兄弟で、妹が欲しかったというのが大きな理由らしい。

何にしろ、実力者が揃って、手取り足取り教えたのだ、飴方向の彼女の實力は半端ではない。

手にするのは、何枚かの紙。キースに頼んで用意してもらったそれに記されているのは、九耀一族が長年に渡って積み上げてきた術式の数々。

自分のことをなんと言われても動じない彼女だが、親しい相手を悪く言う相手には容赦は無い。しかも、自分の立場を省みず一方的に言う相手は特に、だ。

「縛」

符が青白く輝き、相手の周囲に円形の結界を張る。にやりと笑って、それを弾こうとした時、初めて男の表情が変わった。

『なに?』

「やはり、あっちの術は効く、か」

うつすらと笑いを浮かべて紫炎が相手を見た。すると、柘榴がそちらに視線を向けて口を開く。

「紫炎。このまま結界を広げれるか?」

眼差しだけで問う主に式神は浮かべた笑いを剣呑なものへと変化した。

「ここで本気になって力を使ったことが無かったからな。正直加減がわからないんで限界を試してみたい。こいつ相手に遠慮は要らねえみたいだしな」

『下郎の分際で』

「畜生から格上げになったみたいだし?」

くくくつ、と喉で笑う男に呆れたようなため息が二つ返ってきた。

「護りは任せたぜ、紫炎」

「…承知。このまま暫くとどめておいてくれ。結界を張りなおす」

「はい」

『なっ』

少女の持つ符が不思議な色合いを浮かべる。見るものが見れば解るその色の名を「二藍」という。

拘束の力が強くなる。少し驚いた顔をした相手であったが、口の端をゆるりとあげた。

『この程度か?』

「いいえ」

あつさりと答える少女に『神』は目を見開く。気が付くと自分が張った結界とは異なる力が周囲に満ちていた。

「アンタが張った結界の内側に沿ってもう一つ結界を張っただけだ。二重の構造で強化したから、ここで何が起ころうとも外に洩れる事はないだけさ。…さて」

小さく何か呟いて少女は符を懷に仕舞った。すると、いままで掛けてあった拘束が解け、その体が軽く揺らいだ。その隙に、紫炎は二藍を後ろに庇い、自分たちの周囲にも結界を張る。

『貴様等っ』

「貴様：ね。くく、意味合いは違うが、俺たちの世界では悪い言葉ではなかったな：昔の話だが」

「あ、その前に」

気が付いたように二藍が前に進み出た。その隙を逃さず『神』が魔法を放つが、紫炎が腕を差し出ただけで霧散した。

「…ふむ、成る程な」

反動の力を感じて青年は嗤う。

「早めに片付ける。上手くすれば、もう2、3釣れるやもしれん」

『笑止』

「…うつせえよ、おっさん。どうした？二藍」

につこりと緊張感の欠片もなく少女は笑い、『神』を見据え、再び符を出した。

「御名を頂けますか？」

『ガイア』

思わず答えたガイアは、自分が少女の言霊に操られた事に気づき、怒りを滲ませる。

「…『ガイア』…大地ですか。地属性、ですね」

につこり、少女は笑い、柘榴も呆れたような笑みを浮かべる。

「木属性、か。オン・ソンバ・ニソンバ・ウン・バザラ・ウン・パツタ」

薬指を出して柘榴は相手へと向ける。

「木剋土」

木は根を張り、土を締め付け養分を吸い取る。五行相剋の思想。そして、彼が唱えたのは降三世明王の真言。

ガイアの周囲から木の根が現れ、その体を締め付けていった。

『なんだ…とっ！体が動かんっ！』

「本気を出すまでなかったか」

溜息交じりで柘榴が呟き、二藍へと視線を送った。

「縛。仕令に下れ」

二藍が再び出した符を、ガイアにむける。

『なに…？』

次の瞬間、その姿が消え、少女の手には淡く光る符が残された。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4528o/>

ふたおとの足跡

2011年9月8日11時57分発行